筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日本語の複合格助詞と中国語の介詞の対照研究

―「が」格・「を」格と置換可能な複合格助詞を中心に―

馬　小兵

2002 年 7 月 25 日

凡　例

1）本論文では、中国語の語句などを“　”に入れて示す。

2）先行研究の引用部分が長い場合は、以下のように上下二行開け、1字下げる。

　傅雨賢他（1997）は、「方向」を表す“**对**”について次のように説明している。

“一般来说，……因而一般不出现在由‘对$_1$’构成的语句中。”

　以上をまとめると、・・・

3）中国語の“**介词宾语**”（“**对他**…”　“**关于他**…”　“**作为他**…”）について、本論文では便宜的に「介詞の賓語」と和訳する。

4）本論文では、取り上げる中国語の介詞と日本語の複合格助詞について多くの用例を調査したが、それらは本文中で「用例調査」と称する。使用した文献の詳細は、巻末の用例資料1と2に示す。

5）本論文では、できるだけ日本語と中国語とで対応する用例を使用する。日本語または中国語の一方にしかない用例については、本稿筆者がもう一方の訳文を作成する。その場合もし誤訳があれば、本稿筆者の責任である。

6）文中用例・訳文及び出典資料名については、原文、出典資料名、訳文、訳文の出典資料名という順に表記する。出典資料名を表記しない訳文または

用例は、本稿筆者が作成したものである。

「結婚以来、夫に対して憎悪しか積み上げてこなかった妻が、最近急激に変化してきた。」（青春の証明・ｐ94）

“ 结婚以来，妻子对丈夫的厌烦怨恨一直在不断地加深，可最近却来了个一百八十度的大转弯。”（青春的证明・p129）

“ 对于(○ 对)这一类的问题，我们必须保持清醒的头脑，……”

（**我的父亲邓小平**·p377）

「この種の問題に対しては、われわれは冷静な頭脳を保持しなければならない。」（我が父・鄧小平・p59）

また、原文の出典資料名と訳文の出典資料名が、同じである場合は、以下のように、表記する。

（黒雪（原））
（黒雪（訳））

7）日本語の用例では、例えば複合格助詞「に対して」が他の格助詞などと置換できる場合は、「～に対して（○を）～」、置換できない場合は、「～に対して（×を）～」、置き換えると不自然になる場合は、「～に対して（？？を）～」、置換できる要素が二つ以上存在する場合は、「～に対して（○を／○に）～」というように、表記する。

8）用例の頭に付した*の印は、その表現が不適格（非文法的）であることを示す。

＊ “张炳生脸上发热了，下意识看去陆根兴。”

目　次

序　章 1
1. 本論文の目的 1
2. 日本語の複合格助詞と中国語の介詞の認定問題 3
3. 本論文の研究範囲――日本語の格、格助詞、格関係、格体制との関連及び中国語の格と介詞との関連 9
4. 「格助詞」と「格体制」 10
5. 本論文の構成と概要 13

第一章　中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」 16
1. “对”と「に対して」の意味 16
2. 中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」の用法の分類 18
2･1　“对”の用法の分類 18
2･2　「に対して」の用法の分類 18
3. “?”の用法と、「に対して」の対応状況 19
3･1　「方向」を表す“对”と「に対して」 19
3･1･1　「方向」を表す“对”について 19
3･1･2　「に対して」と方向 22
3･2　「対象･目標」・「対処関係」を表す“对”と「に対して」 25
3･2･1　「対象･目標」を表す“对”について 25
3･2･1･1「対象･目標」を表す“对”の賓語と述語動詞との意味関係 25
3･2･1･2　「対象･目標」を表す“对”の構文的特徴について 29
3･2･1･3　「方向」を表す“对”と「対象･目標」を表す“对”との違い 30
3･2･2　「対処関係」を表す“对”について 31
3･2･2･1　「対処関係」を表す“对”文の述語 32
3･2･2･2「対処関係」を表す“对”の賓語と述語動詞との意味関係 33
3･2･3　「対象･目標」を表す“对”と「対処関係」を表す“对”との違い 37
3･2･4　「に対して」と、「対象･目標」・「対処関係」 40
3･2･4･1　「に対して」に先行する名詞と述語動詞との意味関係 40
3･2･4･2　「に対して」の述語 42
3･3　「関連関係」を表す“对”と「に対して」 45

3･3･1　「関連関係」を表す“对”の構文特徴═══45
3･3･2　「に対して」と「関連関係」═══46
4. 「に対して」の用法分類と“对”═══47
4･1　「を」と互換できるタイプの「に対して」の述語動詞について═══47
4･2　「に」と互換できるタイプの「に対して」について═══49
4･3　他の格助詞と互換不可なタイプの「に対して」について═══50
4･4　「N+数量詞+に対して」と「･･･のに対して」について═══52
5. まとめ═══53

第二章　日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“关于”═══56
1. 「について」と“关于”═══56
2. 「について」と“关于”についての先行研究と問題点═══57
2･1　「について」に関しての先行研究と問題点═══57
2･2　“关于”についての先行研究と問題点═══61
3. 「について」と「については」═══62
3･1　「について」の用法═══62
3･2　「について」と「については」═══62
4. 「について」の用法の分類と意味═══62
4･1　「について」の用法の分類═══62
4･2　「について」と他の格助詞が交換可能なタイプ═══63
4･2･1　「について」と「対象ヲ格」═══63
4･2･2　「について」と「対象ガ格」═══67
4･2･3　「について」と「ニ格」═══69
4･3　「について」とそれに先行する名詞全体が述部を修飾するタイプ═══71
4･4　「について」の意味═══72
5. 「については」の意味と用法═══73
6. “关于”についての用法分類═══76
7. 「について」と“关于”との対応関係═══79
8. まとめ═══80

第三章　中国語の介詞“作为”と日本語の複合格助詞「として」═══84
1. “作为”と「として」の意味═══84
2. “作为”についての先行研究と問題点═══87
2･1　“作为”の意味と用法═══87

2･2　“作为”の用法分類═══87
2･2･1　状況語（連用修飾語）になる“作为”について═══87
2･2･2　連体修飾語になる“作为…的”について═══91
2･2･3　主体の役割を果たす“作为”について═══92
2･2･4　基準を表す“作为…来说”について═══93
3.　「として」についての先行研究と問題点═══94
3･1　「として」の意味と用法═══94
3･2　「として」に関する用法分類═══94
3･3　「としては」の用法について═══95
4.　“作为”と「として」についての用法の分類═══101
4･1　“作为”についての意味・用法と用法の分類═══101
4･1･1　“作为”の意味・用法═══101
4･1･2　“作为”についての用法分類═══101
4･1･2･1　状況語（連用修飾語）になる“作为”の用法分類═══101
4･1･2･2　連体修飾語になる“作为”について═══105
4･1･2･3　主語の役割を果たす“作为”について═══106
4･2　「として」についての意味・用法と用法の分類═══107
4･2･1　「として」についての意味・用法═══107
4･2･1･1　「全然…ない」という意味を表す「として」について═══108
4･2･1･2　「資格・立場」を表す「として」について═══108
4･2･2　「として」の用法分類═══109
4･2･2･1　単なる「資格・立場」を表す「として」タイプ═══109
4･2･2･2　「判断主体化された立場」を表す「としては」タイプについて═══114
4･2･2･3　「平均値をもつものの集合」を表す「としては」タイプについて═══117
4･2･3　「として」と「としては」═══117
5.“作为”と「として」との対応═══118
6.　まとめ═══122

第四章　中国語の“对+N_1+的+N_2”と日本語の「N_1+に対する+N_2」について═══127
1.　“对”と「に対して」の連体形═══127
2.　“对+N_1+的+N_2”についての先行研究と問題点═══129
2･1　“对+N_1+的+N_2”の用法分類═══129
2･2　“对+N_1+的”の修飾可能な「N_2」（N・V・A）の種類═══133

2･2･1　“対+N_1+的”の修飾可能な名詞（「N_2」）134
2･2･2　“対+N_1+的”の修飾可能な動名詞（「N_2」）137
2･3　状語（連用修飾語）から定語（連体修飾語）への転換143
3.　「N_1に対するN_2」について144
3･1　「N_1に対するN_2」についての用法分類144
3･2　「N_1に対するN_2」の用法分類について146
3･2･1　「N_1に対するＮ」（N_2=名詞）146
3･2･2　「N_1に対するＶ」（N_2=動名詞）147
3･2･3　「N_1に対するＡ」（N_2=形容詞派生の名詞）149
3･3　連用から連体へ150
4.　“対+N_1+的+N_2”と「N_1に対するN_2」との対応152
5.　まとめ155

結　章159

1.　本論文のまとめ159
2.　本論文の成果と両国語の学習162
3.　今後の課題163

参考文献165

用例資料175

本論文の構成と既発表論文との関係178

序　章

１．本論文の目的

これまでの日本語の複合格助詞に関する研究においては、以下にあげるような二つの問題がみられる。

Ａ．各複合格助詞の用法に関する詳細な説明、特にそれぞれの複合格助詞の用法の分類、及び（単独の）格助詞との交替などについてはあまり論じられていない。[1)]
Ｂ．中国語との比較研究がほとんどなされていない。

たとえば、砂川（1987）は、複合助詞を定義・分類し、複合助詞の特性について、意味、構文などの角度から詳細に分析･説明しているものの、各複合格助詞の用法の分類や分析にはあまり触れていない。

また、森田・松木（1989）も、「用例中心・複合辞の意味と用法」をサブ･タイトルに、助詞と同様の働きをする表現を、格助詞、係助詞、副助詞、接続助詞、並立助詞、終助詞（の働きをするもの）などの項目に分けて、複合辞（複合助詞）について、広範囲にわたり説明してはいるが、個々の複合格助詞の用法に関しては詳細な説明を欠いている。その用法分類についても、ほとんどふれられていない。

グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）は、連語表現について大きな研究成果を挙げ、多くの重要な知見を示しているものの、やはり、各複合格助詞の用法の分類や分析は不十分である。

さらに、上記の研究を含めて、日本語の複合格助詞と、中国語の介詞との対照研究は従来あまりなされていない（日本語の複合格助詞と中国語の介詞との対照研究が注目される理由については後にふれる）。

一方、中国語の介詞に関する研究は、1950 年代以降、特に 1980 年代から盛んになり、大きな成果を挙げている。その代表的なものとして、北京大学中文系《**现代汉语虚词例释**》(1982)、陸儉明・馬真《**现代汉语虚词散论**》(1995)、

[1] この問題について２節でも論じる。

傅雨賢他《**现代汉语介词研究**》(1997)、候学超編《**现代汉语虚词词典**》(1998)、張誼生《**现代汉语虚词**》(2000) などが挙げられている。

しかし、上記の研究には以下のような問題点があると思われる。

A．各介詞の個々の用法に関する詳細な研究が不足している。
B．日本語の複合格助詞との比較研究がほとんどなされていない。

Aについて、具体的に説明すると、本論文で論じる“**关于**”、“**作为**”の個々の用法に関しては、先行研究ではあまりなされていない。部分的な言及はみられるが、そこには以下のような問題点が存在している。
例えば、

（1）a “**张虎作为特级教师参加了那次座谈会。**”

「張虎さんは特級教師としてその座談会に参加した。」

b “**把自己的研究所得作为一家之言贡献给读者。**”

「自分たちの研究を一家の言として読者に献げる。」

(1)において、(1)a の「“**作为**”+賓語」(“**作为特级教师**”「特級教師として」)は文の主語(“**张虎**”「張虎さん」)と関連するのに対し、(1)b の「“**作为**”+賓語」(“**作为一家之言**”「一家の言として」)は、文の目的語(“自己的研究所得”「自分たちの研究」)と関連している。先行研究では、(1) a のようなタイプを指摘するのみであり、(1)b のようなタイプについては説明されていない。格関係に注目するならば、「“**作为**”+賓語」が文の主語と関連するタイプと、「“**作为**”+賓語」が文の目的語と関連するタイプとの２タイプに分けられるのである。

Ｂについて、具体的に説明すると、中国初且つ唯一[2] と言われている《漢日比較語法》(1999)（『中日比較文法』）でも、“**对**”と「に対して」との対応関係や、“**作为**”と「として」との対応関係についてさえ触れていない。“**关于**”についても、同書は“**关于、有关、就**／について〔は〕”と説明しているが、(2)に示すような、「について」と「については」との区別には気づいていないようである。

（２）a「東廊下から裏庭へ出るドアについては（×について）、いったんタオルでノブを拭ったあと、卓夫が廻した。」

b “至于（×关于）貫叫恠脆宥吏朔垪議壇，弯健喘谷渚価阻岻朔，廬強阻壇委。”

「については」は、「について」と異なり、具体的な動作を表す動作動詞（「廻す」）と共起し、中国語の“**关于**”とではなく、“**至于**”に対応すると考えられる。

本論文は、日本語の複合格助詞と、中国語の介詞に関する研究に存在する諸問題を究明することを目的とする。日本語の複合格助詞と中国語の介詞とを対照研究することの意義について、以下の２点があると本稿筆者は考える。

Ａ．上述のように、日本語の複合格助詞と中国語の介詞との対照研究は、未開拓の分野であるといっても過言ではないので、その諸用法を比較・究明することは、日本語の複合格助詞と中国語の介詞のそれぞれの研究に貢献できる。

Ｂ．本稿筆者は、日中両国語の教育現場で日本語の複合格助詞と中国語の介詞は、それぞれ中国人の日本語学習者と、日本人の中国語学習者にとっては、学習上の難関であると痛感している。よって、その対照研究は、

[2]中国山東大学日本研究中心主任教授・中国日本文学研究会副会長金中は、“**類似這部《漢日比較語法》的著作，無論在中國或日本，都尚未見有問世，……**”「《漢日比較語法》のような著作は、中国でも日本でもまだ出版されていない。･･･」と 同書の推薦書に明記している。

両言語の学習者が複合格助詞と介詞という学習上の難関を突破する上で役立つし、ひいては日本語教育と中国語教育に貢献できる。

２．日本語の複合格助詞と中国語の介詞の認定問題

日本語研究において、複合助詞はどのように定義されるのか。

砂川（1987）は、「複数の語が結合して助詞と同じような働きを持つようになった形式（～からには、～によって、～とともに、など）を、複合助詞と呼ぶ」とし、また、松木（1995）は、「いくつかの語が複合して、ひとまとまり形で助詞と同様の機能を果たしている表現を『複合助詞』と呼ぶ」と説明している。しかし、「助詞と同じような機能」とは何か、「ひとまとまりの形」になっていることをどのように量るか、など、複合助詞の認定基準についてはほとんど触れていない。仁田義雄（1982）も、『日本語教育事典』「助詞」の項において、「について、に対して、として」などを「複合格助詞」と呼んでいるものの、やはり具体的な定義を下していない。

これに対して、塚本（1991）は、複合格助詞の形態的特徴や統語的特徴、意味的特徴について詳細に検討を加えている。以下にその要点を一～三としてまとめて紹介しておく。

一、複合格助詞の形態的特徴

Ａ．複合格助詞の種類について、

「複合格助詞」とは、（ア）動詞の連用形に「て」が付着した形態が何か単一の連用格助詞に後続したものと、（イ）連体格助詞或いは連用格助詞にかなり形式化した名詞が続き、またそのうしろに単一の連用格助詞が来たもの、の二つに大別される……

（ア）a～において、～について、～に当たって、～に際して、～に関して、～に対して、～にとって、～にわたって、～によって
b～をおいて、～を指して、～をして、～を目指して、～をもって
c～でもって
d～として

（イ）a～のために、～のくせに、～のおかげで、～のせいで、
b～といっしょに、～とともに（79 ページ）

Ｂ．動詞が含まれていると考えられる点について、

一つは、動詞の格支配の特徴を受け継いでいる、という点である。例えば、「～について」や「～に当たって」は、「つく」「当たる」が着点を含意する動詞であるおかげで、「に」が現れ……
もうひとつは、丁寧語形式に取って代わることがある、という点である。…「～につきまして」、…「～としまして」といったように、動詞に付着する丁寧語形式「ます」を用いて表現することが出来る。(79 ページ)

C．単なる「格助詞+動詞のテ形」という結び付きと異なる点について、
一つは、係助詞、副助詞などを挿入することは出来ない、という点である（例、省略)。二点目として、動詞部分の表記の違いが挙げられる。〈付着〉或いは〈到着〉という実質的な意味を有する場合には、「～に付いて」「～に着いて」のように動詞部分を漢字で表記することが多いが、複合格助詞として使用される場合には、「～について」のようにひらがなで表記するのが普通である。(79 ページ～80 ページ)

D．複合格助詞の連体表現について、
（ア）連体格助詞の「の」を付加する方法[（例）～に関しての…]と（イ）動詞部分を連体形にする方法[（例）～に関する…]、二種類がある。(80 ページ～81 ページ)

二、複合格助詞の統語的特徴について

A．単一の格助詞との交替現象について、
まず一つ目として指摘できる統語的特徴は、いくつかの複合格助詞が単一の格助詞に置き換えられる場合が多い、ということである。
具体的に、「～において」と「で」、「～について」「～に関して」と「を」、「～に対して」と「に」、「～にとって」と「に」、「～によって」と「に」、「～をおいて」と「より」、「～を指して」「～を目指して」と「へ」、「～をして」と「に」、「～をもって」と「で」、「～でもって」と「で」、「～として」と「に」「で」、「～のために」と「に」、「～とともに」「～といっしょに」と「と」などが挙げられている。(81 ページ～84 ページ)

B．動詞の結合価に関する問題について、
寺村（一九八二：一七九－一八五）は、どのような述語にとっても副次的であるとする補語を十四種類挙げており、「～によって」「～に対し

て」「～につれて」「～に関して」「～にとって」「～について」「～として」「～とともに」といった複合格助詞で表示された補語もその中の一つに含まれている。しかし、その複合格助詞の何種類かが、それが取る述語によっては必須補語と見なすべき場合があることを本稿では主張する。（84 ページ）

三、複合格助詞の意味的特徴について

Ａ．動詞部分の意味の実質性の段階について、３段階にわけ、
Ａのグループ（「～に関して」「～に対して」「～を指して」「～を目指して」）は、動詞部分の意味の実質性を比較的保持しているものであるのに対して、Ｃグループ（「～において」「～について」「～に当たって」「～に際して」「～にわたって」「～によって」「～をもって」）は、かなりそれを欠いてしまっているものである。また、Ｂのグループ（「～にとって」「～をおいて」「～をして」「～でもって」「～として」）は、ＡとＣの中間に位置付けられているものである。(88 ページ)
Ｂ．複合格助詞と単一の格助詞の使い分けについて、
複合格助詞と単一の格助詞のどちらでも用いられるような環境で、いかなる場合に前者を用い、また、いかなる場合に後者を用いるのか、といったその使い分けを、二つの事例を取り上げて考察する。
具体的に、「～によって」と「に」、「～について」「～に関して」と「を」を挙げている。結論として、「～によって」と「に」では、動詞や前置される名詞類など文における情報から判断できる Agentivity といった特性が低いと、「に」の方は使えず、また、「～について」「～に関して」と「を」では前置される名詞類の「内容性」といった特性が低いと、「を」の方は使えない、ということが明らかになった。(90 ページ～93 ページ)[3)]

しかし、塚本（1991）の研究にも、以下（１～３）のような問題点が指摘できる。

１．個々の複合格助詞の用法に関して、分析が不十分である。たとえば、(3) が示すように、「について」に関して、「について」と「については」との違い、「と

[3] 詳しくは、塚本（1991）を参照されたい。

して」に関して、「として」と「としては」との違いについては、説明されていない。（三のＡ）

（３）a「日本猿については、捕獲して山に返しますが、」
　　a′ ?? 「日本猿について、捕獲して山に返しますが、」
　　b「私としては、どうしてもやりたい。」
　　b′ ??「私として、どうしてもやりたい。」

２． 単一の格助詞との交替現象について、詳細に論じてはいるが、まだ十分とはいえない。たとえば、(4)、(5)、(6) が示すように、「に対して」と対象「ヲ」格、「について」と対象「ガ」格、「ニ」格との交替現象については、説明されていない。（二のＡ）

（４）a「彼に対して（を）警戒する。」
　　b「彼を警戒する。」

（５）a「彼はそれについて（に）触れなかった。」
　　b「彼はそれに触れなかった。」

（６）a「それについて（が）まだ分からない。」
　　b「それがまだ分からない。」

３． 複合格助詞の連体表現について、「（ア）連体格助詞の「の」を付加する方法［（例）～に関しての…］と、（イ）動詞部分を連体形にする方法［（例）～に関する…］、二種類がある。」と指摘したものの、連用用法と連体用法がどのように対応しているのか、説明されていない。（一のＤ）

本論文の複合格助詞の認定基準

「複数の語（格助詞、動詞連用形、「て」など）が結合して単独の助詞と同じような働きをするもの」という定義では、「（道具）で」と交代する可能性のある「～を使って」も複合助詞となる。「単独の助詞と同じような働き」をどう見なすかによってもその範囲は異なってくる。部分的に単独の助詞に置き換えられる用法があれば、複合助詞と認めてよいのか、その用法のみを複合助詞と考えるかも問題になる。

ここでは、次の二つの基準により、複合格助詞の認定を行う。

A．「格助詞相当」の機能を果たし、動詞部分の実質的な意味を失っているかどうか

これは、係助詞、副助詞などを挿入することが出来るかどうかでテストすることができる。

「について」「に関して」「に対して」「として」などは、「*研究にはついて／研究については」「*教師にさえ対して／教師に対してさえ」「*親ともして／親としても」のように係助詞や副助詞を入れることができない。これに対し、「～を使って」は「非合法な手段さえ使って」のように挿入できる場合がある。「について」「に関して」「に対して」「として」などは、ひとまとまり性がつよいため、副助詞や係助詞が挿入できず、後続させるだけであり、こちらの方をより典型的な複合格助詞と見なす。[4)]

B．日本語の格助詞と同様の機能を果たしているかどうか

これは、格助詞について従来指摘された次のような特質[5)] が当てはまるか否かでテストすることができる。

a．体言もしくは体言に準ずる語にしかつかない。

「に対して」「に関して」「について」「として」などは、体言や体言に準じるものにしかつかないのに対し、「からには」や「にしても」は、「行くからには」「行くにしても」のように、動詞につくことができ、複合接続助詞と見なすのが適当である。

b．連体格助詞の「の」を除き、格助詞どうしは決して重ねて用いられることがない。

「にしては」は、「太郎からにしては」「昼までにしては」のように格助詞の後につくことがあり、複合格助詞ではなく、複合係助詞と見なした方がよい。

c．格助詞と副助詞とが重ねて用いられる時には、通例副助詞は格助詞のあとにある。[6)]

d．格助詞と係助詞とが重ねて用いられる時には、係助詞は必ず格助詞のあ

---

[4] ただし、「に関して」や「に対して」などは、テ形以外にも、「研究に関し」「教師に対し」のように動詞の中止形でも文章語では用いられるが、「について」「として」などは、「？研究につき」「？親とし」のように動詞の中止形では不自然になる。連体化した場合も、「研究に関しての／する意識」「教師に対しての／する態度」のように、テノ形のほか、動詞の連体形でも表すことができるが、「研究についての／？つく考え方」「親としての／？とする義務」のように、テノ形しか許さない。これらの違いは、「について」「として」などは、動詞部分の意味が実質的でなくなって、より語形の固定化が進んでいるが、「に関して」や「に対して」は、「関する」「対する」という動詞の実質的な意味がまだ残っているためと考えられる。つまり、複合の度合いにも強弱があり、「として」から「に関して」「に対して」へと連続しているのである 。

[5]日本格助詞の特質について、詳しくは『国語学辞典』(1955)（p147～148)、『国語学研究辞典』(1977)（p163～165)、『日本文法辞典』(1981)（p220～224）を参照されたい。

[6] 時として格助詞のまえに現れる事もある。

「その問題だけが解けなかった。」

とにある。

「に対して」「に関して」「について」「として」などは、「に対しても」「についてだけ」「においても」「としてさえ」のように、係助詞や副助詞は後続するのがふつうである。これに対し、「をもって」や「のために」は、「このことだけをもって」「君なんかのために」のように副助詞が先行する場合がある。

一方、中国語には、介詞と複合介詞との区別は特にない。介詞の定義について、趙淑華（1996）は“**介词在句中是一种关系的标志，它标志着紧跟在后面的词语表示动作行为或状态的时间、处所、方式、条件、对象、原因、目的等。介词和它后面的词语在句中的主要功能是既可以出现在作为中心语的动词（或形容词）前作状语，也可以出现在其后作补语。**”「介詞は文においてある関係の印であり、それは、その後に付く語が動作行為又は状態の時間、場所、方式、条件、対象、原因、目的などを表すことを示している。文における、介詞とその後に付く語の主要機能は、中心語になる動詞（又は形容詞）の前に現れ、状語（連用修飾語）にもなれば、その後に現れ、補語にもなる」（p406）[7] と説明している。

中国語の介詞の特質[8] は、通常以下のように四つに分けて説明されている。

A. 介詞は介詞賓語の前に置き、いかなる状況の下でも介詞賓語を省略・移動することはできない。[9]
B. 介詞は単独には使用することは出来ない。
C. 介詞は述語にはなれない。
D. 他の介詞とは重ねて使用することはできない。

３．本論文の研究範囲――日本語の格、格助詞、格関係、格体制との関連及び中国語の格と介詞との関連

[7] 詳しくは、趙淑華（1996）を参照されたい。

[8] 中国語の介詞の特質について、詳しくは陸俭明・馬真（1995）、趙淑華（1996）、金昌吉（1997）、張誼生（2000）を参照されたい。

[9] “**他被（人）打了。**”「彼は（人に）殴られた。」のように、「被」の場合は、例外的にその介詞賓語を省略することが出来る。

本論文では、主として格助詞の「が」・「を」と置換可能な「として」「について」「に関して」「に対して」などの複合格助詞を取り上げて、それらに対応する中国語介詞との対照を進める。具体的には、以下の内容が含まれる。

主体「が」格と置換可能な「として」と“作为”

（7）「私としては（が）、仕上げに三日はかけたい。」

“ 作为我来说，希望至少要花费三天时间完成。”

対象「が」格と置換可能な「について」「に関して」と“关于”

（8）「だが試合について（が）は決まっていない。」

“ 但是，关于比赛还没有决定。”

対象「を」格と置換可能な「について」「に対して」と“关于”“对”

（9）a「事故原因について（を）究明する。」

“ 关于事故的原因(公司要)进行调查。”

b「その問題に関して（を）質問したいことがある。」

“ 关于那个问题，我想提问一下。”

c「相手もちょっと商品に対して（を）信用出来ないだろうと思ったからです。」

“ 因为我认为对方也对商品有些不信任吧。”

また、(10) が示すように、同じ主体「が」格、対象「が」格、対象「を」格についても、複合格助詞と置換不可な場合もある。それについて、中国語と比較しながら、考察を加える。

（１０）a「私が（*としては）映画を見に行きました。」
b「水が（*について）流れている。」
c「太郎は花子を（*に対して）殴った。」

４.「格助詞」と「格体制」

上記の研究範囲を設定する理由を説明する前に、まず日本語において「格」や「格助詞」、「格関係」、「格体制」などがどのように研究されてきたのかについて略を示しておこう。[10)]

格とは、Case の訳語で、文の中で名詞または名詞に準ずる語（名詞相当句）が他の語に対して示す関係のあり方・働きを指し、また形態を指す。

日本語の格は、最も普通には、格助詞によって表される。格助詞に属する語は、「が」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「で」「の」などである。格助詞は、体言または体言に準ずる語に下接して、それが文の成分としてどんな働きをするか、文中でそれを受ける語に対してどんな関係に立つかを示す。たとえば、「猟師・ライオン・見る」において、

（１１）a「猟師がライオンを見る」
（「猟師」は「見る」の主体、「ライオン」は「見る」の対象）
b「ライオンが猟師を見る」
（「ライオン」は「見る」の主体、「猟師」は「見る」の対象）

のように、「が」や「を」により、2 種類の異なった関係が示される。こういう格助詞によってはっきり示される関係は、格関係と呼ばれる。格関係は述語用言によってすでに設定されており、格助詞の構文上の機能は、それを明示・確定するところにある。勿論、「わたし、帰るわ」「財布持たずに出かける」のように格助詞を用いなくても格関係は成立し、「傘もささずに」のように格助詞以外の助詞を用いても格関係は変化しない。

仁田（1993・1997）は、格と格支配と格体制について、(12) のような用例を挙げ、

（１２）広志ガ洋子ニ花束ヲ贈った。

---

[10] 以下仁田（1993・1997）までの内容は、本稿筆者が石綿（1999）、小矢野（1991）、川端（1986）、国立国語研究所（1997）、仁田（1982）、馬（1997a）、矢澤（1992・1994・2001）、『日本語教育事典』(1982)、『日本語百科大辞典』(1988)、『日本文法大辞典』(2001）などを参照してまとめたものである。

「「広志ガ」「洋子ニ」「花束ヲ」といった名詞句が、動詞「贈ル」にとっての〈共演成分〉[11] である。動詞「贈ル」が、自らの表す動きの実現･完成のために、「広志ガ（Nガ)」「洋子ニ（Nニ)」「花束ヲ（Nヲ)」といった共演成分を要求する働きが〈格支配〉であり、「広志ガ」「洋子ニ」「花束ヲ」といった共演成分が、それぞれ「贈ル」および他の共演成分に対して表している［主（運動）：出どころ］［相方：ゆく先］［対象（変化）］といった論理的な類的な関係的意味が〈格〉である。そして、「贈ル」の要求する［主（運動）：出どころ、対象（変化)、相方：ゆく先］といった格の組合せが、動詞「贈ル」の取る〈格体制〉である」と説明している。

「が」「を」「に」「へ」「と」「より」「から」「で」「の」などの格助詞は、連体修飾機能を持つ「の」を除いて、全て動詞句と名詞句との関係を表す機能を持つものの、構文上･意味上において、機能は異なっている。特に「が」格と「を」格は、他の格に対し優位[12] であるといわれる。本文筆者が研究範囲に設定する「として」「について」「に対して」などが条件が揃えば「が」格または「を」格と置換えられるのは、それらの複合格助詞の重要性を物語っている。

一方、中国語の方では、ここ数年格文法の研究方法が広く介詞の研究に適用されている。以下簡潔に紹介しておこう。

中国語の格の印について言えば、主として虚詞[13] 特に介詞によって示されている。例えば、張誼生（2000）では、中国語における、介詞を印とする格を以下の六種類に分類されている。

A. 主体格：主として“**被、叫、让、给、为、由、于**”などがある。

B. 客体格：主として“**把、将、管、拿**”などがある。

---

[11] 「共演成分」について、仁田（1997）では「《共演成分》とは、述語成分を構成する動詞が、文を形成するにあたって、自らの表す動き・状態・関係を実現･完成するために必須的・選択的に要求する成分である」（p225）と説明されている。

[12] 詳しくは、渡辺（1971)、矢澤（1993b・1994）などを参照されたい。

[13] 虚詞とは、機能語、中国語で文法上の働きをするだけで単独では文成分にならない単語で、副詞・介詞・接続詞・助詞・感嘆詞・擬声語をいう。

C. 隣体格：主として“和、跟、与、同、以、用、拿、给、替、対、比、冲、朝、向”などがある。

D. 時間と場所格：主として以下の四種類を含む。

a 始源格：“自、从、打、由、自从、打从、自打、从打”などがある。

b 経由格：“自、从、打、由、自从、打从、沿（着）、顺（着）、通过、经过”などがある。

c 位置格：“在、于、当、趁、乘、距、离、距离”などがある。

d 目的格：“往、向、朝、照”などがある。

E. 理由格：主として“处、依、以、为、因、因为、由于、按、照、按照、依照、依处、根据、本着”などがある。

F. 干渉格：主として“关于、至于、对于、对、就、论、拿”などがある。

勿論、以上の分類によれば、よく使用される介詞は往々にして二種類以上の格関係を表している。

本論文で論じる中国語の介詞“对”、“关于”、“作为”などは、文において（13）のように、意味上述語動詞の対象になるか、あるいは（14）のように、実質的に主語の役割を果たし、日本語の複合格助詞「に対して」「について」「として」に対応する。

以上論じたように、日本語の格表現は、中国語では、「が」、「を」（の一部）[14]

[14] 日本語の対象「ヲ」格を中国語に翻訳する際、介詞に対応する場合もあるし、対応しない場合もある。たとえば、「彼は、宿題をやった。」という文に対して、

“他作了作业。”

“他把作业作了。”

以外のものは介詞に相当する。いわゆる格を表す表現手段には、通常語形の変化、接辞の付加、付属辞の付加、語順などが考えられる。主に、日本語では助詞といった付属辞によって、中国語では語順によって実現されることにはなるものの、上記各用例が示すように、日本語の複合格助詞に対応する中国語は、日本語の助詞に似た付属辞のような介詞によって、実現されている。従って、日本語の複合格助詞は、中国語の介詞との対照研究を実施する際に取り扱いやすい。

また、日本語の複合格助詞と中国語の介詞の対照研究は、日本語教育や中国語教育の面でも重要な位置を占めると考えられる。

（１３）a “ 关于这个问题，我们已经讨论了。”

「この問題について、われわれはすでに討論した。」

a′“ 我们已经讨论了这个问题。”

「われわれはこの問題をすでに討論した。」

b “ 警察对犯人打了一拳。”

「警察官は拳骨で犯人をいっぱつ殴った。」

b′ “警察打了犯人一拳。”

「警察官は拳骨で犯人をいっぱつ殴った。」

（１４）a “作为我应该全力配合。”

「私としては全力で協力しなければならない。」

a′ “我应该全力配合。”

「私が全力で協力しなければならない。」

５．本論文の構成と概要

本論文は、序章を含めて全体が六章で構成されている。

序　章

のように、介詞を使用しない訳し方と、使用する訳し方がある。

第一章　　中国語の介詞“**对**”と日本語の複合格助詞「に対して」

第二章　　日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“**关于**”

第三章　　中国語の介詞“**作为**”と日本語の複合格助詞「として」

第四章　　中国語の“**对**+N_1+的+N_2”と日本語の「N_1に対するN_2」について

結　章

各章で明らかにする内容は、以下の通りである。

序　章では、本論文の目的、研究範囲、研究方法等を紹介する。

第一章では、中国語の介詞“**对**”と日本語の複合格助詞「に対して」との対応関係を論ずる。

本章は、主として、“**对**”文または「に対して」文の主語、“**对**”の賓語または「に対して」に先行する名詞、述語動詞（形容詞述語、名詞述語を含む）などの構成、及び“**对**”の賓語または「に対して」に先行する名詞と文の述語との関連を比較のポイントとして、まず、中国語の介詞“**对**”と日本語の複合格助詞「に対して」について、個々の用法を分類する。さらに個々の用法ごとに構文上・意味上の特徴を分析し、最後に“**对**”と「に対して」との対応関係をまとめる。

第二章では、日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“**关于**”との

対応関係を論ずる。

本章は、まず、日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“关于”について、個々の用法を分類する。さらに個々の用法ごとに構文上・意味上の特徴を分析し、最後に「について」と“关于”との対応関係をまとめる。この章で特に強調されるのは、次の 2 点である。一つは、「について」“关于”ともに、「について」に先行する名詞または“关于”の賓語が意味上述語動詞の対象であるタイプと、「について」とそれに先行する名詞または“关于”とその賓語全体が述部を修飾するタイプとの、2 タイプに分類できるという点である。もう一つは、「について」と「については」とは、それぞれ区別されるべき二つの用法であり、それは中国語との対応関係からも明らかになるように、「について」は“关于”に対応するのに対し、「については」は“至于”に対応するという点である。

第三章では、中国語の介詞“作为”と日本語の複合格助詞「として」との対応関係を論ずる。

本章では、まず、中国語の介詞“作为”と日本語の複合格助詞「として」について、個々の用法を分類する。さらに個々の用法ごとに構文上・意味上の特徴を分析し、最後に“作为”と「として」との対応関係をまとめる。この章で特に強調されるのは、次の 3 点である。一つ目は、“作为”「として」ともに、連用修飾語、連体修飾語、及び文の実際の主語になる用法があるという点である。二つ目は、連用修飾語になる際に、“作为”「として」ともに、“作为”の賓語または「として」に先行する名詞が文の主語と関連するタイプ、文の目的語と関連するタイプ、文の述部または文全体と関連するタイプとの、３タイプに

分類できる、という点である。三つ目は、「として」と「としては」は、それぞれ区別されるべき二つの用法であり、それは中国語との対応関係からも明らかになるように、「として」は“**作为**”に対応するのに対し、「としては」は“**作为…来说**”に対応するという点である。

第四章では、中国語の“**对**+N_1+的+N_2”と、日本語の「N_1に対するN_2」との対応関係を論ずる。

本章は、まず“**对**+N_1+的+N_2”と「N_1に対するN_2」について、個々の用法を分類する。さらに大量の用例を挙げ、意味上・構文上において、N_1はどのようなN_2を修飾可能なのかを考察し、“**对**+N_1+的+N_2”と「N_1に対するN_2」との対応関係をまとめる。

結　章では、本論文によって明らかになった内容をまとめ、日中複合格助詞と介詞との対照研究についてとらえるべき方法を論じるとともに、今後の課題について触れる。

第一章

中国語の介詞“对”[1] と日本語の複合格助詞「に対して」[2]

１．“对”と「に対して」の意味

中国語の介詞“对”（dui）は、呂叔湘編（1980）では、“１．指示动作的对象；2.表示对待。”（p157）「１．動作の対象を示す；２．対処を表す」と説明され、劉月華他（1983）では、“引进行为动作的对象或关系者。”（p163）「行為、動作の対象または関係を持つものを導入する」と説明されている。

一方、日本語の複合格助詞「に対して」は、『日本語教育事典』（1982）では、「動作が向けられる対象や目標を表す」（p395）と説明され、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）では、「『そのものごとに向けて／応じて』などの意味を表し、後ろにはそれに向けられた行為や態度など、なんらかの働きかけを示す表現が続く」（p443）と説明されている。

このように、中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」は、付属する名詞（N）に前接するか後接するか（「“对”N」と「Nに対して」）が違うだけで、意味上かなり対応していると思われる。

しかし、一方では、以下の例のようにうまく対応しないものもある。

（１）a“人对洞口呼喊，回声隆隆，仿佛听到了千里之外的回声。”[3]

---

[1] “对”に対し、類義した機能・意味を持つ“对于”という形式もある。本章が“对于”ではなく、“对”を扱うのは、“凡用‘对于’的地方,都可以用‘对’。”（劉月華他・1983･p175）「およそ“对于”が使われているところはすべて“对”を使うことが出来る」からである。また、“对”と“对于”との違いについては、本章では触れないことにする。

[2] 本章で言う「に対して」には、次のようなひらがな表記を使用する「にたいして」も含まれる。
「さすがにそれらの事実にたいして批判がましいことはいわなかった。」（迷路荘の惨劇・p190）
“所以无法对这些事情作任何评论。”（名琅庄・p119）
また、次のような、割合文語的なニュアンスを示す「～に対し」について、本論文では触れないことにする。

「洞の口にむかって（×に対して）叫ぶと、声が反響し遠くから聞こえるようだ。」

b “‘妈呀！妈呀！’

床上的小孩子忽然哭着叫起来了。这声音使得曾家驹一跳。他慌慌张张举起手枪来对床上放射了。”（子夜・p117）

「母ちゃん！母ちゃん！
ベッドの子どもが急に泣き出す。その泣き声に、曽家駒はハッとする。あわてて拳銃をあげて、ベッドへ向けて（×に対して）ぶっ放す。」（夜明け前・p82）

c “李玉亭跟着吴荪莆的眼光也对那鹦鹉看了一眼，……”（子夜・p284）

「その目を追って、李玉亭も鸚鵡を（×に対して）眺める。」
（夜明け前・p194）

d “有根上前，对秋林灯笼踢一脚:‘谁叫你爹没钱’。”

「有根は前へ行って、秋林の提灯を（×に対して）蹴って、「おまえの親父は金がないのだから」（おまえが悪いのさ）と言った。」

e “虎妞堵着爸爸耳根吹嘘，刘四爷对祥子笑了笑。”（骆驼祥子（原）・p326）

「ひとえ午嬢は親爺の耳に口を当てて、大ぼらを吹いた。劉四爺は祥子に向かって（×に対して）、笑ってみせただけだった。」
（駱駝祥子（訳）・p196）

f “他对那棵树笑了笑。”

「彼は、その木に向って（×に対して）笑っていた。」

g “并且，‘联合国军’总司令麦克阿瑟率领他的高级官员和将领，于七月底对台湾进行访问。”（黑雪（原）・p4）

「刺激に対し感応性がある」（森田・松木（1989））

[3] （1）a と d は、傅雨賢他（1997）の用例で、a は《总统卫士》（冯育楠）、d は《安徽短篇小说选》（安徽人民出版社）から引用されたものである。

「なおかつ、「国連軍」総司令官マッカーサーは、高級幕僚や将校を引き連れ七月末に台湾を（×に対して）訪問した。」（黒雪（訳）・p6）

h“他吃惯了高粱米饭的肠胃，对这种充满霉味的白米进行着坚决的排斥。”

（紅高粱家族・p21）

「高粱飯に慣れきっている胃袋は、そのかびくさい白米飯を（×に対して）まるで受付けなかった。」（赤い高粱・p30）

i“区区五万元，对你们酒国来说，是小意思吧？”（酩酊国・p321）

「わずか五万元であれば、酒国にとっては（×に対して）何ということもないでしょう。」（酒国・p263）

J“但今天我们是小部队，天险对我们却成了有利。”（林海雪原・p141）

「しかし今日はわれわれは小部隊、自然のけわしさはわれわれにとって（×に対して）かえって有利になる。」（樹海と雪の原野に・p117）

「に対して」と“对”は、どの部分でうまく対応するのか、またどの部分で対応しないのかについて、今のところまだ明確に説明されていない。

本章では、“对”と「に対して」との対応関係を明確に示すと同時に、“对”と「に対して」との用法の異同について検討を加える。

２．中国語の介詞“对”と日本語の複合格助詞「に対して」の用法の分類

２・１　“对”の用法の分類

中国語の介詞“对”の用法に関する研究はかなり進んでいる。代表的なものとしては、北京大学中文系（1982）、傅雨賢他（1997）、侯学超編（1998）などがあり、それらをまとめると、以下のようになる。

A．“表示方向”「「方向」を表す」。

B．“表示对象目标”「「対象・目標」を表す」。

C．“表示对待关系”「「対処関係」を表す」。

D．“表示涉及关系”「「関連関係」を表す」。

２・２　「に対して」の用法の分類

日本語の複合格助詞「に対して」の用法については、従来あまり論じられておらず、山下他（1994）が見られるくらいである。
山下他（1994）は、「に対して」の用法を文法機能から以下のように分類している。

Ａ．格助詞「に」とほぼ同じ文法的機能を持つもの。
Ｂ．格助詞「に」に内在する文法的機能を明確に特定し、文自体のあいまいさを排除する機能を持つもの。
Ｃ．既存の格助詞ではまかないきれない格関係を表す機能を持つもの。[4)]

“対”と「に対して」について実際の用例を調査したところ、山下他（1994）が指摘した、格助詞「に」と互換できるタイプと他の格助詞と互換不可なタイプの他に、格助詞「を」と互換できるタイプも存在することが分かった。本論文では、「に対して」の用法を以下の３タイプに分類する。

Ａ．「を」と互換できるタイプ

（２）a「例えば五月さんの、ああいう反応に対して（○を）太郎はどう解釈したら自分に対しても、五月さんに対しても誠実でありうるのか。」（新潮・太郎物語）
b「このため浅井氏に対して（○を）十分以上に懐柔しておかねばならなかった。」（新潮・国盗り物語）
c「追求しながら、彼はふと、山行中に一時は倒れそうなくらいに疲労を見せた彼女が、そのことについていささかの疲労も見せないし、彼の追求に対して（○を）嫌悪しないばかりでなく、明らかに彼女自身の反応を見せて来るのを不思議なことに感じていた。」（新潮・孤高の人）
d「加藤が、横須賀の出張に対して（○を）、やや渋ったのは宮村健のことだった。」（新潮・孤高の人）

Ｂ．「に」と互換できるタイプ

（３）a「彼は私に対して（○に）何も要求しなかった。」
b「私の発言に対して（○に）彼は猛烈に攻撃を加えてきた。」
c「私の質問に対して（○に）何も答えてくれなかった。」
d「彼は侵入者に対して（○に）はっきりと怒りを表している。」

[4] 詳しくは、山下他（1994）を参照されたい。

e「外国人に対して（○に）日本と同じレベルの賃金を支払うのは、かえって相手方の経済構造を乱すという害があると思うんです。」[5)]

C．他の格助詞と互換不可なタイプ

（4）a「美也子は卓一に対して（??に／??を）自分の行為に苦しんでいる。」（塗られた本・p227）

b「これでケンは相手の人物に対して（??に／??を）は認識を改めた。」（人間の証明・p129）

c「青沼禎二郎は女に対して（??に／??を）なかなかのベテランのようだった。」（塗られた本・p68）

d「彼女は彼が自分に対して（??に／??を）何を考え、何をもくろんでいたか、よく分かっていた。」（塗られた本・p68）

e「紙に対して（??に／??を）、鉛筆は常に一定の傾斜角度を保っていなければならないということは、お前たちが研修生になったその日に教えた筈だ。」（新潮・孤高の人）

以下、“**対**”と「に対して」のそれぞれの用法がどのような構文で見られるのか分析しながら、両者の対応関係の実態を見ていく。

３．“対”の用法と、「に対して」の対応状況

３・１　「方向」を表す“対”と「に対して」

３・１・１　「方向」を表す“対”について

（5）a“老徐当时火往上撞，说：‘儿郎们，对山上骂阵!’”

「徐さんはその時頭にきて、「みんな、山にむかって罵れ」と叫んだ。」

b“后来见老四没聒他的经，又听到脚步声对房门口走来，他一个翻身，往床里一滚。”

「その後、老四が彼の話を聞かなかったのを見て、また足音がドアにむかって近づいてくるのが聞こえ、彼は寝返りを打ち、ベッドの奥へ転がった。」

c“蒯教授站定，两臂八字张开，两手掌对天空发功，人们注视着天空。”

[5] (3)a と e は山下他（1994）の用例である。

「蒯教授は、しっかり立って両腕を八の字に開き、両掌を天空にむけて功を発し、人々は空を見つめている。」[6)]

d “人对洞口呼喊，回声隆隆，仿佛听到了千里之外的回声。”（=(1)a）

「洞の口にむかって叫ぶと、声が反響し、遠くから聞こえるようだ。」

e “‘妈呀！妈呀！’

床上的小孩子忽然哭着叫起来了。这声音使得曾家驹一跳。他慌慌张张举起手枪来对床上放射了。”（=(1)b）

「母ちゃん！母ちゃん！
ベッドの子どもが急に泣き出す。その泣き声に、曽家駒はハッとする。あわてて拳銃をあげて、ベッドへ向けてぶっ放す。」

「方向」を表す“对”については、傅雨賢他（1997）の他には、従来あまり論じられていない。

傅雨賢他（1997）は、「方向」を表す“对”について次のように説明している。

“一般来说，‘对$_1$’（「方向」を表す“对”を指す）后面的宾语[7)]总是由表示方位的名词，即方位词或词组充当，如‘台上、山上、脸上、下面、上面、外面、这边、窗外、这方面、那一方’等。

‘对$_1$’后面宾语也可是表示处所的名词，如‘洞口、里院、地面、正面、远处、房门口’等。

由‘对$_1$’结构构成的语句，其中的谓语动词通常是些表示具体动作的词语，如‘走来、泼来、发射、发功、砸过去、啐、开、伸、弹、抛、指、戳、拂、努嘴、看、望、招、喊’等；那些不表示具体动作的行为动词[8)]，由于它们所表示的意义总是偏抽象，因而一般不出现在由‘对$_1$’构成的语句中。”（p177）

---

[6] (5)a～c は傅雨賢他（1997）の用例で、それぞれ a は《兴唐传》（陈荫荣）、b は《安徽短篇小说选》（安徽人民出版社）、c は《大气功师》（柯云路）から引用されたものである。

[7] 介詞の賓語について、趙淑華（1996）では“介词后面主要带名词、代词或名词性词语作它的宾语，……”（p406）「介詞の後には、主として名詞、代名詞または名詞の性質を持つ語が付き、それらを介詞の賓語とする。」と説明されている。

[8] 行為動詞について、3･2･3 節で説明する。

「一般的に言えば、‘**对**$_1$’**の後**に付く賓語は、いつも方位を表す名詞、すなわち方位名詞または方位句より構成される。たとえば、「台の上、山、顔、下、上、外、こちら、窓の外、そちら」などである。

‘**对**$_1$’の後ろに付く賓語は場所を表す名詞であってもよい。たとえば、「洞の口、中庭、地面、正面、遠処、戸口」などである。

‘**对**$_1$’構造により構成される文では、述語動詞は通常具体的な動作を表す語句である。たとえば、「歩いて来る、ぶっ掛けて来る、発射する、功を発する、（重い物で物を）ぶつける、吐く、（銃砲を）放つ、伸ばす、はじく、投げる、指差す、突く、払う、口を突き出して知らせる、見る、眺める、手で招く、叫ぶ」などである。具体的な動作を表さない行為動詞は、それが表す意味がいつも抽象に偏っているので、通常‘**对**$_1$’構造により構成される文には現れない。」

以上をまとめると、「方向」を表す“**对**”文において、構文には以下のような特徴が見られる。

A．“**对**”の賓語、即ち“**对**”に後続する名詞は、方位名詞、場所名詞で構成される。
たとえば、(5)a は“**山上**”（「山」）、(5)b は“**房门口**”（「戸口」）、(5)c は“**天空**”（「空」）、(5)d は“**洞口**”（「洞の口」）、(5)e は“**床上**”（「ベッド」）である。

B．述語動詞は具体性を持つ動作動詞で構成される。[9]
たとえば、(5)a は“**骂阵**”（「罵る」）、(5)b は“**走来**”（「(歩いて)近づく」）、(5)c は“**发功**”（「功を発する」）、(5)d は“**呼喊**”（「叫ぶ」）、(5)e は“**放射**”（「ぶっ放す」）である。

実際の用例を調査したところ、「方向」を表す“**对**”文においては、主語は人を表す語で構成されることも分かった。

たとえば、(5)a の“**儿郎们**”（「みんな」）や(5)b の“**老四**”（「老四」）や(5)c“**蒯教授**”（「**蒯**教授」）や(5)e“**曾家驹**”（「曽家駒」）などのような人の呼び方や身分や名前を表す言葉、(5)d の“**人**”（「人間」）のような人を表す名詞

[9] 「方向」を表す“**对**”に関する傅雨賢他（1997）にある問題点について、3･2･1･3 節「方向」を表す“**对**”と、「対象・目標」を表す“**对**”との違いのところで説明する。

などである。

また、“**对**”のこの用法は、同じく方向を表す中国語の介詞“向、往、朝”[10]に比べると、用例が比較的少なく、また具体的な方向を表しているという特徴も見られる。

３・１・２　「に対して」と方向

3･1･1 であげられた(5)a～e の中国語の用例を日本語に翻訳すると、中国語の“**对**”に相当するところは各例とも「に対して」ではなく、「に向って」などの表現になる。（６）ｂや（６）ｃ、（６）ｅなどでは、「に」や「へ」など、単独の格助詞が対応する場合があるが、もっともうまく対応するのは、方向を明示する「に向かって」である。

（６）a“**老徐当时火往上撞，说:‘儿郎们，对山上骂阵!’**”

「徐さんはその時頭にきて、「みんな、山にむかって（×に対して）罵れ」と叫んだ。」

b“**后来见老四没聒他的经，又听到脚步声对房门口走来，他一个翻身，往床里一滚。**”

「その後、老四が彼の話を聞かなかったのを見て、また足音がドアにむかって（○の方へ／×に対して）近づいてくるのが聞こえ、彼は寝返りを打ち、ベッドの奥へ転がった。」

c“**蒯教授站定，两臂八字张开，两手掌对天空发功，人们注视着天空。**”

「**蒯**教授は、しっかり立って両腕を八の字に開き、両掌を天空にむけて（×に対して）功を発し、人々は空を見つめている。」

d“**人对洞口呼喊，回声隆隆，仿佛听到了千里之外的回声。**”

「洞の口にむかって（×に対して）叫ぶと、声が反響し、遠くから聞こえるようだ。」

e“**‘妈呀！妈呀！’**

床上的小孩子忽然哭着叫起来了。这声音使得曾家驹一跳。他慌慌张

---

[10] “向、往、朝”を日本語に翻訳すると、“向”は「…に向かって」、“往”は「…に向かって、…の方へ」、“朝”は「(…の方に）向かって」となる。

张举起手枪来対床上放射了。”

「母ちゃん！母ちゃん！
ベッドの子どもが急に泣き出す。その泣き声に、曽家駒はハッとする。あわてて拳銃をあげて、ベッドへ向けて（×に対して）ぶっ放す。」

また、次の(7)a～e が示すように、主語が人を表す語で、述語は動作動詞、「に対して」に先行する名詞（構文的に“**对**”の賓語に相当するもの）は場所・方向名詞という、具体的な「方向」を表す中国語の“**对**”文の成立条件を満たしても、「に対して」では、文が成り立たないことがある。「に対して」ではなく、「に向って」などに代えれば、文は成り立つ。

（７）a「悠子は、礼を言い、海にむかって（×に対して）、砂の斜面をおり始めた。」（夜行列車殺人事件・p74）
b「二人は、2 号車にむかって（×に対して）急いだ。」（夜行列車殺人事件・p133）
c「スコップを持ちかえ、あらためて砂の壁にむかって（×に対して）突進した。」（新潮・砂の女）
d「司祭は壁にむかって（×に対して）声をだして笑った。」（新潮・砂の女）
e「車の音がしてもおどろかず、ちらりとふりかえっただけで、そのまま道のはしを町の方向にむかって（×に対して）ゆっくりと歩きつづけた。」（新潮・パニック・裸の王様）

それでは、「に対して」は「方向」を表すことができるのか。それについて、森田・松木（1989）は、次のように説明している。

「「に〈へ〉対し〈て〉」は、動作や感情が向けられる対象を指示する機能を果たす。動詞「対する」の“他のものに向かう、応じる”意を引き継ぐため、目標を示すといった方向性や、相対する人物・事物への反作用性などが示唆されることが多い。」（p9）

森田・松木（1989）は、「に対して」の「方向」は、「目標を示すといった方向性が示唆される」と指摘するに止まり、具体的に方向や場所を表す語が「に対して」に先行するか否か、または「に対して」が具体的な方向性を表すことができるか否かは説明されていない。
実際に用例調査をしてみると、「に対して」に先行する名詞のところに、具体的に方向または場所を表す名詞が現れた例には、以下の(8)のようなものがある。

（８）a「加藤が山の本を見に来たことは、八分どおり、彼を山の仲間に引きずり込むことのできる証拠だと考えていたのが、そうではなく、加藤が山にはたいした感激も示さず、本から外の景色へ眼をやったのは、未だに、加藤は山に対してさほどの関心を持っていない証拠に思われた。」（新潮・孤高の人）

b「山に対して戦いの観念を持っておしすすめた場合、結局は負ける方が人間であるように考えられた。」（新潮・孤高の人）

c「足の先、手の先、そういうところから、しみこんで来る寒さ、背中からおしつぶすようにやってくる寒さ、敷いている、シートを通して、伝わってくるつめたさ、それらのすべての方向に対して、加藤は用心深く気を配っていった。」（新潮・孤高の人）

d「海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船に対して、いかに数では有利でも、トルコ船はそう簡単には攻撃をしかけてはこれなかった。」（新潮・コンスタンティノーブルの陥落）

e「それまでピストンのヘッドの形状はあまり考えられなかったが、ピストンのヘッドの形状を、燃料の噴射方向に対してある傾斜を持たせたらどうであろうか。」（新潮・孤高の人）

f「相当歩いてふりかえって見ると、彼のシュプールの跡は目標に対してかなり左の方へ曲っていた。」（新潮・孤高の人）

g「医者は、笠岡の身体を乗せた撮影装置を水平や斜めに倒したり、また笠岡の体位を撮影台に対して横やあおむけにしてさまざまな角度から造影撮影を行った。」（青春の証明・p85）

(8)では、「山、方向、船、噴射方向、目標、撮影台」などのような、具体的に方向または場所を表す名詞が「に対して」に先行しているが、述語動詞は、「関心を持つ、推し進める、気を配る」などのような、抽象的な動作を表す動詞や、「攻撃を仕掛ける」などのような、具体的な動作を表すものの、具体的に移動する意味をそれほど強く示さない動詞、さらには、「傾斜を持たせる、曲がっている、横やあおむけにする」などのような、ある状態（にすること）を表す動詞である。(8)で、「に対して」に先行し、具体的に方向または場所を表すと考えた「山、方向、船、目標」などの名詞は、具体的な方向や場所ではなく、(8)a や、(8)b、(8)c では「対象」、(8)d では抽象的な「対象＋方向性」、(8)e や、(8)f、(8)g では、動かぬ目標を表すと考えられる。

また、(9)が示すように、

（９）a「だが、十津川は、妙子に対して、一度も男のことを、聞きただしたことはなかった。」（イブが死んだ夜・p71）

b「律義な彼は、とるにも足らぬ楡家の末娘に対しても、鄭重に足をとどめて会釈をした。」（新潮・楡家の人びと）

c「私もまた、アリをこの眼で見なかったとしたら、この少女たちに対していまと同じような視線を向けていたかどうかは、疑問だった。」（新潮・一瞬の夏）

d「珠世はまた、あの奇妙な仮面をかぶった佐清に対しても、けっして尻ごみはしなかった。」（犬神家の一族・p91）

e「ではあの床に散らばっていたものは、犯人がご主人に投げつけたか、もしくは、ペーパーウェイトを凶器にして襲い掛かってくる犯人に対してご主人が身を防ぐために投げたのだ。」（Cの悲劇・p44）

「に対して」は、「相手+方向性」のような意味を表している。この場合、「に対して」に先行する名詞は、人を表す語で、述語動詞は言語活動に関する動詞と動作動詞で構成されている。

以上まとめてみると、

A．「に対して」に先行する名詞が具体的に方向または場所を表す語であっても、具体的に移動する意味を表す述語動詞が現れない。

B．述語動詞が具体的に移動する意味を表す語であっても、「に対して」に先行する名詞には具体的に方向または場所を表す語が現れない。

「に対して」は、(8)dのように、抽象的な「対象＋方向性」を表すことや(9)が示すように、「相手+方向性」のような意味を表すことはあっても、中国語の“**对**”のように、具体的な「方向」を表すことは出来ず、両者は対応しないと結論づけることができる。

３・２　「対象・目標」・「対処関係」を表す “**对**”と「に対して」

３・２・１　「対象・目標」を表す“ **对**”について

３・２・１・１「対象・目標」を表す“**对**”の賓語と述語動詞との意味関係

「対象・目標」を表す“**对**”の賓語と述語動詞との意味関係について、呂叔湘編（1980)、北京大学中文系（1982)、傅雨賢他（1997)、侯学超編（1998）などをまとめると、以下のように分類できる。

A．“**对**”の賓語が意味上述語動詞の対象であるもの。

a．“**对**”の賓語を述語動詞の後に復元可能なタイプ。

b．述語動詞に「方向補語」を伴わせて復元不可なタイプ。

B．“**对**”の賓語が意味上述語動詞の対象ではないもの。

C．“**对**”の賓語が意味上述語動詞の対象ではなく、述語動詞の目的語の対象であるもの。

以下、それぞれのものについて検討を加えていく。

A．“**对**”の賓語が意味上述語動詞の対象であるもの。
これには、二つのタイプがあるとされる。

a．“**对**”の賓語を述語動詞の後に復元可能なタイプ。

（10）a で言えば、述語動詞は“**看**”（「見る」）で、“**对**”の賓語は“**那个铅笔盒**”（「その筆箱」）である。“**对那个铅笔盒看了一眼**”（「その筆箱を ちらりと見た」）を“**看了那个铅笔盒一眼**”（「その筆箱を ちらりと見た」）というふうにおきかえることができる。

（１０）a　“**他对那个铅笔盒看了一眼。**”
「彼はその筆箱を ちらりと見た。」

a′　“**他看了那个铅笔盒一眼**。”
「同上」

b　“**有根上前，对秋林灯笼踢一脚:‘谁叫你爹没钱 ’”。**（=1（d））

「有根は前へ行って、秋林の提灯を（×に対して）蹴って、「おまえの親父は金がないのだから」（おまえが悪いのさ）と言った。」

b′　“**有根上前，踢秋林灯笼一脚:‘谁叫你爹没钱 ’”。**
「同上」

c　“ **警察对犯人打了一拳。**”
「警察官は拳骨で犯人をいっぱつ殴った。」

c′　“警察打了犯人一拳。”
「同上」

d　“**盗窃**犯**对**店員刺了三刀。”
「窃盗犯はナイフで店員を三回も刺した。」

d′　“**盗窃**犯刺了店員三刀。”
「同上」

e　“**经理对部长大骂了一顿。**”
「社長は部長をさんざんに悪罵した。」
e′　“**经理大骂了部长一顿**。”
「同上」

なお先行研究では指摘がないが、このタイプの“**对**”文を成立させるのには、述語動詞が具体性を持つ動詞であるという条件のほか、述語動詞に「動量補語」[11]（“**一眼**”「ちらりと見る」、“**一脚**”「一回蹴る」、“**一拳**”「拳骨で一回殴る」、“**三刀**”「ナイフで三回刺す」、“一頓”「（さんざんに）殴る」など）をつけないと、このタイプの文は成立しない。

（１１）a*　“**他对那个铅笔盒看了，……**”
a′　“**他看了那个铅笔盒，……**”
a″　“**他对那个铅笔盒看了一眼。**”(=(10)a)
b*　“**有根上前，对秋林灯笼踢了，……**”
b′　“**有根上前，踢秋林灯笼，……**”
b″　“**有根上前，对秋林灯笼踢一脚:‘谁叫你爹没钱 ’”。**(=(10)b)
c*“ **警察对犯人打了，……**”
c′　“警察打了犯人，…”
c″“ **警察对犯人打了一拳。**”(=(10)c)
d*　“**盗窃**犯**对**店員刺了，……”
d′　“**盗窃**犯刺了店員，……”
d″　“**盗窃**犯**对**店員刺了三刀。”(=(10)d)
e*　“**经理对部长大骂了，……**”
e′　“**经理大骂了部长，……**”
e″　“**经理对部长大骂了一顿。**”(=(10)e)

ｂ．述語動詞に「方向補語」[12]を伴い、復元不可なタイプ。

---

[11] 「動量補語」について、李暁琪他（1996）では“‘**数词+次／趟／回’放在动词后面补充说明动作的次数，叫作动量补语。**”「「数詞+次／緬／回」を、動詞の後に置き動作の回数を補充説明し、動量補語と称する。」（p57）と説明されている。

[12] 「方向補語」について、朱徳熙（1982）では“**由趋向动词‘来、去、进、出、上、下、回、过、起、开’等充任的补语叫趋向补语。**”「方向動詞「来る、行く、入る、出る、上がる、下がる、帰る、過ぎる、起きる、開く」などがなる補語を方向補語と称する。」（p128）と説明されている。

(12) a で言えば、述語動詞は“**看**”（「見る」）で、“**对**”の賓語は“**陆根兴**”（「陸根興」）である。述語動詞に「方向補語」“**去**”を伴った場合、“**对陆根兴看去**”（「陸根興を見た」）を“**看去陆根兴**”というふうにおきかえることができない。

（１２）a　“**张炳生脸上发热了，下意识对陆根兴看去。**”
「張炳生は顔を赤くして無意識に陸根興を見た。」
a′ ＊“**张炳生脸上发热了，下意识看去陆根兴。**”
b　“**他慌忙对狗打去。**”
「彼は慌てて犬を殴った。」
b′ ＊“**他慌忙打去狗。**”
c　“**他用红缨枪对狼扎去。**”
「彼は長い槍で狼を刺した。」
c′ ＊“**他用红缨枪扎去狼。**”
d　“**小青年用鞭子对牛抽去。**”
「若者は鞭で牛を引っぱたいた。」
d′ ＊“**小青年用鞭子抽去牛。**”
e　“**矿工们用斧子对树劈去。**”
「鉱山労働者達は斧で樹を切った」
e′ ＊“**矿工们用斧子劈去树。**”

B．“**对**”の賓語は意味上述語動詞の対象ではないもの。

(13) a で言えば、述語動詞は“笑了笑”（「笑った」）で、“**对**”の賓語は“大家”（「みんな」）である。“**对大家笑了笑**”（「みんなにむかって笑った」）を“笑了笑大家”というふうにおきかえることができない。

（１３）a“ **水生对大家笑了笑。**”
「水生はみんなにむかって笑った。」
a′ ＊“ **水生笑了笑大家。**”
b“ **香兰红着脸对柳明点了一下头。**”
「香蘭は顔を赤くして柳明に対して会釈した。」
b′ ＊“ **香兰红着脸点了一下头柳明。**”
c“ **麦克阿瑟已经在对报界发表声明，把战败的责任归结于华盛顿限制了他的战场指挥权。**”（**黑雪**（原）・p215）

「マッカーサーはすでに報道機関に対して声明を発表し、敗北の責任を、ワシントンが彼の戦場指揮権に制限を加えたことに帰しているのだ。」（黒雪（訳）・p336）

c′ ＊“ 麦克阿瑟已经在发表声明报界，把战败的责任归结于华盛顿限制了他的战场指挥权。”

d “唐黎听邵仁展这样说，禁不住地想起那次焦昆对机关提意见的事。”（沸腾的群山・p342）

「唐黎は彼の言うのを聞いて、いつか焦昆が、機関に対して、意見を出したのを思い出さないではいられなかった。」（沸き立つ群山・p379）

d′ ＊“唐黎听邵仁展这样说，禁不住地想起那次焦昆提意见机关。”

e“ 他已经对党委表过决心了。”

「彼は党の委員会に対して既に決心を表明した。」

e′ ＊“ 他已经表过决心党委了。”

f“ 唐黎对焦昆并不生气。”（沸腾的群山・p342）

「唐黎は焦昆に対して、ちっともハラをたてなかった。」（沸き立つ群山・p23）

f′ ＊“ 唐黎并不生气焦昆。”

g“ 可是他刚走到酒馆门前，突然又想起自己已经对焦昆下了保证，又犹豫了，马上停止了脚步。”（沸腾的群山・p419）

「だが、ちょうど門の前まで来たとき、自分が焦昆に[13] 誓った約束を思い出し、ためらい、すぐ足を止めた。」（沸き立つ群山・p467）

g′ ＊“ 可是他刚走到酒馆门前，突然又想起自己已经下了保证焦昆，又犹豫了，马上停止了脚步。”

C．“对”の賓語は意味上述語動詞の対象ではないが、(14)a が示すように、“对”の賓語“山上的敌人”（「山の上にいる敵」）は意味上述語動詞の目的語“进攻”（「攻撃する」）の対象である。

（１４）a“ 司令员一直准备对山上的敌人发动进攻。”

「司令官はずっと山の上にいる敵に対して攻撃に出ようとしている。」

a′“ 司令员一直准备进攻山上的敌人。”

[13] 中国語の“对”は、日本語の格助詞「ニ」に翻訳される場合もある。それについて、4･2 節で説明する。

「司令官はずっと山の上にいる敵を攻撃しようとしている。」

b“ 他总想对我进行报复。”

「彼はいつも私に対して報復を加えようとしている。」

b′“ 他总想报复我。”

「彼は、いつも私を報復しようとしている」

c“ 恐怖分子扣押了几名记者，作为人质，对政府当局进行恐喝。”

「テロリストは人質として数名の記者を取り押さえて、政府当局に対して脅しをつけている。」

c′“ 恐怖分子扣押了几名记者，作为人质，恐喝政府当局。”

「テロリストは人質として数名の記者を取り押さえて、政府当局を脅している。」

３・２・１・２　「対象・目標」を表す“对”の構文的特徴について

「対象・目標」を表す“对”の構文について、傅雨賢他（1997）は、次のように説明している。

“主语多是表示人物的名词性词语[14]，事物名词作这种语句主语的情况较为少见。…(中略)…‘ 对$_2$’[15]的宾语，总的来说，既可以是表人物的名词性词语或机关、团体、单位名称，也可以是表事物的名词性词语。…(中略)…“ 对$_2$”构造所修饰的谓语动词，以表具体动作的动词为常见。动作意义不太具体的行为动词，有时也可出现在这类语句中。…(中略)…意义抽象的形式动词[16]、存在动词[17]，能出现于由“ 对$_2$”构成的语句中，仅限于几个常用词，如‘ 有、作、展开、施以、施加、进行’ 等。这类动词后面总是带有动词宾语。”（p180～p181）「主語は主として人間を表す名詞の性質を持つ言葉がなり、事物名詞がこのタイプの文の主語になる場合は比較的少ない。…“对$_2$”の賓語についてまとめて言えば、人間を表す名詞の性質を持つ言葉、または機関、団体、単位名称がなる場合もあるし、事物を表す名詞の性質を持つ言葉がなる場合もある。…“对$_2$”構造が修飾する述語動詞は、主として具体的な動作を表す動詞である。動作を余り具体的に表さない行為動詞がこのタイプの文に現

---

[14] 傅雨賢他（1997）では、“人称名词指的是表人的名词、代词及机关、团体、单位名称。”「人称名詞は人を表す名詞、代名詞及び機関、団体、単位の名称を指す」（p195）と説明されている。

[15] “对$_2$”は「対象・目標」を表す“对”を指す。

[16] 形式動詞について、詳しくは 3･2･3 で論じる。

[17] 存在動詞について、詳しくは 3･2･3 で論じる。

れる時もある。…抽象意義を表す形式動詞、存在動詞が“**对**$_2$”で構成された文に現れるのは、よく使用されている、極わずかな種類のもので、たとえば、「ある」「する」「展開する」「かける」「進める」等である。このタイプの動詞はいつも動名詞の目的語を伴う。」

傅雨賢他（1997）では、「対象・目標」を表す“**对**”の構文において、述語動詞の種類の詳細については説明されていないが、「対象・目標」を表す“**对**”の賓語と述語動詞との意味関係において、次のような事項が指摘できる。

A．「“**对**”の賓語が意味上述語動詞の対象である」タイプの述語動詞は、全て具体的な動作を表す動詞で、且つ殆ど一音節動詞[18]である。抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞、存在動詞は使用されない。

B．「“**对**”の賓語が意味上述語動詞の対象ではない」タイプの述語動詞には、具体的な動作を表す動詞と抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞などが含まれている。

C．「“**对**”の賓語が意味上述語動詞の対象ではないが、“**对**”の賓語が意味上述語動詞の目的語の対象である」タイプの述語動詞は、全て抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞で、且つ殆ど二音節動詞[19]である。具体的な動作を表す動詞は使用されない。

３・２・１・３「方向」を表す“**对**”と「対象・目標」を表す“**对**”との違い

「方向」を表す“**对**”と、「対象・目標」を表す“**对**”との違いについて、傅雨賢他（1997）は、次のように説明している。

“‘**对**$_2$’（「対象・目標」を表す“**对**”） **和**‘**对**$_1$’（「方向」を表す“**对**”）**是两个不同的介词，这种不同主要表现在介词宾语上面。**‘**对**$_1$’**只能与带有方位性质的词语组合,**‘**对**$_2$’**则只能与表示人、物的名词性词语结合。**”（p179）

「“**对**$_2$”と“**对**$_1$”は二つ違った介詞で、その違いは主として介詞賓語にある。“**对**$_1$” は方向・位置の性質を持つ語しか従えず、“**对**$_2$”は人間・事物

---

[18] 一音節動詞と二音節動詞について、李臨定（1990）では、「中国語の動詞は、音節の数によって一音節のものと二音節のものに分けられる。一音節動詞と二音節動詞とでは、文法的特色と意味色彩の面で多くの相違点がある。一音節動詞の大多数は具体的な動作を表すものであり、二音節動詞の大多数は抽象的な行為を表すものである。」（p499）と説明されている。

[19] 注 18 を参照されたい。

を表す名詞しか従えない。」

しかし、“**对**”に後接する賓語が方向・位置の性質を持たなくても、次の(15)のように“**对**”が「方向」を表す場合もある。

（１５）a　“**对田中看去。**”
「田中さんを（×に対して）見る。」
a′　“看田中。”
「同上」
a″ ＊“ **对田中看。**”
b　“**对他打去。**”
「彼を（×に対して）殴る。」
b′　“**打他。**”
「同上」
b″？ “**对他打。**”
c　“**用鞭子对狗抽去。**”
「鞭で犬を（×に対して）打つ。」
c′　“**抽狗。**”
「同上」
c″？ “**对狗抽。**”
d　“**对仇敌砍去。**”
「仇敵を（×に対して）切る。」
d′　“**砍仇敌。**”
「同上」
d″＊“**对仇敌砍。**”
e　“**对自行车踢去。**”
「自転車を（×に対して）蹴る。」
e′　“**踢自行车。**”
「同上」
e″＊“**对自行车踢。**”

(15)では、“**对**”に後接する賓語の“**田中**”（「田中」(15)a)、“**他**”（「彼」(15)b)、“**狗**”（「犬」(15)c)、“**仇敌**”（「仇敵」(15)d)、“**自行车**”（「自転車」(15)e）は、(15)a′、(15)b′、(15) c′、(15)d′、(15)e′が示すように、意

味上それぞれ“**看**”（「見る」(15)a)、“**打**”（「殴る」(15)b)、“**抽**”（「打つ」(15)c)、“**砍**”（「切る」(15)d)、“**踢**”（「蹴る」(15) e）の述語動詞の対象であり、方向・位置の性質を持っていない。また、(15)a″（*“**对田中看**”)、(15)b″（?“**对他打**”)、(15)c″（?“**对狗抽**”)、(15)d″（*“**对仇敌砍**”)、(15)e″（*“**对自行车踢**”）が示すように、「方向補語」の「去」をつけないと、“**对**”文は成り立ちにくい。言い換えれば、(15)では、「方向補語」の「去」をつけると、文が成り立つのみならず、“**对**”は述語動詞が働きかける「対象」を示すと同時に、働きかける「方向」をも示している。さらに言えば、“**对**”が「方向」を表すための条件は、“**对**”に後接する賓語が方向・位置の性質を持つか否かのみならず、述語動詞が「方向性」を持つ（「方向補語」の“去”をつけられる）か否かもその条件の一つのようである。この点についても、先行研究では明確に記述されていない。

このような「方向補語」の“去”をつけられるタイプの動詞は、先に挙げた“**看**”、“**打**”、“**抽**”、“**砍**”と“**踢**”の他、“**咬**”（「噛む」）“**刺**”（「突き刺す」）“**顶**”（「突く」）“**敲**”（「叩く」）“**劈**”（「切る」）“**骂**”（「罵る」）“**摸**”（「なでる」）などがある。

一方、日本語の場合、対応する諸動詞は、「を」を使って働きかける対象を表すだけで、方向を示さないのが普通のようである。

３・２・２　「対処関係」を表す“対”について

この「対処関係」について、傅雨賢他（1997）は次のように説明している。

> “**对待关系一般只存在于有意志的主体与某一对象之间，主体可以把某种性状、行为等加于某一对象之上。**”(p184)「対処関係は、通常、意志の有る主体と、ある対象の間にしか存在せず、主体はある性状、行為等を、ある対象に加えることが出来る。」

３・２・２・１　「対処関係」を表す“対”文の述語

この「対処関係」を表す“**对**”文の述語は、大きく分けると形容詞述語と動詞述語の２種類があるとする。

Ａ．形容詞述語の場合

この場合、主として人と人または人と事物の間の「対処関係」を表すとされ、主語は人称名詞、“**对**”の賓語は人称名詞、事物名詞で、時に動詞句で構成される場合もあるという。述語形容詞は、人間の性情または品性を表すものが多く、たとえば、“**好**”（「よい」）“**不错**”（「素晴らしい」）“**严格**”（「厳しい」）“**亲热**”（「熱心だ」）“**冷淡**”（「冷たい」）“**直爽**”（「率直だ」）“**大方**”（「気前がよい」）“**忠诚**”（「忠実だ」）“**谦虚**”（「謙虚だ」）“**谨慎**”（「慎重だ」）“**负责**”（「責任感がある」）“**粗鲁**”（「荒っぽい」）“**大意**”（「いいかげんだ」）“**随便**”（「気ままだ」）“**和气**”（「穏やかだ」）“**客气**”（「礼儀正しい」）“**傲慢**”（「傲慢だ」）“**凶残**”（「残酷だ」）“**马马虎虎**”（「ぞんざいだ」）“**一丝不苟**”（「まじめだ」）“**态度好**”（「態度がよい」）“**感情深**”（「感情が深い」）などの例が挙げられている。

（１6）a “**他对这个工作不热心，甚至可以说是冷淡的。**”
「彼はこの仕事に対しては、熱心ではなく、甚だしくは冷淡とも言える。」
b “**赵子曰灌下两杯酒，对李景纯非常亲热。**”
「趙子曰は酒を２杯飲んで、李景純に対しては随分親しかった。」
c “**猫是喂不熟的，又偷吃嘴儿，狗对人才忠呢。**”
「猫はいくら飼ってもなついてくれず、また盗み食いする。犬は人間に対して忠実だよ。」
d “**他对干这种事特别积极。**”
「彼はこのようなことをするのに対してすごく熱心です。」
ｅ **现在形势变了，任务变了，对新事物要敏感，……**”（**沸腾的群山**・p262）
「いまや、形勢がかわり、任務もかわりました。新しい事物に対して敏感でなければなりません。）（沸き立つ群山・p292）

Ｂ．動詞述語の場合

この場合、主語は通常人称名詞、事物名詞、述語は行為動詞が一番よく使用され、形式動詞、存在動詞、判断動詞[20]が使用される場合もあるが、動作動詞は使用されないとされる。“**对**”の賓語は人間･事物を表す言葉が一番多く、動詞句、文で構成される場合もあるという。

（１７）a“**老头子对儿子的处境自然十分担心**（行為動詞）。”
「お爺さんは、息子の立場に対して、当然非常に心配している。」

[20]判断動詞について、3･2･3 で説明する。

b“ 本文试对‘ 有’ 字用法作（形式動詞）一番全面概括。”
「本文は「有」という字の用法を全面的に概括してみる。」
c“ 妈妈的话对我也很有（存在動詞）启发。”
「母の話は、私に対しても大いにヒントを与えた。」
d“ 船队的群众对不宣传龙根（“对”の賓語が動詞句で構成される例）很有意见。”
「船隊の人々は、龍根を宣伝しないことに対して、かなり意見がある。」
e“ 郑百如对这件事是（判断動詞）什么态度呀？”
「鄭百如はこの事に対して、どんな態度ですか。」
f“ 他知道乔光朴对他出去（“对”の賓語が文で構成される例）并不抱信心。”(锅碗瓢盆交响乐・p56)
「彼は、喬光朴が彼が出かけることに対して、自信を持っていないことが分かる。）（鍋釜交響曲・p66）

３・２・２・２　「対処関係」を表す“对”の賓語と述語動詞との意味関係

先行研究の成果を元に「対処関係」を表す「対」と述語動詞との意味的な関係を整理すると、以下Ａ～Ｄの四類に分けることができるだろう。

Ａ．“对”の賓語が意味上述語動詞の対象であるタイプ。

（18）a で言えば、述語動詞は“敌视”（「敵視する」）で、“对”の賓語は“他”（「彼」）である。“对他敌视”（「彼を敵視する」）を“敌视他”（「彼を敵視する」）のように、直接、述語の対象となる文におきかえることができるもの。

（１８）a　“三等的中国学生觉得他也是学生而摆阔坐二等，对他有点敌视。”
「三等車（に乗る）の中国学生は、彼も学生なのに大尽風をふかして二等車に乗るなんてと思って、彼をちょっと敵視している。」
a′　“三等的中国学生觉得他也是学生而摆阔坐二等，有点敌视他。”
「同上」
b　“对这个消息，他说不上是应当喜欢，还是不喜欢。”
（骆驼祥子(原)·p359）
「この事件を喜んでいいものか、悲しむべきことなのか、祥子には見当がつかなかった。」（駱駝祥子(訳)・p251）
b′　“他说不上是应当喜欢，还是不喜欢这个消息。”
「同上」

c　“现在她对矿山的一切都理解了，……”（沸腾的群山・p465）
「ところが、いまでは、かのじょは鉱山のすべてを、すっかり理解してしまった。」（沸き立つ群山・ p 494）

c′　“她理解了矿山的一切。”
「同上」

d　“斯大林对我们党是有些瞧不起。”（黒雪(原)・p64）
「スターリンはわが党を過小評価しています。」（黒雪(訳)・p43）

d′　“斯大林是有些瞧不起我们党。”
「同上」

e　“一方面他始终认为麦克阿瑟对他不信任，因而他耿耿于怀。”
(黒雪(原)・p55)
「それにもかかわらず、いつもマッカーサーが彼を信任していないのを知っており、気にかかっていた。」（黒雪(訳)・p86）

e′　“一方面他始终认为麦克阿瑟不信任他，因而他耿耿于怀。”
「同上」

B．“对”の賓語が意味上述語動詞の対象ではないタイプ。

（19）d で言えば、述語動詞は“取”（「採る」）で、“对”の賓語は“白崇禧及西南各敌”（「白崇禧及び西南地方の諸敵」）である。“对白崇禧及西南各敌取…之方针”は、“取…之方针白崇禧及西南各敌”のように、直接、述語の対象となる文にはおきかえることができないもの。

（１９）a　“欢喜只是气愤，而并不难受，也不对互助组的事有一点动摇。”
「歓喜は怒っただけで、辛いとは思わず、互助組のことに対して少しも動揺していない。」

a′ ＊“欢喜只是气愤，而并不难受，也不动摇互助组的事。”

b　“你对那个苦人儿也是铁石心肠。”
「あなたはあの苦しんでいる人に対しても全く動じない。」

b′ ＊“你也是铁石心肠那个苦人儿。”

c　“为了向中国方面表示我们在朝鲜并没有长远打算，也不对满州抱有希望。”（黒雪（原）・p214）
「中国側に対して、われわれが朝鮮において長期的な戦略行動をとる意図のないこと、満州に対して何の企図のないことを表明しようとしたのかもしれません。」（黒雪（訳）・p242）

c′ ＊“为了向中国方面表示我们在朝鲜并没有长远打算，也不抱有希望满州。”

d　“我对白崇禧及西南各敌均取大迂回动作，插至敌后，先完成包围，然后再回打之方针。”（毛泽东传（原）・p924）

「白崇禧及び西南地方の諸敵に対しては、いずれも大規模な迂回の行動を取って、敵の後方まで突っ込んで、まず包囲を完成させてから、叩くという方針を採る。」（毛沢東伝（訳）・p871）

d′＊“我均取大迂回动作，插至敌后，先完成包围，然后再回打之方针白崇禧及西南各敌。”

e　“ 表面上这人跟周彪不同，对国民党充满了仇恨，对矿山充满了感情。”（沸腾的群山・p23）

「この男は表面的には、周彪とちがって、国民党にたいしてうらみをいだき、鉱山にたいして愛情をもっている。」（沸き立つ群山・p28）

e′＊“ 表面上这人跟周彪不同，充满了仇恨国民党，充满了感情矿山。”

C.“ 对”の賓語は意味上述語動詞の対象ではないが、“ 对”の賓語は意味上述語動詞の目的語の対象であるタイプ。

（20）b で言えば、述語動詞は“ 做”（「する」）で、述語動詞の目的語は“ 准备”（「準備」）で、“ 对”の賓語は“ 仁川的防务”（「仁川の防衛」）である。“ 对仁川的防务未曾做到应有的准备”（「仁川の防衛に対してはまだ準備していない」）の“仁川的防务”を直接述語の対象とする文に置き換えらることはできないが、“ 未准备仁川的防务”（「仁川の防衛をまだ準備していない」）のように、述語の目的語の対象とする文にはおきかえることができるもの。

（２０）a “为了能够让不喜饮酒的读者对我岳父的学识有个大概的了解，……”（酩酊国・p276）

「飲酒を好まぬ読者にも私の岳父の学識の概要を理解してもらうため、･･･」（酒国・p226）

a′　“为了能够让不喜饮酒的读者了解我岳父的学识，……”

「同上」

b “ 他们对仁川的防务未曾做到应有的准备。”（黒雪（原）・p23）

「彼らは仁川の防衛に対してはまだ準備していないはずです。」（黒雪（訳）・p34）

b′“ 他们未准备仁川的防务。”

「彼らは仁川の防衛をまだ準備していないはずです。」

c “ 他们之所以在‘ 5·19’那天闹出一些对外国人或港澳同胞的不雅之

事，充其量不过是对外国人或港澳同胞在北京所显示出来的某些特权和优越感，喷发出他们潜意识中回荡、压抑已久的不理解、不谅解、不满与嫉妒而已。”（5·19 长镜头・p32）

「彼らが、“五·十九”当日、外国人や香港・マカオの同胞に対して不祥事を引き起こしたわけは、外国人や香港・マカオの同胞が北京でひけらかす、ある特権や優越感に対して、彼らが潜在意識の中に蓄え、長らく押さえつけていた反発、違和感、不満、嫉妬を吐き出そうとしたに過ぎない。」

（五·十九　クロースアップ・p37）

c′“ 他们之所以在‘5·19’那天闹出一些对外国人或港澳同胞的不雅之事,充其量不过是他们不理解、不谅解、不满与嫉妒外国人或港澳同胞在北京所显示出来的某些特权和优越感而已。”

「彼らが、“五·十九”当日、外国人や香港・マカオの同胞に対して不祥事を引き起こしたわけは、外国人や香港・マカオの同胞が北京でひけらかす、ある特権や優越感を、理解せず、諒解せず、それに反発し、嫉妬したにすぎない。」

d “ 全世界和我们自己，对我们这个民族该作出怎样的评价呢？”

（5·19 长镜头・p328）

「全世界そして私達自身、わが民族に対して、どのような評価を下したであろうか。」（五·十九　クロースアップ・p37）

d′“ 全世界和我们自己，怎样评价我们这个民族呢？”

「全世界そして私達自身、どのようにわが民族を評価したであろうか。」

e “ 老先生对司机更怀有深入的理解，因而能产生出最宽宏的谅解。”

（公共汽车咏叹调・p364）

「老人は、運転手に対しては、いっそう深い理解を持っていたからこそ、寛容な態度を示すことが出来たのだ。」

（バスのアリア・p102）

e′“ 老先生理解司机，因而能产生出最宽宏的谅解。”

「老人は、運転手のことを理解していたからこそ、寛容な態度を示すことが出来たのだ。」

f “ 由于过去矿山还没有党组织，矿工很少受到党的教育，他们对党还没有足够的认识。”（沸腾的群山・p61）

「これまで鉱山には党のそしきがなかったので、鉱夫たちは、ほとんど党の教育はうけておらず、党に対しても、じゅうぶんな認識もない。」（沸き立つ群山・p68）

f′“ 由于过去矿山还没有党组织，矿工很少受到党的教育，他们没有认

识党。”

「これまで鉱山には党のそしきがなかったので、鉱夫たちは、ほとんど党の教育はうけておらず、党のことを認識していない。」

D.“ 对”の賓語は意味上述語動詞の対象ではないが、意味上述語動詞で構成された動賓（動詞・目的語）構造において、目的語の定語（連体修飾語）となる、動名詞の対象であるタイプ。

（21）c で言えば、述語動詞は“ 作”（「する」）で、述語動詞の目的語は“ 工作”（「作業」）で、述語動詞の目的語の連体修飾語は“ 争取”（「獲得（する）」）で、“ 对”の賓語は“ 国民党剩余军队”（「国民党の残存部隊」）である。“ 对国民党剩余军队作争取工作”（「国民党の残存部隊に対して獲得活動を行った」）は、“ 争取国民党剩余军队”（「国民党の残存部隊を獲得する」）というようにおきかえることができるもの。

（２１）a “ 就在刚才几分钟以前，自己还在对他怀着一种同情的心理，这是多么幼稚可笑啊。”

「つい数分前、自分は依然として彼に対して同情を寄せていた。これは何と幼稚だろう。」

a′“ 就在刚才几分钟以前，自己还在同情他，这是多么幼稚可笑啊。”

「つい数分前、自分は依然として彼に対して同情していた。これは何と幼稚だろう。」

b “ 但创造社、太阳社的某些成员……对鲁迅作了错误的分析，对他采取了排斥以至无原则的攻击的态度。”

「しかし創造社、太陽社の一部のメンバーは……魯迅に対して錯誤的分析を行い、彼に対しては、排斥甚だしくは無原則的な攻撃的態度を取っていた。」

b′“ 但创造社、太阳社的某些成员……对鲁迅作了错误的分析，排斥以至无原则的攻击了他。”

「しかし創造社、太陽社の一部のメンバーは……魯迅に対して錯誤的分析を行い、彼を排斥し、且つ無原則的に攻撃した。」

c “ 此外，毛泽东通过已站到人民方面来的国民党军政要员对国民党剩余军队作争取工作。”（毛泽东传（原）・p924）

「この他、毛沢東はすでに人民の側に立っている国民党の軍・政府要員を通して、国民党の残存部隊に対する獲得活動を行った。」（毛沢東伝（訳）・p874）

c′“ 此外，毛泽东通过已站到人民方面来的国民党军政要员争取国民党

剰余军队。”
「この他、毛沢東はすでに人民の側に立っている国民党の軍・政府要員を通して、国民党の残存部隊を獲得した。」

３・２・３「対象・目標」を表す“ 对”と「対処関係」を表す“ 对”との違い

さて、「対象・目標」を表す“**对**”と「対処関係」を表す“**对**”とは、どのように違うのだろうか。先行研究を元にその相違点を整理すると次の 3 点にまとめることができる。

A.「対象・目標」を表す場合は、述語動詞は主として動作動詞で、行為動詞、形式動詞、存在動詞が使用される場合もある。これに対し、「対処関係」を表す場合は、述語は、主として行為動詞と形容詞（性情または品性を表すものが多い）である。形式動詞、存在動詞、判断動詞が使用される場合もあるが、動作動詞は使用されない。

ここで示した「行為動詞」「形式動詞」「存在動詞」などの中国語の動詞の分類について、簡単に整理しておこう。

まず、「行為動詞」であるが、傅雨賢他（1997）は、これを“ **不表示具体动作，所表示的意义总是偏抽象。**”（p177）「具体的な動作を表さず、示している意義はいつも抽象に偏っている。」と説明している。代表的なのは、“ **满意**”（「満足する」）“ **佩服**”（「敬服する」）“ **尊重**”（「尊重する」）“ **同情**”（「同情する」）“ **了解**”（「了解する」）“ **熟悉**”（「熟知する」）“ **喜欢**”（「好む」）“ **关心**”（「関心を持つ」）“ **讨厌**”（「嫌う」）“ **怀疑**”（「疑う」）“ **懊悔**”（「後悔する」）“ **遵守**”（「遵守する」）“ **照看**”（「世話する」）“ **要求**”（「要求する」）“ **教育**”（「教育する」）“ **管理**”（「管理する」）“ **在乎**”（「問題にする」）などである。

「形式動詞」について、李臨定（1990）は、“ **形式动词是指本身不具有实在意义而只能以动词名词化形式为宾语的动词。形式动词主要有三个：进行、加以、作**’”（p105）「形式動詞とは、それ自身が実際の意義を持たず、動名詞しか目的語とできないような動詞を指す。該当する動詞は主として「進める、かける、する」の三つがある。」と説明している。

「存在動詞」について、黄国栄他（1983）は、“ **表示存在、变化、消失的：在、存在、发生、有、演变、发展、生长、死亡、消失。**”（p315）「存在、変化、消失の意味を表し、たとえば：「ある、存在する、発生する、持つ、進展変化する、発展する、生長する、死亡する、消失する」などである。」と説明している。

「判断動詞」について、黄国栄他（1983）は、“表示判断的（判断动词）：是。”（p315）「判断の意味を表している‘是’である。」と説明している。張静他（1982）は“判断动词除了‘是’外，还包括‘叫、算、等于、叫作、象’等，为数不多。这类动词主要是联系主语和宾语，表示它们同属一类，一般不能直接重叠，不能缀加‘了、着、过’。”（p104）「判断動詞には、“是”を除き、「…という、…とする、…と同じである、…と呼ばれる、似せる」などが含まれ、数はそれほど多くない。この種類の動詞は主として主語と目的語を結びつけ、それらが同じ種類に属することを示す。一般的には直接重ねることが出来ず、“了、着、过”[21]をつけることが出来ない。」と説明している。

B．「対象・目標」を表す“对”は、介詞“向”と交替でき介詞“对于”とは交替できない。

（２２）a “他对我笑笑。”
「彼は私にむかって笑った。」
a′ “他向（×对于）我笑笑。”
「同上」
b “他已经对党委表过决心了。”
「彼はすでに党の委員会に対して自分の決意を表明した。」
b′ “他已经向（×对于）党委表过决心了。”
「同上」
c “警察对犯人打了一拳。”
「警察官は拳骨で犯人をいっぱつ殴った。」
c′ “警察向（×对于）犯人打了一拳。”
「同上」
d “盗窃犯对店员刺了三刀。”
「窃盗犯はナイフで店員を三回も刺した。」
d′ “盗窃犯向（×对于）店员刺了三刀。”
「同上」
e “经理对部长大骂了一顿。”
「社長は部長をさんざんに悪罵した。」
e′ “经理向（×对于）部长大骂了一顿。”

[21] 中国語では、“了”は動詞・形容詞の後ろに置き、動作・行為の完了や状態の変化などを表す。“着”はアスペクトを表す助詞で動詞・形容詞のすぐ後につき、「(1) …している。(2) …ている、…てある。(3)（…に）…ている、…てある」などの意を表す。“过”は「…したことがある」などの意味を表す。

「同上」

C.「対処関係」を表す“ 对”は、一般的に介詞“ 对于”とは交替できるが、介詞“ 向”とは交替できない。

（２３）a “ 二强子对女儿回来，没有什么表示。”
「二強子は娘の帰りに対して、何も言わなかった。」
a′“ 二强子对于（×向）女儿回来，没有什么表示。”
「同上」
b “ 他对她很同情，向古尚清说：……”（沸腾的群山・p27）
「唐黎は彼女にひどく同情して、古尚清に言った。」
（沸き立つ群山・ｐ32）
b′“ 他对于（×向）她很同情，向古尚清说：……”
「同上」
c “ 那女人对唐黎很感激，……”（沸腾的群山・p27）
「おかみさんは、唐黎のことばに、ひどく感激した。」
（沸き立つ群山・ｐ32）
c′“ 那女人对于（×向）唐黎很感激，……”
「同上」
d “ 斯大林对我们党是有些瞧不起。”（=（18）d）
「スターリンはわが党を過小評価しています。」
d′“ 斯大林对于（×向）我们党是有些瞧不起。”
「同上」
e “ 一方面他始终认为麦克阿瑟对他不信任，因而他耿耿于怀。”
（=（18）e）
「それにもかかわらず、いつもマッカーサーが彼を信任していないのを知っており、気にかかっていた。」
e′“ 一方面他始终认为麦克阿瑟对于（×向）他不信任，因而他耿耿于怀。”
「同上」

先行研究では、「対象・目標」を表す“ 对”の述語動詞は主として動作動詞で、行為動詞、形式動詞、存在動詞が使用される場合もあるとされ、「対処関係」を表す“ 对”の述語動詞は、主として行為動詞で、形式動詞、存在動詞、判断動詞が使用されると、説明されてきたが、「対象・目標」を表す“ 对”に使用される行為動詞、形式動詞、存在動詞と、「対処関係」を表す“ 对”に使用される行

為動詞、形式動詞、存在動詞とがどのような関連性を持つのかについては、明確にされていないようである。[22)]

３・２・４　「に対して」と、「対象・目標」・「対処関係」

これまで論じたように、「に対して」は「対象・目標」を表す“対”と、「対処関係」を表す“対”の両方に対応している。但し、「対象・目標」を表す“対”の場合は、非動作動詞が後続した際しか対応しない。

３・２・４・１　「に対して」に先行する名詞と述語動詞との意味関係

「に対して」に先行する名詞と述語動詞との関係は、意味上三つのタイプがある。

Ａ.「に対して」に先行する名詞が意味上述語動詞の対象であるタイプ。
（24）ｄで言えば、述語動詞は「尊重する」で、「に対して」に先行する名詞は「彼の主張」である。「かれの主張に対して尊重しない」を「かれの主張を尊重しない」というふうにおきかえることができるもの。

（２４）a　「身内である党幹部に対して敵対階級のレッテルである「貴族」という表現で批判するのは異例のことだ。」（産・2000.11.1）
a′　「敵対階級のレッテルである「貴族」という表現で身内である党幹部を批判するのは異例のことだ。」
b　「でも、わたしのような人間に、分不相応なほどのあんなにしあわせな日がたとえあれだけの期間とはいえ、あたえられたことに対してわたしはむしろ感謝しなければならないのかもしれません。」（新潮・エディプスの恋人）
b′　「わたしのような人間に、分不相応なほどのあんなにしあわせな日がたとえあれだけの期間とはいえ、あたえられたことをわたしはむしろ感謝しなければならないのかもしれません。」
c　「かえりみち、彼は林のうちのものが、自分に対して、心配してくれたことを、思い出していると、山路を、ひとりの娘がのぼってきた。」（沸き立つ群山・p14）
c′　「かえりみち、彼は林のうちのものが、自分のことを、心配してくれたことを、思い出していると、山路を、ひとりの娘がのぼってきた。」
d　「態度もぶえんりょで、ことに、かれの主張に対しては、尊重しない…」（沸き立つ群山・p400）

[22]この点について、本稿筆者も今明確な結論を下していない。今後の課題にしたい。

d′　「態度もぶえんりょで、ことに、かれの主張を尊重しない…」

B．「に対して」に先行する名詞が意味上述語動詞の対象ではないタイプ。

(25) b で言えば、述語動詞は「(責任を) 負う」で、「に対して」に先行する名詞は「三人」である。「三人に対して責任を負う」を「三人を責任を負う」というふうにおきかえることができないもの。

（２５）a　「国鉄に対して、個人的な恨みを持っている人間ならば、」
(夜行列車殺人事件・ p 42)

a′ ＊「国鉄を、個人的な恨みを持っている人間ならば、」

b　「かれは、じぶんが、三人に対して責任を負うべきであり、かれらをよく保護してやり、連れて出てやらなければならないと思った。」(沸き立つ群山・p515)

b′ ＊「かれは、じぶんが、三人を責任を負うべきであり、かれらをよく保護してやり、連れて出てやらなければならないと思った。」

c　「二人は、いっしょに秧歌をおどってから、接触は多くなり、古月娟は、よく宿舎にかれをたずねてゆき、かれに対して、しだいに、特別な感情をいだくようになっていた。」(沸き立つ群山・p492)

c′ ＊「二人は、いっしょに秧歌をおどってから、接触は多くなり、古月娟は、よく宿舎にかれをたずねてゆき、かれを、しだいに、特別な感情をいだくようになっていた。」

d　「彼は、息子に対していきなり怒りを浴びせ掛けた。」
(五・十九のクローズ･アップ・p14)

d′ ＊「彼は、息子をいきなり怒りを浴びせ掛けた。」

e　「犬神家の家名に対しても、私は捕虜になることを恥じたのです。」
(犬神家の家族・p405)

e′ ＊「犬神家の家名をも、私は捕虜になることを恥じたのです。」

C．「に対して」に先行する名詞は意味上述語動詞の対象ではないが、述語動詞の目的語の対象であるタイプ。

(26) b で言えば、述語動詞は「しかける」で、述語動詞の目的語は「攻撃」で、「に対して」に先行する名詞は「海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船」である。「海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船に対して、いかに数では有利でも、トルコ船はそう簡単には攻撃をしかけてはこなかった」を直接「しかける」の対象とすることはできないが、「攻撃」という事柄名詞の対象として、「いかに数では有利でも、トルコ船は海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船を攻撃してこなかった」というふうにおきかえることができるもの。

（２６）a　「植民地支配に対して内外で謝罪や清算を求める声が出つつあった

58―62 年の録音が主で、」（朝・2000.8.8）

a′ 「内外で植民地支配を謝罪・清算することを求める声が出つつあった 58―62 年の録音が主で、」

b 「海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船に対して、いかに数では有利でも、トルコ船はそう簡単には攻撃をしかけてはこなかった。」（新潮・コンスタンティノーブルの陥落）

b′ 「いかに数では有利でも、トルコ船は海戦力では優れるジェノヴァやヴェネツィアの船を攻撃してこなかった。」

c 「君、関川が急に和賀英良の音楽に対して好意的な批評をはじめたのを気づいただろう。」（砂器・p424）

c′ 「君、関川が急に和賀英良の音楽を好意的に批評したのを気づいただろう。」

d 「もし中国がわれわれに対して空襲をすれば、事態は収拾がつかなくなってしまいます。」（黒雪・p334）

d′ 「もし中国がわれわれを空襲すれば、事態は収拾がつかなくなってしまいます。」

e 「一方、器材をさがしあつめることができ、また一方、鉱山労働者および鉱区の住民全体に対して、ひろく、ふかく、政治思想教育をおこない、そして修復をはじめるきっかけを強化することになる。」（沸き立つ群山・p146）

e′ 「一方、器材をさがしあつめることができ、また一方、鉱山労働者および鉱区の住民全体を、ひろく、ふかく、政治と思想の面から教育し、そして修復をはじめるきっかけを強化することになる。」

３・２・４・２　「に対して」の述語

「に対して」文の述語には、形容詞述語と動詞述語と名詞述語の３種類がある。

Ａ．形容詞述語の場合

実際の用例調査によれば、「に対して」文の述語になる形容詞は、以下示すように、「鋭敏だ、穏やかだ、面白い、懐疑的だ、寛大だ、厳しい、厳格だ、公平だ、残酷だ、小心だ、親切だ、誠実だ、従順だ、自信満々だ、心配だ、鄭重だ、冷たい、強い、情け深い、破壊的だ、恥ずかしい、批判的だ、敏感だ、不機嫌だ、不賛成だ、不満だ、盲目だ、やさしい、有効だ、用心深い、よそよそしい、冷酷だ、冷淡だ、悪い」などがある。

いずれも、主として人または事物に対する、主語である人称名詞の、態度・反応を表す形容詞である点が注目される。

（２７）a「禅は無相を体とするといわれ、自分の心が形も相もないものだと知ることがすなわち見性だといわれるが、無相をそのまま見るほどの見性の能力は、おそらくまた、形態の魅力に対して極度に鋭敏でなければならない筈だ。」（新潮・金閣寺）

b「現在の妻、梅子に対してすら、かれの目つきは穏やかではなかったのだ。」（犬神家の家族・p72）

c「利隆は自分に対して、面白くない。」（新潮・国盗り物語）

d「彼らは一様に内藤のカムバックに対して懐疑的だった。」（新潮・一瞬の夏）

e「それにくらべると、中国の毛利家は、律義と大度をもって知られ、新参や降伏者に対しても、誠実で寛大であった。」（新潮・国盗り物語）

f「このような貴重な情報に対して何故彼らがそんなに冷淡であったかは、こんにちでも依然一つの謎であろう。」（新潮・山本五十六）

g「持ち前の照れ性のせいか何か分らないが、少なくとも表から見たところでは、彼は外の女子供に甘く、内に対しては甚だきびしかった。」（新潮・山本五十六）

h「人生に対してどんなに厳格な人間も名誉心を抛棄しないであろう。」（新潮・人生ノート）

i「それ以上喋ることは、大戸に対して公平ではなかったし、内藤にとってもよいことではないように思えた。」（新潮・一瞬の夏）

j「私は内藤に対してひどく残酷なことをしているのではないかと思った。」（新潮・一瞬の夏）

k「光秀は噂に対して極度に小心な男であった。」（新潮・国盗り物語）

l「東洋史に関する難しい本ばかり読み、自分の研究に対しても、また大学で自分が受け持っている学生たちに対しても、とても誠実な人でした。」（新潮・錦繍）

m「たしかにそれは風に対して有効ではあったが、彼がおそれていたように、呼吸ぐるしかった。」（新潮・孤高の人）

n「女は、よほど気勢をそがれたらしく、行動に対してばかりでなく、言葉に対しても、ひどく従順だった。」（新潮・砂の女）

o「自分の頭の良さに対して、自信満々な男ではないかと、私は思うのです。」（イブが死んだ夜・p208）

p「女のことを夢に見るなんて、と思うと、彼は金言名句に対して、少し恥ずかしかった。」（新潮・さぶ）

q「矢島の御所の幕臣たちは、足利家再興の恩人である光秀に対して鄭重すぎるくらい鄭重だった。」（新潮・国盗り物語）

r「翁は終生、松、竹、梅の三人姉妹に対して冷たい父とならざるを得

なかったのだ。」（犬神家の家族・p298）

s「それにもかかわらず翁は、自分の子どもや妾に対してだけ、なぜかくも冷酷でありえたか。」（犬神家の家族・p267）

t「同級生ばかりでなく、上級生に対しても強かった。」（新潮・孤高の人）

u「前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったのです。」（新潮・こころ）

v「ぼくはご主人に対してはたいへんと悪いと思っているけれど、」（棲息分布・p37）

w「「お上手者」でない山本や米内は、時流に妥協せず、陸軍や右翼に対して批判的であり、部内の強硬派に対しても極めて批判的であった。」（新潮・山本五十六）

x「けれどもニーチェ自身の主観主義は、彼があれほど求めた健康の哲学に対して破壊的であるのほかなかった。」（新潮・人生論ノート）

y「鳥たちは雨ふりに対してとても敏感なの。」（新潮・世界の終わり）

z「私は内心嬢の意見や教授法に対しては甚だ不満でしたけれども、」（新潮・痴人の愛）

B．動詞述語の場合

この場合、主語には通常人称名詞、事物名詞が用いられ、述語には、行為動詞[23]が一番よく使用され、存在動詞、形式動詞[24]が使用される場合もある。動作動詞はめったに使用されないものの、言語活動や思考活動を表す動詞が使用されることがある。「に対して」に先行する名詞は人間・事物を表す語が一番多く、また動詞句、文で構成される場合もある。

（２８）a「私も、別にエディが悪いわけではないとわかっていながら、喫茶店できちんと話しておいてくれなかったことに対して、少し腹を立てていた（行為動詞の例）。」（新潮・一瞬の夏）

b「ただ陸軍の連中とか自分のライバルに対しては、今で言うドライなところ、ちっと残酷なところが山本さんにはあった（存在動詞の例）ようだ。」（新潮・山本五十六）

c「夫に対してべつだん不足はなかった（存在動詞の例）し、かれも私に満足してくれている。」（Ｃの悲劇・p194）

d「また、特定の問題を自分と異なる方面から考えている人に対しては自然に攻撃的になる（形式動詞の例）ことが多いし、時にはそれが

[23]本章で言う「行為動詞」とは、具体的な動作を表さない非動作動詞を指す。

[24]本章で言う「存在動詞」とは、「ある」を指す。本章で言う「形式動詞」とは、(28) d の「なる」のようなものを指す。

高じて憎悪に変わることさえある。」
（新潮・若き数学者のアメリカ）

C．名詞述語の場合

本章で言う「名詞述語」は、「名詞+ダ」の形式を指す。(29) b で言えば、「脅威+でない」になる。

（２９）a「じつは彼女はぼくに対して冷感症なのです。」（新潮・聖少女）
b「米国の五の勢力が、日本の三の勢力に対して脅威でないというなら、日本の五の勢力が、米国の五の勢力に対して脅威になるはずが無いではないか。」（新潮・山本五十六）

以上まとめると、「に対して」は、中国語“对”との比較で言えば、「対象・目標」を表す中国語の“对”の一部と、「対処関係」を表す中国語の“对”とに対応している。日本語の場合は、中国語のように「対象・目標」と、「対処関係」との二用法に分けられる根拠を本稿筆者はまだ見出せないので、それについては今後の課題としたい。

３・３　「関連関係」を表す“对”と「に対して」

「関連関係」について、先行研究を紹介しておこう。

呂叔湘編（1980）では、“对…来说。表示从某人、某事的角度来看。有时候也说‘对…说来’。”（p157）「“对…来说”は、ある人、ある事の角度から見ることを表す。“对…说来”を使用する場合もある」と説明されている。

傅雨賢他（1997）では“（涉及关系）就是指站在某一角度看问题时所涉及到的一定的事和物。…（中略）…‘对’引进的是某种论断、看法等所牵涉到的某个特

定対象。”（p192）「（関連関係は）ある立場に立って問題を観察する際、関連する一定の事と物を指す。…(中略)…“ **対**”が導入したのは、ある論断、見方等が関連するある特定対象である。」と説明されている。

３・３・１　「関連関係」を表す“ **対**”の構文特徴

本稿筆者の観察によれば、「関連関係」を表す“ **対**”文において、主語は事物を表す語が多く、また動詞句、文が主語になる場合もある。述語は存在、判断など抽象的な意味を表す動詞または事物の性質を評価する形容詞が多く、特に“ **对……来说**”という形がよく使用されている。

（３０）a“ **十津川作好了思想准备：对他对妙子来说都是一场危险的游戏。**”

（世家迷雾・p156**）**

「十津川は、それが彼にとっても、妙子にとっても危険なゲームになることは覚悟していた。」（イブが死んだ夜・p164）

＊「十津川は、それが彼に対しても、妙子に対しても、危険なゲームになることは覚悟していた。」

b“ **难道长田史郎对女子来说有这样魅力？”（世家迷雾・**p188**）**

「それほど、長田史郎という男は、女性にとって魅力があるのか。」（イブが死んだ夜・ p 209）

＊「それほど、長田史郎という男は、女性に対して魅力があるのか。」

č **高田礼子的诗对我们作诗的人来说总是一个冲击。”（世家迷雾・**p235**）**

「高田礼子の詩は、われわれ詩を作る者にとって絶えず一つの衝撃であった。」（イブが死んだ夜・ p 246）

＊「高田礼子の詩は、われわれ詩を作る者に対して絶えず一つの衝撃であった。」

d“ 国家建设这个课题对我们来说是生疏的，但是可以学会的。”

（毛泽东传（原）・p910）

「国家建設という課題はわれわれにとって未体験のものではあるが、学び取ることができる。」（毛沢東伝（訳）・p856）

＊「国家建設という課題はわれわれに対して未体験のものではあるが、学び取ることができる。」

e“ 就算你把地球打穿了，把地球炸毁了，对于（对）太阳系来说，还算是件大事情，但是对整个宇宙来说，也算不了什么。”

（黒雪（原）・p228）

「たとえ、そちらが地球に穴を開け、地球を爆破したとしても、そのことは太陽系にとっては大事件ではあるが、宇宙全体にとってはなにほどのことでもありません。」（黒雪（訳）・p359）

＊「たとえ、そちらが地球に穴を開け、地球を爆破したとしても、そのことは太陽系に対しては大事件ではあるが、宇宙全体に対してはなにほどのことでもありません。」

３・３・２　「に対して」と「関連関係」

(30)が示すように、主語が示す結論、人物、概念などが、特定の対象に関連し、その特定の立場から観察する場合、日本語は通常「にとって」の形でその特定の対象を示す。従って、「その立場からみれば」という意味を表す場合、文の主語は、主として事物を表す言葉であり、動詞句や文が主語になる場合もある。そして、後続する述部には、主に評価を表す表現がくる。

この点からすると、通常人称名詞を主語とする「に対して」は、主語の態度を表明するので、“対”が表す「関連関係」には対応しないといえる。

（３１）a 「私はその案に対して、反対する。」
b＊「その案は、私にとって反対する。」
c 「その案は、私にとって名案である。」
d＊「その案は、私に対して名案である。」

４．「に対して」の用法分類と“ 対”

２・２において、本稿筆者は「に対して」の下位分類について、A.「を」と互換できるタイプ、B.「に」と互換できるタイプ、C．他の格助詞と互換不可なタイプ、の３つに分類した。この三つのタイプの「に対して」には、ほぼ“対”が対応すると見なすことができる。

４・１　「を」と互換できるタイプの「に対して」の述語動詞について

用例調査では、このタイプの述語動詞には、「援助する」「嫌がる」「遠慮する」「思う」「解釈する」「懐柔する」「感謝する」「勘違いする」「空襲する」「警戒する」「嫌悪する」「嫉妬する」「渋る」「心配する」「準備する」「信用する」「説得する」「調査する」「同情する」「とりなす」「批判する」「放任する」「容赦する」「喜ぶ」「評価する」「知る」などの動詞が使用されている。

（３２）a「彼らは帰国、休養調整の命令に対しては、むしろ嫌がっている。」
（黒雪・p356）

b「矢須子が重松夫妻に対して遠慮しすぎたことにある。」
（新潮・黒い雨）

c「ただし、最初にこの情報に接したとき、その信憑性に対してはいささか疑わしく思っていた。」（黒雪・p330）

d「この関川は、そのライバル意識から、心ひそかに和賀に対して不快に思っていたのですが、」（砂器・p434）

e「例えば五月さんの、ああいう反応に対して太郎はどう解釈したら自分に対しても、五月さんに対しても誠実でありうるのか。」
（新潮・太郎物語）

f「このため浅井氏に対しては十分以上に懐柔しておかねばならなかった。」（新潮・国盗り物語）

g「フランゼスは、皇帝の胸中が次々ともたらされる暗い情報で張りさけんばかりであるのを知っていたので、ほんの些細な援助に対してこれほどに感謝する皇帝が、哀れに見えてしかたがなかった。」

（新潮・コンスタンティニープル）
h「かえりみち、彼は林のうちのものが、自分に対して、心配してくれたことを、思い出していると、山路を、ひとりの娘がのぼってきた。」（沸き立つ群山・p14）
i「そこで僕はわかったのですが、顔に痣とか傷のある人の心理に対して、僕は随分今まで勘違いをしていた、ということです。」（新潮・太郎物語）
j「もし中国がわれわれに対して空襲をすれば、事態は収拾がつかなくなってしまいます。」（黒雪・p334）
k「追求しながら、彼はふと、山行中に一時は倒れそうなくらいに疲労を見せた彼女が、そのことについていささかの疲労も見せないし、彼の追求に対して嫌悪しないばかりでなく、明らかに彼女自身の反応を見せて来るのを不思議なことに感じていた。」（新潮・孤高の人）
l「彼らは仁川の防衛に対してはまだ準備していないはずです。」（黒雪・p34）
m「加藤が、横須賀の出張に対して、やや渋ったのは宮村健のことだった。」（新潮・孤高の人）
n「つい最近始めたばかりだと言えば、相手もちょっと商品に対して信用出来ないだろうと思ったからです。」（新潮・錦繡）
o「茨木城主の中川清秀に対しては、その親友たちを派遣して説得させた。」（新潮・国盗り物語）
p「彼らに対しては情熱をもって援助してやるのが正しい。」（沸き立つ群山・p354）
q「わたしは技術は分からない、厳浩の計画に対して、的確な評価は出来ない。」（沸き立つ群山・p187）
r「母は、その出来事に対してとりなしてくれもしなかった。」（新潮・太郎物語）
s「いや、その以前から彼は、実施家としては確かに才能を持っていたにちがいない養父の診察ぶりに対して、ひそかに首をふり批判もしていたほどなのである。」（新潮・楡家の人びと）
t「彼等は外山教官の思いやりのある処置に対して喜びながらも反射的に影村を代表とする一部教官の冷酷な面を思い出したのである。」（新潮・孤高の人）
u「家来に対して容赦をせぬ。」（新潮・国盗り物語）
v「その両方に対しては、私はいっさい知らないのであります。」（棲息分布・p312）

「に対して」が直接動詞の対象となるもの以外に、動詞が名詞化[25]して、述語動詞の目的語として現れ意味上「に対して」に先行する名詞が動詞と対象との関係を構成する場合もある。たとえば、(33) a では「勘違い」は「する」の目的語であるが、意味上、「に対して」に先行する名詞（「顔に痣とか傷のある人の心理」）は、「顔に痣とか傷のある人の心理を勘違いする」のように「勘違いする」という動詞の対象となっている。 (33)b では「警戒」は「する」の目的語であるが、意味上、「に対して」に先行する名詞（「誰」）は、「警戒する」という動詞の対象となっている。

（３３）a「そこで僕はわかったのですが、顔に痣とか傷のある人の心理に対して、僕は随分今まで勘違いをしていた、ということです。」（新潮・太郎物語）

b「だいいち私はいったい誰に対して警戒をすればいいのだ？　記号士か、それとも『組織』か、それともあのナイフの二人組か？　三つものグループを相手にまわしてうまく立ちまわることなんて、とてもではないが今の私の手にあまる。」（新潮・世界の終わり）

４・２　「に」と互換できるタイプの「に対して」について

（３４）a　“谁对美下得了手？”（土门(原)・p207）

a′「美しいものに手を掛ける度胸のある人間はいないじゃないか。」（土門（訳）・p36）

b　“成义却对我们药房提出一整套要求。”（土门(原)・p342）

b′「ところが成義は、わたしたち薬坊に対して一連の要求を出してきた。」（土門（訳）・p249）

c　“游刚有个毛病，一向对女人都比较客气，……”

（锅碗瓢盆交响乐・p218）

c′「游剛はもともと女性に弱い。女性に対していつも手加減をするし、

[25] 「勘違いする」と「警戒する」をそれぞれ「勘違い」と「する」、「警戒」と「する」とに分析できる。「勘違い」と「警戒」は「動名詞」と呼ばれる部分に属する。

…」（鍋釜交響曲・p158）

(34)が示すように、中国語の“**对**”を日本語に翻訳する際、「に」（（34）a と（34）a′）で訳するのがふさわしいものと、「に対して」（（34）b、(34) b′と(34) c、(34) c′）で訳するのがふさわしいものとがある。どんな場合に「に」になり、どんな場合に「に対して」になるかについては、おおよそ以下のような傾向が見られる。[26)]

A．(34) b′のように、「抗議する・請求する・反抗する・反発する・抵抗する･要求する」など相手と対立的な関係にある意味合いを持つ動詞が後続する場合、「に対して」が多く使用される。
B．(34) c′のように、文が明らかに対比的な意味を示す場合、「に対して」が多く使用される。

４・３　他の格助詞と互換不可なタイプの「に対して」について

このタイプについて、山下他（1994）では、(35) a、(35) b などの用例を挙げ、「既存の格助詞ではまかないきれない格関係を表す機能を「に対して」が果たしている。」(p22) と説明されている。

（３５）a「そういう個人的な問題に対して、会社としてそこまでケアするのは妥当ではない。」
b「職務上の失敗に対しては当然ペナルティを覚悟しなければならない。」

また、塚本（1991）では、(36) a、(36) b の用例を出し、「ドイツ軍に対して」は「抵抗する」にとっては「必須補語」なのに対し、「姉さんに対して」は「惜しむ」にとっては「副次補語」である（p85）と説明されている。

（３６）a「フランス軍はドイツ軍に対して抵抗した。」
b「叔父さんは姉さんに対して賛美を惜しまなかった。」

このような他の格助詞と互換不可な「に対して」について、本稿筆者は、以下のように考えている。

[26]A．については、森田・松木（1989）、山下他（1994）も同様のことを指摘しており、B．については、山下他（1994）も同様のことを指摘している 。

A.(37)が示すように、述語動詞そのものが目標を要求する働きはないが、目標を示す必要がある場合は、「に対して」が使用される。例えば、(37) a の「和む」、(37) b の「取り戻す」、(37) c の「得る」は、もともと目標を要求しないが、「に対して」により、目標を明確に示すことが出来るようになる。

(３７) a「呪詛と憎悪の間にも、たまゆらの凪のようにふと心が夫に対して和むことがある。」(青春の証明・p65)

b「田ノ倉五平はこうして相模に対しては従来の威厳と権限を取り戻すことができたが、併し高男に対してはどういうものか頭が上がらなかった。」(射程・p253)

c「セメント工場を経営したいと思ったそもそもの動機は、三石多津子に対して、自分が多少でも人前に出られる社会的地位を得たいだけのことであった。」(射程・p310)

B. (38) が示すように、述語動詞は、通常具体的な場所を目標として要求するが、その目標を人間性名詞または抽象的な事項として示す必要がある場合は、「に対して」が使用される。例えば、(38) a の「飛ばす」、(38) b の「出る」は、通常具体的な場所を表す目標を「に」格として要求するが、その目標を人間性名詞でもって示す必要がある場合は、「に対して」が使用される。(38) c の「渡す」、(38) d の「積み上げる」は、通常具体的な場所や人物を目標として示すが、「に対して」により抽象的な事項を目標として示している。

(３８) a「しかし、物量と科学の粋でよろった米機動部隊にたいして誇大な大和魂だけで武装しての紙飛行機を飛ばすような特攻に疑惑を持たざるを得なくなった。」(青春の証明・p130)

b「辻に対しては、改めて出なおしてくるつもりで。」(Cの悲劇・p164)

c「堀川といえば、根元は彼の念入りの調査に対して改めて三万円を渡した。」(棲息分布・p251)

d「結婚以来、夫に対して憎悪しか積み上げてこなかった妻が、最近急激に変化してきた。」(青春の証明・ p 94)

C. (39) が示すように、述語動詞が形式動詞か、または「名詞+ダ」の形式になった場合は、目標を表すために、「に対して」がよく使用される。

（３９）a「鏡子はこの頃高男に対してひどく臆病になり、この若い愛人を自分の手許にとどめておくことに汲々としていた。」（射程・p274）
b「業界に対しても俄かに彼の土建会社は注目の的になる。」（棲息分布・p231）
c「初子は、山根に対して半分パトロンのような気持ちでいて、今までも彼の欲しいものはもとより、自分から何かと買って与えた。」（棲息分布・ p 199）
d「青沼禎二郎は女に対してなかなかのベテランのようだった。」（塗られた本・p109）

４・４　「N+数量詞+に対して」と「…のに対して」について

グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）では、（40）と（41）の例を挙げ、(40)について、「数量で表された数を単位として、「その単位に応じて」の意を表す。「…について」「…につき」に言いかえられる。」（p443）と、（41）について、「対比的なふたつのことがらを並べて示すのに用いる。」（p443）と、それぞれ説明されている。このタイプの「に対して」は、意味上、上述した「に対して」と若干異なり、またそれに対応する中国語が“**对**”ではなく、（42）と（43）が示すように、（42）では“**每**”、（43）では“**与…相对**”になるので、本章では、これ以上触れないことにする。

（４０）a「研究員一人に対して年間 40 万円の補助金が与えられる。」
b「学生 20 人に対して教員一人が配置されている。」
c「砂 3 に対して 1 の割合で土を混ぜます。」
d「学生一人に対して 20 平米のスペースが確保されている。」

（４１）a「彼が自民党を支持しているのに対して、彼女は共産党を支援している。」
b「兄が背が高いのに対して、弟の方はクラスで一番低い。」

（４２）「学生 20 人に対して教員一人が配置されている。」

“**每 20 名学生配备一名教师。**”

＊“対 20 名学生配备一名教师。”

（４３）「彼が自民党を支持しているのに対して、彼女は共産党を支援している。」

“与他支持自民党相对，她支持共产党。”

＊“对他支持自民党，她支持共产党。”

５．まとめ

以上、本章では、“**对**”と「に対して」について先行研究を検討し、用例調査を行った上で、主として四つの内容を論じた。それらをまとめると、以下のようになる。

５・１　中国語の介詞“**对**”の用法分類

Ａ．“**表示方向**”（「方向」を表す）。
Ｂ．“**表示对象目标**”（「対象・目標」を表す）。
Ｃ．“**表示对待关系**”（「対処関係」を表す）。
Ｄ．“**表示涉及关系**”（「関連関係」を表す）。

本章では、“**对**”について、以下のような問題点を指摘し、検討を加えた。

まず、“**对**”が「方向」を表す場合に、その条件は、“**对**”の従う賓語が方向・位置の性質を持つか否かのみならず、述語動詞が「方向性」を持つ（「方向補語」の“**去**”をつけられる）か否かもその条件の一つになる。

次に、「対象・目標」を表す“対”の賓語と述語動詞との意味関係について、“対”の賓語は意味上述語動詞の対象であり、そして“対”の賓語を述語動詞の後に復元可能なタイプの場合、このタイプの“対” 文を成立させるのには、述語動詞が具体性を持つ動詞であるという条件のほか、述語動詞に「動量補語」（“一眼”「ちらりと見る」、“一脚”「一回蹴る」、“一拳”「拳骨で一回殴る」、“三刀”「ナイフで三回刺す」、“一頓”「（さんざんに）殴る」など）をつけないと、このタイプの文は成立しない。

第三、「対象・目標」を表す“対”の賓語と述語動詞との意味関係において、

A．「“対”の賓語が意味上述語動詞の対象である」タイプの述語動詞は、全て具体的な動作を表す動詞で、且つ殆ど一音節動詞である。抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞、存在動詞は使用されない。
B．「“対”の賓語が意味上述語動詞の対象ではない」タイプの述語動詞には、具体的な動作を表す動詞と抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞などが含まれている。
C．「“対”の賓語が意味上述語動詞の対象ではないが、“対”の賓語が意味上述語動詞の目的語の対象である」タイプの述語動詞は、全て抽象的な意味を表す行為動詞、及び形式動詞で、且つ殆ど二音節動詞である。具体的な動作を表す動詞は使用されない。

第四、先行研究では、「対象・目標」を表す“対”の述語動詞は主として動作動詞で、行為動詞、形式動詞、存在動詞が使用される場合もあるとされ、「対処関係」を表す“対”の述語動詞は、主として行為動詞で、形式動詞、存在動詞、判断動詞が使用されると、説明されてきたが、「対象･目標」を表す“対”に使用される行為動詞、形式動詞、存在動詞と、「対処関係」を表す“対”に使用される行為動詞、形式動詞、存在動詞とがどのような関連性を持つのかについては、明確にされていないようである。

５・２　日本語の複合格助詞「に対して」文の構文について、本稿筆者が行った用例調査を通じて、以下の内容を論じた。

まず、「に対して」文の述語になる形容詞について、主として人または事物に対する、主語である人称名詞の、態度・反応を表明する形容詞で構成されてい

る。

次に、「に対して」文において、主語には通常人称名詞、事物名詞が用いられ、述語には、行為動詞が一番よく使用され、存在動詞、形式動詞が使用される場合もある。動作動詞はめったに使用されないものの、言語活動や思考活動を表す動詞が使用されることがある。「に対して」に先行する名詞は人間・事物を表す語が一番多く、また動詞句、文で構成される場合もある。

第三、「に対して」に先行する名詞が具体的に方向または場所を表す語であっても、具体的に移動する意味を表す述語動詞が現れない。述語動詞が具体的に移動する意味を表す語であっても、「に対して」に先行する名詞には具体的に方向または場所を表す語が現れない。「に対して」は、抽象的な「対象＋方向性」を表すことや「相手+方向性」のような意味を表すことはあっても、中国語の“对”のように、具体的な「方向」を表すことは出来ず、両者は対応しないと結論づけることができる。

５・３　日本語の複合格助詞「に対して」の用法分類について、本稿筆者は、Ａ.「を」と互換できるタイプ、Ｂ.「に」と互換できるタイプ、Ｃ.他の格助詞と互換不可なタイプ、の３つに分類した。

まず、「を」と互換できるタイプについては、具体的に互換可能な動詞を調査した。

次に、「に」と互換できるタイプについては、相手と対立的な関係にある意味合いを持つ動詞が後続する場合、また文が明らかに対比的な意味を示す場合、「に対して」が多く使用されることを指摘した。

第三、他の格助詞と互換不可なタイプについては、その具体的条件を以下のようにまとめた。

a. 述語動詞そのものが目標を要求する働きはないが、目標を示す必要がある場合は、「に対して」が使用される。
b. 述語動詞は、通常具体的な場所を目標として要求するが、その目標を人間性名詞または抽象的な事項として示す必要がある場合には、「に対して」が使用される。
c. 述語動詞が形式動詞か、または「名詞+ダ」の形式になった場合は、目標を表すために、「に対して」がよく使用される。

５・４　中国語の介詞“対”と、日本語の複合格助詞「に対して」との対応関係について、以下のように整理した。

Ａ．中国語の介詞“対”のカバーする範囲は広く、日本語の複合格助詞「に対して」のみならず、「にむかって」、「にとって」などにも対応している。

Ｂ．日本語の複合格助詞「に対して」のカバーする範囲は比較的狭く、具体的には

ａ．「対象･目標」を表す“対”の中の「述語動詞が非動作動詞」である場合と、「対処関係」の“対”とに対応している。

ｂ．「対象･目標」を表す“対” の中の「述語動詞が動作動詞」である場合と、「方向」を表す“対”と、「関連関係」を表す“対”とには対応しない。

第二章

日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“关于”

――その対応関係を中心に――

１.「について」と“关于”

中国の日本語教育界と日本の中国語教育界では、日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“关于”（guanyu）が対応していると、一般的に認識されている。例えば、相原茂他（1996）では“关于”の用法について「関係ある事物「～について、関して」」[1] と、趙博源（1999）では“关于”の和訳について“‘关于、有关、就’／について［は］”[2] と、それぞれ説明されている。しかし、上記の各説は「について」と“关于”の対応関係を一般的に説明しただけで､次のような現象については明らかにしていない｡以下の例文を見てみよう。

（１）a「三日の夕方から夜にかけて、幾度か与兵衛の寝室に出入りしたほうが自然なみねが、ノブに触って指紋を付けたうえで、犯人役の卓夫が軍手をはめた手で、そのドアを開閉した。東廊下から裏庭へ出るドアについては、いったんタオルでノブを拭ったあと、卓夫が廻した。」
（Wの悲劇・p91）

“从３日傍晚到这天夜里，实子好几次出入与兵卫的卧室，当然会留下指纹的，但冒充凶手的卓夫戴着一只军用手套打开门，并且将一路上碰上

[1] 詳しくは相原茂他（1996）を参照されたい。
[2] 詳しくは趙博源（1999）を参照されたい。

的门把手全都用毛巾擦了擦之后又赶回来。”（W的悲剧・p70）

“ …至于（×关于）从东走廊通往后院的门，卓夫用毛巾擦了之后，转动了门把。”

b「その客二人の人相はよくわからない。一人は確かに頭が半分白かった。一人は、 三十歳ぐらいだった。ところが、この若い方の年齢については、三十歳という者もあれば、四十歳ぐらいという者もあり、もっと若く見えたという者もいた。」（砂の器・p14）

“这两位酒客的长相如何，没人看清。一个肯定花白头发，一个三十岁左右。谈到（×关于（○ 至于））那位年轻人的年龄，众说纷纭，莫衷一是。有的说三十岁，有的说四十岁，有的说还要年轻。”（砂器・ p 12）

c「同じテーブルに座り、出席してくれたことについて感謝しています。」（産経・2000. 8. 4）

“对（×关于）对方出席调解会，并和我坐在同一张桌子上一事，表示感谢。”

d「しかも、中河は「富士」の個室寝台について、不満の投書を出している。」（夜行列車殺人事件・ p 363）

“而且中河写信陈述了自己对（×关于）‘富士’单间卧铺的不满。”（凌晨三点钟的罪恶・ p 256）

（1）が示すように、（1）の各用例を中国語に翻訳する場合、a と b の「については」と、c と d の「について」は全て“关于”とは翻訳できず、言い換えれば、（1）a と b の「については」と（1）c と d の「について」は“关于”には対応しない。

それでは、「について」と“关于”との対応関係は、いったいどうなっているのか、例えば、両者の表す意味は完全に一致するのか、もしそうでなければ、それぞれどういう特徴があるのか。また構文上、両者はそれぞれどのような特徴を示しているのか。上記の問題については、本稿筆者が先行研究を調べた限りでは、従来あまり論じられていないようである。本章は「について」と“关

于”について用例調査を行った上で、上記の問題に回答し、「について」と“关于”との対応関係をまとめたいと思う。

２.「について」と“关于”についての先行研究と問題点

２・１　「について」に関しての先行研究と問題点

日本語の複合格助詞「について」の先行研究は、主として以下の 2 点に集中されていると思われる。一つは「について」の意味と用法に関する説明であり、もう一つは「について」の後続動詞の種類に関するものである。

日本語の複合格助詞「について」の意味について、『日本語教育事典』(1982) では、「動作や状態等が向けられる対象となる事柄を表す」(p395) と、森田・松木 (1989) では、「これらは動作や状態等が取り扱ったり関係を持ったりしている対象を指示する機能を果たす」(p7) と説明されている。しかし、これらの先行研究は「について」の意味を一般的に説明するのに止まり、その具体的な用法については充分に説明・分類していない。

一方、「について」の後続動詞に関する従来の研究の主なものとして、蔦原 (1984)、森田・松木 (1989) などが挙げられる。ここでは、まずそれらを概観し、その問題点を確認しておこう。

蔦原 (1984) では、(2) のような用例を挙げ、

（２）a しかし、いま目の前の医者に、そんなことを話してみても、母の病気<u>について</u>真の原因を訊き出すことは、おそらく不可能であるばかりでなく、無駄なことにちがいなかった。

b 医者が母の年齢<u>について</u>云ったのは、単に言ってみただけのことに過ぎない。

c ところで信太郎は弁護士というもの<u>について</u>、なんとなくマルマルと肥った顔の男を想像していた。

d しかしじつのところ信太郎はこの男<u>について</u>まだ何もしらないといってよかった。

e 校長先生がめずらしく朝礼で今度の戦争<u>について</u>、タダの話だけした。

f この間、このメーカーの技術担当主任を呼んで、もう１度、詳しい説明をさせ、価格についても聞いてみたのです。
g 今日は医局の重だったメンバーに集まって貰い、緊急に次期教授問題について、われわれの意見をまとめようというわけなんだ。
h その前に、選考委員会長の大川内教授から、選考経過についてご説明戴きます。
i しかし一向に僕は、女そのものについては思い及ばないのであった。
j しかし、すみからすみまであさりつくしても、いま僕が経験したあの恐ろしいことについては何も書いていなかった。[3)]

「「～について」が直接かかっていく語にはどのようなものがあるかを調べると、言語活動や思考活動に関係のある語が多い。たとえば、用言では、「言う」「話す」「相談する」「答える」「聞く」（尋ねる意）「想像する」「報告する」など、体言では、「意見」「説明」「考え」「判断」「研究」などである。つまり、「～について」は、言語・思考活動の具体的内容を限定説明しているわけである。」（p76）と説明されている。

一方、森田・松木（1989）では、(3) のような用例を挙げ、
（３） a その写真について懐かしい思い出がある。
b 川端文学について研究する。
c 息子について説明する。
d 生徒の疑問について答える。
e 宮地老人についてほとんど自分の父親に対するような懐かしさを持っているのが……

「一般的に言って、「について」は言語活動や思考活動に関係する語を修飾することが多く、「言う」「話す」「相談する」「想像する」「報告する」などと共起しやすい。連体格「についての」が修飾する体言も、「意見」「説明」「考え」「判断」「研究」などといった語が多く、物理的な作用などにはなじみにくいようである。これは、「について」に対象と密着してそれを深く掘り下げる意識があることの現れで、その意味では静的な表現と言えるかもしれない」

[3] (2) a～ｊは、蔦原（1984）で掲げられている例を抜粋したものである。

（p10）と説明されている。

しかし、本稿筆者は「について」と“**关于**”について用例調査を行った結果、「について」が具体的な動作を表す動作動詞[4]と共起する場合もあることが分かった。(4) を見てみよう。

（４）a「ＢＡによると、超音波測定器を使った検査で数カ月前、長さ約６センチの亀裂が翼の後部けたで見つかったという。同社は亀裂のひどい１機については定期運航からはずしたという。」
（朝日・2000.7.26）

“ **据 BA 介绍，几个月以前使用超声波测定器进行检查时，在机翼后横部发现了长约 6 厘米的裂缝。该公司将出现裂缝较大的一架飞机从定期飞行上撤了下来。**”

a′「亀裂のひどい１機については、同社は定期運航からはずしたという。」

“ **至于（×关于） 出现裂缝较大的一架飞机，该公司从定期航行上撤了下来。**”

b「検事は、その場で商品を返し、食品については代金を支払った。」
（毎日・2000.6.30）

“**检察官当场归还了(扒窃的)商品，至于（×关于） 其中的食品，他付了钱。**”

c「日本猿については、捕獲して山に返しますが、」
（日本テレビ・2000.8.6）

---

[4] 本章で言う「動作動詞」は、「について」が直接かかっていく語について、蔦原（1984）が主張した「言語活動や思考活動に関係のある語」と、森田・松木（1989）が主張した「言語活動や思考活動に関係する語」に対する、具体的な動作を表す動作動詞を指す。ただし、それには「話す」のような言語活動を表す動作動詞は含まれない。

“至于（×关于）日本猴要逮住送回山里。”

d「三日の夕方から夜にかけて、幾度か与兵衛の寝室に出入りしたほうが自然なみねが、ノブに触って指紋を付けたうえで、犯人役の卓夫が軍手をはめた手で、そのドアを開閉した。東廊下から裏庭へ出るドアについては、いったんタオルでノブを拭ったあと、卓夫が廻した。」
（=（1）a）

“从 3 日傍晚到这天夜里，实子好几次出入与兵卫的卧室，当然会留下指纹的，但冒充凶手的卓夫戴着一只军用手套打开门，并且将一路上碰上的门把手全都用毛巾擦了擦之后又赶回来。”

“ …至于（×关于）从东走廊通往后院的门，卓夫用毛巾擦了之后，转动了门把。”

（4）から、以下の現象を観察することができる。

A．（4）の各用例において、「については」は結合の度合いが高く「について」と「は」は分けられない要素であり、言い換えれば、（4）の各用例では「について」は使えず、「については」しか使えない。「については」を使わないと、文は成立しなくなる。

B．（4）の各用例において、後続動詞は全て具体的な動作を表す動作動詞（「はずす」「代金を支払う」「返す」「廻す」）で、言い換えれば、「については」は具体的な動作を表す動作動詞と共起できる[5)]。

C．（4）の各用例の「については」は対比のニュアンスを持つ。例えば（4）a において「については」に先行する「名詞」即ち「亀裂のひどい 1 機」は、同社が有するコンコルドの 1 機で、亀裂のひどいものを表し、それに「については」が下接して、後続動詞の「はずす」によってそれを定期運航からはずしたことを表す。同時に同社が有する他の亀裂

[5] 本稿筆者は用例調査を行った際に、次の用例も見付けた。
「だいいち、森戸がどうして小山田なんとかの轢き逃げについて動き回っているの？」
（青春の証明・p354）
“否则，森户干吗要围绕小山田文枝被压肇事者逃逸而四处活动呢?”（**青春的证明**・p292）
しかし、この例の「動き回る」は文脈上、「（調べて）動き回る」と理解してよい。即ちこの「動き回る」は具体的な動作を表しているわけではない。

のひどくない、或いは亀裂のないコンコルドを引き続き運航させることもほのめかしている。

D．(4) の各用例の「については」を中国語に翻訳した場合、“至于”(zhiyu) と翻訳するのが普通のようで、“关于”とは翻訳できない。言い換えれば、(4) の各用例の「については」は、“关于”には対応しない。

２・２ “关于”についての先行研究と問題点

中国語の介詞“关于”の意味について、北京大学中文系(1982)、劉月華他(1983)、侯学超編（1998）など代表的な説をまとめると、以下のようになる。

A．“作定语的时候是指明事物涉及的范围或包含的内容。”
「連体修飾語になった際、事物が関わる範囲や含んでいる内容を指し示す」
B．“作状语的时候是介绍出动词关涉的范围或事物。”
「連用修飾語になった際、動詞が関わる事物や範囲を表す」
C．“作标题。”
「タイトルを示す」

また、北京大学中文系（1982）では、“‘关于……’只能放在主语前面,不能放在主语后面。”「“关于”は主語の前にしか置かれず、主語の後には置かれない」[6]（p219）と、説明されている。

しかし、上記の先行研究では“关于”の意味と用法を一般的に説明するのに止まり、“关于”の特性、例えば後続動詞との関連については明らかにされていない。

一方、“关于”に対する用法分類については、本稿筆者が調べた限りでは、侯学超編（1998）が“关于”の賓語の種類を分類しただけである。それを以下の

ようにまとめる。

A.「“关于＋名词／名词短语”（名詞句）」

B.「“关于＋动词短语”（動詞句）」

C.「“关于＋主谓短语”（主述句）」

しかし、上記の分類は“关于”の賓語に止まり、“关于”の賓語と後続動詞との関連については説明していない。

３.「について」と「については」

３・１　「について」の用法

２節で述べたように、中国語の介詞“关于”には、A．連体修飾語になる。B．連用修飾語になる。C．タイトルを示すなど、三つの用法がある。日本語の複合格助詞「について」を分析すると、“关于”と同様の三つの用法があると思われる。

上記三つの用法中の「連体修飾語になる」用法と、「タイトルを示す」用法を論じることは別の機会に譲り、本章では、中国語の介詞“关于”と、日本語の複合格助詞「について」の「連用修飾語になる」用法に絞り、論を進めたいと思う。また「について」の類義形態として「に関して」などを挙げ、“关于”の類義形態として“有关”“就”などを挙げる。[7]

３・２　「について」と「については」

---

[6] この点について、6節で「について」と比較しながら論じる。

[7] 本章では、「に関して」を「について」の類義形態、“有关”・“就”を“关于”の類義形態として挙げる。さらに言えば、本章では、「に関して」と「について」、“有关”・“就”と“关于”を、同義の語として扱っている。それらの違いについて、本章では触れないことにする。

これまでの先行研究では、「について」と「については」[8] を区別せず扱っているのが普通である。本章は、これまでと異なった観点から、「について」と「については」とは区別されるべき二つの用法であることを主張する。「について」は「テーマの設定」を表し、「については」は「独立した、もう一つの話題の提起」を表す。両者は、形態上と意味上かなり明確な違いが見られる。

４．「について」の用法の分類と意味

４・１　「について」の用法の分類

「について」の用法の分類については、本稿筆者が先行研究を調べた限りでは、従来あまりなされていないようである。例えば、『日本語教育事典』(1982) では、「連体格の用法として、「についての」がある。「日本文法についての本」「子供一人についての手当」など」(p395) と、森田・松木 (1989) では、「連体格の用法としては、「について」に対して「についての」、「に関して」に対して「に関しての」「に関する」がある。」(p8) と、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) では、「名詞を修飾するときは、(5) ～ (7) [9] のように「ＮについてのＮ」という形になる」(p445) と、説明されているものの、ほとんどは、おおまかに「…について+Ｖ」と「…についての+Ｎ」に分けるにとどまっている。本稿筆者は、この問題について、用例調査を行った上で、文法機能の立場から「について」を以下のように分類した。

Ａ．「について」と他の格助詞（ヲ[10]、ガ[11]、ニなど）が交換可能なタイプ。
Ｂ．「について」とそれに先行する名詞全体が述部を修飾するタイプ。

以下、4･2 ではＡタイプを、4･3 ではＢタイプを、という順に説明していく。

４・２　「について」と他の格助詞が交換可能なタイプ

---

[8] 蔦原 (1984) では、「について」の「意味･用法」を説明する際、「係助詞「は」を後接させ、「～については」となる場合もある。」と触れているだけである。

[9] グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) で挙げた、「について」の連体格に関する用例は、以下の通りである。
(5) 経営方針についての説明を受けた。
(6) 将来についての夢を語った。
(7) ことの善悪についての判断ができなくなっている。

[10] ここに言う「ヲ」格とは、場所「ヲ」格を含まない。

[11] ここに言う「ガ」格とは、対象「ガ」格を指す。

４・２・１　「について」と「対象ヲ格」

（５）a「政府・自民党は十日午後、首相官邸で、二階堂自民党副総裁を団長とする訪米団の派遣を前に、日米間の経済摩擦問題の対応について協議した。」

“关于日美之间的经济磨擦问题，政府和自民党 10 日下午，于首相官邸在派遣以二阶堂自民党副总裁为团长的访美代表团之前，进行了协商。”

a′「政府・自民党は十日午後、首相官邸で、二階堂自民党副総裁を団長とする訪米団の派遣を前に、日米間の経済摩擦問題の対応を協議した。」

“政府和自民党 10 日下午，于首相官邸在派遣以二阶堂自民党副总裁为团长的访美代表团之前，协商了日美之间的经济磨擦问题。”

b「首脳会談は、四回計八時間を越す予定で①軍縮②二国間関係③地域紛争④人権の諸問題について討論するが……」[12)]

“关于①裁军、②两国间的关系、③区域纠纷、④人权等诸问题，首脑会谈将进行讨论，预定超过四次共八个小时，……”

b′「首脳会談は、四回計八時間を越す予定で①軍縮②二国間関係③地域紛争④人権の諸問題を討論するが……」

“首脑会谈预定超过四次共八个小时，讨论①裁军、②两国间的关系、③区域纠纷、④人权等诸问题。”

c「みんなで対応策について考えた。」

“关于对策大家考虑。”

c′「みんなで対応策を考えた。」

“大家考虑对策。”

d「この問題について慎重に検討しなければならない。」[13)]

“关于这个问题必须慎重研究。”

d′「この問題を慎重に検討しなければならない。」

12　(5) a と b は、塚本（1991）の用例である。

13　(5) c～d は、益岡・田窪（1987）の用例である。

“必须慎重研究这个问题。”

以上、(5) が示すように、「について」は「対象ヲ格」と置き換える場合がある。それについて、森田・松木（1989）では、「また、「について」は対象と密着することから、しばしば格助詞「を」と置き換え可能な文を構成し……」（p10）と触れるにとどまっている。

塚本（1991）は、「について」と「対象ヲ格」との交換について、以下のように詳細に説明している。

まず、複合格助詞の統語的な特徴の一つとして、単一の格助詞との交替現象を取り上げている。「「～について」「～に関して」と「を」」の交替について、以下の用例を挙げている。

（６）a 政府・自民党は十日午後、首相官邸で、二階堂自民党副総裁を団長とする訪米団の派遣を前に、日米間の経済摩擦問題の対応について協議した。〈「を」と交替可能〉

b 首脳会談は、四回計八時間を越す予定で①軍縮②二国間関係③地域紛争④人権の諸問題について討論するが……〈「を」と交替可能〉

c 臨時教育審議会第三部会（有田一寿部会長）は七日、「基本答申」の柱となる教員の資質向上について部会案をまとめた。
〈「を」と交替不可能〉

d 朝日新聞社はこのほど、主な企業百社（製造業五十四社、非製造業四十六社）のトップ経営者を対象に、景気の動き、政策運営、経営判断についてアンケート調査をした。それによると、景気の現状について「ゆるやかに降下している」、「降下している」という判断が合わせて五三％に達した。〈「を」と交替不可能〉[14)]

また、塚本（1991）は、動詞の結合価に関する問題について

「(37) 先生は中国の歴史に関して問題を出した。
(38) Ａさんは最近アスペクトについて論文を書いた。
(37) の「中国の歴史に関して」、(38) の「アスペクトについて」、(6) の

[14] (6) の a～e は、塚本（1991）の (4) ～ (7) 例である（(6) a と b= (5) a と b)。

「教員の資質向上について」、(7) の「景気の動き、政策運営、経営判断について」はそれぞれ、「問題」「論文」「部会案」「アンケート調査」という名詞の属性を叙述しているものであり、その証拠に、(37) は「ての」形、或いは連体形を取って「先生は中国の歴史に{関しての／関する}問題を出した。」というように、(38)(6)(7)は「ての」形を取って「Aさんは最近アスペクトについての論文を書いた。」「教員の資質向上についての部会案をまとめた。」「景気の動き、政策運営、経営判断についてのアンケート調査をした。」というように、名詞「問題」「論文」「部会案」「アンケート調査」に直接係っていく表現が可能である。「～に関して」「～について」で表示された補語は副次補語と考えられる……」(p85)

「(39)会社側が大学新卒者の採用に関して説明した。
(40)山田教授が講義で日韓関係の問題点について論じた。
(41)生徒達は将来の夢について語り合った。

(37)(38)(6)(7)それぞれにおける「中国の歴史に関して」「アスペクトについて」「教員の資質向上について」「景気の動き、政策運営、経営判断について」は副次補語と判断しただけあって、その部分を取り去ってもさほど情報伝達量が足りない感じはしないが、それに比べて(39)～(41)及び(4)(5)においては、複合格助詞で表示された補語の部分、つまり「大学新卒者の採用に関して」「日韓関係の問題点について」「将来の夢について」「日米間の経済摩擦問題の対応について」「④人権の諸問題について」を取り除くと、説明したり、論じたり、語り合ったり、協議したり、討議したりしたのはどういう内容かと反問したくなるように、情報伝達不足の感じが非常に強い。それもそのはず、(39)～(41)(4)(5)の「説明する」、「論じる」、「語り合う」、「協議する」、「討議する」はすべて、各々なされる行為の内容に着眼した表現を成立させる動詞である。さらに、(37)(38)(6)(7)においては、「*先生は中国の歴史を問題を出した。」「*教員の資質向上を部会案をまとめた」などのように「～に関して」「～について」を「を」に置き換えることができないのに対して、(39)～(41)(4)(5)においては、「生徒達は将来の夢を語り合った。」「日米間の経済摩擦問題の対応を協議した」などのようにだいたいそういったことが可能である。このような対象を表す「を」はいかなる場合でも必須補語を成り立たせる格助詞であり、 (39)～(41)(4)(5)における「～に関して」「～について」がその「を」と交替できるという事実は、それらが各々の動詞にとっての必須補語の地位を占めていると判断するための決定的な証拠となる。」(p91～p92)

さらに、塚本（1991）は、複合格助詞と単一の格助詞の使い分けについて、

「(37)(38)(6)(7)においては、「～に関して」「～について」は後続する名詞類を補足説明しており、動詞によって強く要求されているのではない副次補語と見なされる」(p90)

……中略……

「一方、(39)～(41)(4)(5)における「～に関して」「～について」は、必須補語と判断すべきものであった。(39)～(41)を例に取り上げ、その「～に関して」或いは「～について」を「を」に置き換えて表現してみると、次のようになる。

(43)？会社側が大学新卒者の採用を説明した。
(44)山田教授が講義で日韓関係の問題点を論じた。
(45)生徒達は将来の夢を語り合った。

(44)(45)は、すんなり容認されるが、(43)にあっては、構文が(44)(45)と同様であるにもかかわらず、「を」を用いると、少し不自然である。

どうしてなのか、その回答を出す前に、(37)(38)(6)(7)と(39)～(41)(4)(5)との統語的及び意味的な違いをしっかりとおさえておく必要があろう。前者においては、「内容性」といった特性が強い「問題」や「論文」という名詞類が「を」を伴って立ち、その名詞類と「かかわり」を持つ名詞類ならどのような特性の名詞類でも、「～について」或いは「～に関して」の前に置くことができるのがわかる。それに対して、後者においては、だいたい議論･思考・伝達関係の動詞が現れるために、その影響で多くの場合、「問題点」や「夢」のような、「内容性」といった特性が強い名詞類が「～に関して」或いは「～について」で表示された補語の中に入り込んでしまっており、もう一つ余分に、適当な「を」の補語を置くことができないのである。

(43)が(44)(45)と比べて不自然なのは、今、述べた「～に関して」或いは「～について」と交替した「を」に前置されている名詞類の「内容性」といった特性に解答が求められる。問題の名詞類はそれぞれ、(43)では「採用」、(44)では「問題点」、(45)では「夢」である。「問題点」「夢」は両方とも、抽象的な概念を含み持っており、すなわち先ほど使った用語で言えば、「内容性」といった特性が強い名詞類である。それに対して、「採用」は、「する」を付加して「採用する」と言えることからもわかるように、「行為」を表す名詞類であり、従って「内容性」といった特性は非常に弱い。こういったこと

から、次のようなまとめが導き出される。必須補語と判断される場合において、前置される名詞類が有する「内容性」といった特性が強いと、複合格助詞「～に関して」「～について」と単一の格助詞「を」のどちらでも用いることができる。しかし、その特性が弱いと、「～に関して」「～について」は使えるが、「を」の使用は困難になる。」（p91～p92）[15)]

以上、塚本（1991）を長く引用したが、その主張は以下の 2 点にまとめられる。

a.「について」は、副次補語になる場合もあるし、必須補語になる場合もある。

b. 必須補語になる「について」に先行する名詞が「内容性」といった特性が強い名詞類なら、複合格助詞「～に関して」「～について」と単一の格助詞「を」のどちらでも用いることができる。しかし、その特性が弱いと、「～に関して」「～について」は使えるが、「を」の使用は困難になる。

「について」と「対象ヲ格」との交換に関しては、塚本（1991）の述べているところはほぼよいが、塚本（1991）には、以下のような問題点がある。即ち、複合格助詞と単一の格助詞との交替について、塚本（1991）は、多くの現象を挙げているが、「について」と「対象ガ格」及び「ニ格」との交換について、説明していない。

４・２・２　「について」と「対象ガ格」

いわゆる「対象ガ格」について、久野（1973）は、次のように説明している。

「意味の上から目的格「ヲ」が現われることが期待されるところに「ガ」が現われるのは，次の構文に限られている。

（11）能力を表す形容詞，形容動詞：上手，苦手，下手，得意，ウマイ
（12）内部感情を表す形容詞，形容動詞：好キ，嫌イ，欲シイ，コワイ
（13）動詞+タイ
（14）可能を表す動詞：デキル，レル／ラレル

[15] 詳しくは、塚本（1991）を参照されたい。

（15）自意志によらない感覚動詞：解ル，聞コエル，見エル
（16）所有，必要を表す動詞：アル，要ル
……（中略）……
動詞は概して動作を表わすものであるが、例外として状態を表わすものが少数ある。動詞のタイ形、可能を表わすレル／ラレル形、及び、「デキル、解ル、聞コエル、見エル、アル、要ル」などがそれである。」（p51～p52）[16]

また、益岡（1987）は、次のように説明している。

「…対象は、他の意味役割が表す意味的な関係以外の関係を広く表すことができる。…対象を担う項の例には、（30）のヲ格や、（31）、（32）のガ格がある。
（30）太郎が本を読んだ。
（31）車が止まった。
（32）花子は音楽が好きだ。」（p107～p108）[17] [18]

（７）a「同社は「このトラブルと事故との関係について現時点では分かっていない」（ブルース副社長）としている。」（読売・2000.8.1）
a′ 同社は「このトラブルと事故との関係が現時点では分かっていない」（ブルース副社長）としている。
b「寒さも、きついとは思えなかった。
好調なスタートだった。
出だしのいい日は、すべてについてうまくいくのだという確信のようなものが加藤の頭にひらめいていた。」（新潮・孤高の人）
b′ 「出だしのいい日は、すべてがうまくいくのだという確信のようなものが加藤の頭にひらめいていた。」
c「自我が強すぎて狭量だと他人にいわれた。
だが加藤は花子との結婚によって、他人に対する眼が大きく開かれた。
他人との交際についてもいままでと違っていた。」（新潮・孤高の人）
c′ 「自我が強すぎて狭量だと他人にいわれた。
だが加藤は花子との結婚によって、他人に対する眼が大きく開かれた。
他人との交際もいままでと違っていた。」

[16]詳しくは、久野（1973）を参照されたい。
[17] 詳しくは、益岡（1987）を参照されたい。
[18] 久野説と益岡説とでは、「止まる」のような非対格主語を含めるかで大きく異なっている。本論文は、益岡説に従い、益岡（31）例の「車が止まった」における「ガ」格を「対象ガ格」と見なす。

d「それと、とにかくありとあらゆるものをよく知っていることに感嘆しました。
調度、家具、衣裳のさまざま、男の服装のセンスについてもゆきとどいているんですね。」（新潮・新源氏物語）

d′「調度、家具、衣裳のさまざま、男の服装のセンスもゆきとどいているんですね。」

以上、(7) が示すように、「について」は「対象ガ格」と交替できる。(7) の用例を分析すると、後続動詞（(7) a では「分かる」、(7) b では「うまく行く」、(7) c では「違う」、(7) d では「行き届く」）は、全て抽象的な意味を表す動詞[19] である。

一方、(8) が示すように、「対象ガ格」を要求し且つ具体的な動作を表わす後続動詞になると、「について」とは交替することはできない。

（８）a　「桃が川を流れていた。」
a′ ＊「桃について川を流れていた。」
b　「列車が駅に止まっていた。」
b′ ＊「列車について駅に止まっていた。」

よって、「について」が「対象ガ格」と交替する場合、後続動詞は抽象的な意味を表すものに限られているようである。

４・２・３　「について」と「ニ格」

（９）a「地方の販売店たちは今後について迷った。」
（新潮・人民は弱し　官吏は強し）

“ 关于今后(的发展)，地方贩卖店不知该怎么办。”

a′ 「地方の販売店たちは今後に迷った。」
“ 地方贩卖店不知今后该怎么办。”

b「いくつかの殺人事件について、俊一郎は弟が関係しているかもしれないと言った。」（寝台列車殺人事件・p385）

“ 关于几起杀人案件，俊一郎说他弟弟也许有牵连。”

[19] ここで言う「抽象的な意味を表す動詞」とは、益岡（1987）が「対象ガ格」と主張し、具体的な意味を表す動詞（「止まる」）に対するものである。

b′「いくつかの殺人事件に俊一郎は弟が関係しているかもしれないと言った。」

“ 俊一郎说他弟弟也许牵连几起杀人案件。”

c「赤岳から、行者小屋へ下山するつもりだったが、それをやめて、もときた道をたどろうと決めたのは、一つには彼の装具について不信感を抱いたから、それ以上、未知への突貫はさけるべきであるということと、もう一つは、硫黄岳であの強風ともう一度戦って見たかったからである。」（新潮・孤高の人）

“ 最初是准备从赤岳下山到修行者小屋的，但是之所以没有那样做，而决定由来的路线返回，是因为对（×关于）他自己的登山装备有些信心不足，而判断应该避免对未知世界的贸然行动，同时也是因为想在硫黄岳同那股强风再较量一番。”

c′「赤岳から、行者小屋へ下山するつもりだったが、それをやめて、もときた道をたどろうと決めたのは、一つには彼の装具に不信感を抱いたから、それ以上、未知への突貫はさけるべきであるということと、もう一つは、硫黄岳であの強風ともう一度戦って見たかったからである。」

“ 同上”

d「同じテーブルに座り、出席してくれたことについて感謝しています。」（=（1） c）

“对于（×关于）对方能出席调解会，并同我坐在同一张桌子上一事，表示感谢。”

d′「同じテーブルに座り、出席してくれたことに感謝しています。」

“ 同上”

以上、(9) は「ニ」格と置換可能なタイプである。ここで注目に値するのは、(9) c と (9) d において「ニ」格と置換可能な「について」は、“关于”に対応しないことである。これについて、さらに以下の用例を見てみよう。

（１０）a「これによって、裁判についていくらか明るい見とおしを抱くことはできたが、それとても判決があるまではわからないことだ。」
（新潮・人民は弱し　官吏は強し）

“ 由此，对于（×关于）审判可以抱一些乐观的希望，但是，究竟会怎样，不到判决结果出来是不知道的。”

a′「これによって、裁判にいくらか明るい見とおしを抱くことはできたが、それとても判決があるまではわからないことだ。」

“ 同上”

b「飯沢管理者が３０日の会見で藤井局長が提出した退職願を片手で持ち上げながら公開したことについて、田中知事が激怒したもの。」
（朝日・2000.11.1）

“ 对于（×关于）饭泽负责人在 30 号的记者招待会上手举藤井局长提交的退职书，将其公开一事，田中知事非常震怒。”

b′「飯沢管理者が３０日の会見で藤井局長が提出した退職願を片手で持ち上げながら公開したことに、田中知事が激怒した。」

“ 同上”

(9) c、(9) d と (10) が示すように、「ニ」格と置換可能な「について」の後続動詞が抽象的な「方向性+対象」を要求する動詞[20]（「(不信感を) 抱く」、「感謝する」、「（見とおしを）抱く」、「激怒する」）である場合は、「について」は“关于”に対応せず、“对”（dui）／“对于”（duiyu）[21] に対応する。

４・３　「について」とそれに先行する名詞全体が述部を修飾するタイプ

（１１）a「その写真について懐かしい思い出がある。」

“ 关于这张照片，有一段令人怀念的回忆。”

[20] ここで言う「抽象的な「方向性+対象」」とは、「抱く」、「激怒する」、「感謝する」などの動詞が要求する、「に対して」と置換可能な「ニ」格を指す。

b「もし、それでなかったら、ぼくは犬神家の一族の、ひとりひとりについて（○についての）、アリバイ調べをやらなければならなかったわけです。」（犬神家の一族・p163）

“否则我们就得——调查犬神家每个人的不在场证明。”

（犬神家族・p109）

c「このほか、全国調査では各遺跡での具体的な出土品や調査費用、調査記録などについても調べており、文化庁では今後詳細に分析することにしている。」（読売・2000.11.13）

“ 此外，关于各遗址的具体的出土文物以及调查费用、调查记录等，在全国调查中也在进行调查，文化厅今后将进行仔细分析。”

（11）は、「について」とそれに先行する名詞全体が述部を修飾するタイプであり、比較的複雑である。（11）a は「について」とそれに先行する名詞（その写真について）が述部「…思い出がある」を修飾する。（11）b では「について」に先行する名詞（ひとりひとり）が述語動詞の目的語（アリバイ調べ）との間に、「について」を通じて連体修飾関係（ひとりひとりについてのアリバイ調べ）が成立可能である。[22]（11）c は述語動詞が二つ以上の場合、「について」に先行する名詞（各遺跡での具体的な出土品や調査費用、調査記録など）は、それぞれの述語動詞（「調べる」）の対象、または述語動詞の目的語（「分析する」）の対象となる。

４・４　「について」の意味

4·1 で本稿筆者は、文法機能の立場から「について」をＡとＢの 2 種類に分けた。ＡとＢの「について」の意味について、先行研究では、

〈１〉「それに関して」という意を表す

〈２〉「N+数量詞+について」で「その単位に応じて」の意を表す

というような形で記述されるのが普通である。

〈2〉について、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）では、(12) のような例を挙げ、「数量を受けてその数を単位とし、「その単位に応じて」の意を表す。」（p445）と説明されている。

---

[21] この場合、中国語の“对”／“对于”はほぼ同義である。

[22] これについて、塚本（1991）は同様なことを指摘している。

（１２）a「車１台について５千円の使用料を頂戴します。」

“每辆车收５千日元的使用费。”

b「乗客一人について三つまでの手荷物を持ちこむことが出来ます。」

“每位客人可以携带三件手提行李。”

c「作業員５人について１部屋しか割り当てられなかった。」

“每５个作业人员只能分到１间房间。”

このタイプの「について」は、意味上「に関して」を表す「について」と異なり、またそれに対応する中国語が“关于”ではなく、(12)が示すように、“每”になるので、本章では、これ以上触れないことにする。

一方、本章で言うＡとＢのタイプの「について」の意味について、本稿筆者は、「発話・思考などの行為活動のテーマを設定する」という機能があるのではないかと思う。Ａタイプについていえば、そのテーマが含む内容が「ガ格・ヲ格・ニ格」など格助詞が示す内容と重なるので、置換可能になる。Ｂタイプの場合は、述部が「について」が示すテーマにより「活動範囲」が指定されることになる。

５.「については」の意味と用法

「については」の意味について、本稿筆者は、「については」が一つの分けられない要素として「前文と関連があるが、独立したもう一つのことを提起する」という機能があると主張する。以下の用例を見てみよう。

（１３）a「井戸原社長の私行についてはうすうす噂は聞いていますが、」
（棲息分布・p310）

“ 关于井户原经理的私生活风言风语地听到了些。”（孤狼・p414）

a′ 「井戸原社長の私行についてうすうす噂を聞いています。」

“ 同上”

b「警察内部では、エリートコースを歩き、また、切れる男といわれて

きた十津川だが、男女間の問題については、くわしく知らなかったといっていい。」（イブが死んだ夜・p18）

“ 在警察中间，迄今为止十津川走的是一条英才的道路，并被人们称为‘ 精明强干的人’，可关于男女间的问题，可以说知道得并不多。”

（世家迷雾・p12）

b′ 「十津川は、男女間の問題についてくわしく知らなかった。」

“ 同上”

c「横流しの一件については、正確に実情を調査した上で、また改めてお話に伺います。」（Cの悲劇・p257）

“关于私下交易一事，正在进行核实，有了结果我再告诉你吧。”

（C議悲劇・p207）

c′ 「横流しの一件について正確に実情を調査した上で、また改めてお話に伺います。」

“ 同上”

d「だがそのことについては、もっとさきで詳しくお話する機会があるだろう。」（八つ墓村・p31）

“关于地图的详情，以后会有机会详细叙述。”（伊墓村・p17）

d′ 「そのことについてもっとさきで詳しくお話する機会があるだろう。」

“ 同上”

(13) の各用例が示すように、「については」は非動作動詞[23] と共起しており、また（13）a′、(13) b′、(13) c′、(13) d′ のように、ニュアンスが若干異なるものの、「については」の「は」は削除可能である。さらに（13）a、(13) b、(13) c、(13) d における「については」と、(13) a′、(13) b′、(13) c′、（13）d′ における「について」は、全て“关于”に対応する。従ってこのような、「は」の削除可能な「については」は、単純に 4 節の「について」に係助詞「は」の付いたタイプであると考える。

（１４）a「大統領閣下、私は中共はこの戦争には参加しないと思います。……」マッカーサーは落ち着いた、よく響く声で力説した。「ソ連にかんしては、直接表だった干渉はしないと信じます。……」

（黒雪（原）・p172）

“‘ 总统先生,我认为中共无意参加这场战争 ……’麦克阿瑟不紧不慢而

[23]ここでは、言語活動や思考活動に関係のある語を指す。

又铿锵有力地说； 至于苏联，我相信他们不会直接出面干涉，……’”

（黒雪（訳）・p111）

b「三日の夕方から夜にかけて、幾度か与兵衛の寝室に出入りしたほうが自然なみねが、ノブに触って指紋を付けたうえで、犯人役の卓夫が軍手をはめた手で、そのドアを開閉した。東廊下から裏庭へ出るドアについては、いったんタオルでノブを拭ったあと、卓夫が廻した。」（=（1）a）

“从 3 日傍晚到这天夜里，实子好几次出入与兵卫的卧室，当然会留下指纹的， 但冒充凶手的卓夫戴着一只军用手套打开门，并且将一路上碰上的门把手全都用毛巾擦了擦之后又赶回来。”

“ …至于（×关于）从东走廊通往后院的门，卓夫用毛巾擦了之后，转动了门把。”

c「襲われた初老の運転手の容態は、当初、重体であると発表されたが、その後の経過は良好で、あと五十日もたてば、退院できる見込みとなった。

女子行員については、いずれ近いうちに平常勤務に戻れるだろうと医師は言った。」（時効・p54）

“ 那位五十来岁受到袭击的司机的情况，当时报导说有生命危险，但是，其后他恢复得不错，估计再过 50 天就可能出院。

至于女银行职员，医生说不久就可以正常上班。”

d「検事は、その場で商品を返し、食品については代金を支払った。」（=（4）b）

“检察官当场归还了(扒窃的)商品，至于（×关于）其中的食品，他付了钱。”

（14）a では、「については」（にかんしては）は非動作動詞と共起しており、（14）b、（14）c と（14）d では、「については」は動作動詞と共起している。しかし、それらは、全て「もう一つの話題を提起する」という意味を表すので、「については」の「は」は削除不可である。その場合は、「については」は一つの分けられない要素で、“**关于**”に対応せず、“**至于**”に対応する。

“**至于**”について、侯学超編（1998）では、“**从使用上说，提出跟上文既有关连而又独立的另一件事；从结构上说，引起话题。话题后必有停顿。**”「用法から言えば、前文と関連があるが、独立したもう一つのことを提起する。構造から言えば、話題を提起する。提起した後、必ず間を取る。」（p761）と説明されている。以下の“**至于**”の用例を見てみよう。

（１５）a“ **中国人到底过来多少军队呢?麦克阿瑟宁愿相信，中国唆使一些志愿人员越过鸭绿江，无非是想帮助北朝鲜的残余部队在朝鲜设法保留一个名义上的立足点，至于那些夜间从鸭绿江桥上开过来的汽车，肯定是在给北朝鲜的军队运送增援物资。**”（黒雪（原）・p153）

「中国はいったい、どのくらいの軍隊を送り込んだのか。せいぜい一部の義勇の兵士をそそのかして鴨緑江を渡らせ、北朝鮮の残存部隊を助け、朝鮮に名義上の足場を残しておこうとしただけだろう。夜間、鴨緑江大橋を渡ってきたトラックについては(×について)、おそらく北朝鮮への援助物資を輸送したものにすぎない――マッカーサーはそう信じたかった。」（黒雪（訳）・p239）

b“ **北京我很想回去看一看，但不知何时。至于住呢，恐怕未必能住久。**”

「北京は、私が帰ってみたいと思っているが、何時になるかは分からない。泊まることについては(??について)、恐らく長くならない。」

c“ **放心，老杨，他是交通班的骨干，你可别看他小。 至于路，那更不要**

担心……”

「楊さん、安心して、彼は交通班の主力で、若いと思わないで。道については(??について)、さらに心配は要らない。」

d“ 至于西方古典音乐，父亲不大喜欢，也不大懂。”

（我的父亲邓小平・p143）

「クラシック音楽については(??について)、父はあまり好きでもなく、よく知りもしない。」（わが父・鄧小平・p188）

e“ 我是修建工程主任，应该照顾到，应该很好交待，及时检查。就因为我没照顾到，才出了事故。至于魏富海，当然也要负责。……”

（沸腾的群山・p373）

「わたしは修建工事主任だから、よくみまわり、はっきり命令をつたえ、しかるべき時に検査すべきだった。わたしが、せわをしなかったために、この事故がおきたのだ。魏富海については(??について)、とうぜん責任をとるべきだ。・・・・・・」（沸き立つ群山・p416）

（15）が示すように、中国語の“至于”を日本語に翻訳する際に、「については」と翻訳するのは特に問題ないが、「について」と翻訳すると、文は成立しなくなるか、または不自然な文になる。

以上をまとめると、日本語の「については」には中国語の“至于”と同様、「前文と関連があるが、独立したもう一つのことを提起する」という機能があると本稿筆者は考える。「については」は非動作動詞と動作動詞の両方とも共起でき、通常、前者の場合は「は」を削除でき“关于”に対応し、後者の場合は「は」を削除できず“至于”に対応するが、「については」が非動作動詞と共起し「もう一つの話題を提起する」という意味を表す場合、その「は」は削除不可である。また中国語の“关于”と“至于”は、文頭にしか置かれないのに対

し、「については」は語順が比較的自由で、文頭にも文中にも置くことができる。[24]

６．“关于”についての用法分類

“关于”の用法分類については、本稿筆者が先行研究を調べた限りでは、従来あまりなされていないようである。例えば、北京大学中文系（1982）、劉月華他（1983）、侯学超編（1998）では、“关于”の用法を連用、連体、タイトルの三つに分けるに止まり、その連用、連体、タイトルの用法の分類については説明されていない。本稿筆者は、用例調査を行った上で、“关于”（連用修飾用法）を以下のように分類した。

Ａ．“关于”の賓語が意味上述語動詞の対象であるタイプ。

Ｂ．「“关于”+賓語」全体が述部を修飾するタイプ。

以下、(16）はＡタイプを、(17）はＢタイプを、という順に説明していく。最後に、語順について、“关于”・“至于”と、「について」との対応に触れる。

（１６）a“关于这个问题，我们已经讨论了。”

「この問題について、われわれはすでに討論した。」

a′ “我们已经讨论了这个问题。”

「われわれはこの問題をすでに討論した。」

b“关于这方面的问题，我们研究得很透彻。”

「この方面の問題について、我々は詳細に研究している。」

b′ ＊“我们研究得很透彻这方面的问题。”

「我々はこの方面の問題を詳細に研究している。」

c“关于上次事故，公司正在进行调查。”

「前回の事故について、会社は調査をしている。」

[24] 注６と同様。

c′ “**公司正在调查上次事故。**”

「会社は前回の事故を調査している。」

（16）の各用例は、“**关于**”の賓語が意味上述語動詞の対象であり、その場合には、以下三つのタイプがある。

（16）a と a′ では“**关于**”の賓語“**这个问题**”（「この問題」）を述語動詞“**讨论**”（「討論する」）の後に復元することができるタイプである。

（16）b と b′ では述語動詞“**研究**”（「研究する」）に「結果または程度補語」（“**得很透彻**”）（「詳細に（「研究する」）」）[25] を伴い、復元することができなくなるタイプである。

（16）c と c′ では“**关于**”の賓語“**上次事故**”（「前回の事故」）は意味上述語動詞“**进行**”（「する」）の対象ではないが、述語動詞の目的語“**调查**”（「調査（する）」）の対象となっているタイプである。

（16）b と b′ との対応制限は、中国語固有の制約なので、日本語ではその制約を受けない。

（１７）a “**关于这个问题，可以参考下列书刊。**”

「この問題について、以下の書籍と雑誌を参考にしてよい。」

b “**关于植树造林，县里打算制定个规划。**”

「植樹造林については、県では計画を立てる予定である。」

c “**关于材料问题，我们回头再分别研究，设法解决。**”

---

[25]丁声樹等（1979）では、「補語」について“**动词或形容词后面可以另外加上动词形容词之类，来表示前一个成分的结果、趋向等等、这一类成分叫做补语，因为它对前一个成分有所说明，有所补充。**”（p11）「動詞又は形容詞の後にさらに動詞・形容詞を加え、前の成分の結果、趨向などを表すことができる。このような成分を補語と称する。というのは、それが前の成分を説明・補充するからである」と、「程度補語」について“**表示程度的叫程度补语**”（p57）（程度を表すものを程度補語と称する）と、「結果補語」について“**表示结果的叫程度补语**”（p11）（結果を表すものを結果補語と称する）と説明されている 。

（**沸腾的群山**・ p208）
「材料<u>について</u>、われわれは、あとで、それぞれについて研究し、解決の方法を考えましょう。」（沸き立つ群山・p233）

(17)が示すように、「“**关于**”+賓語」全体が述部を修飾する場合、“**关于**”の賓語と述部との関係は、以下のようにまとめられる。

A．(17) a“**关于…，参考书刊**”（「…について、書籍と雑誌を参考にする」）のように、“**关于**”の賓語“**这个问题**”（「この問題」）は単独で後続動詞“**参考**”（「参考にする」）や後続動詞の目的語“**书刊**”（「書籍と雑誌」）にはかからず、「“**关于**”+賓語」“**关于这个问题**”（「この問題について」）が述部“**可以参考下列书刊**”（「以下の書籍と雑誌を参考にしてよい」）全体にかかる。

B．(17) b“**关于植树造林<u>的</u>规划**”（「植樹造林について<u>の</u>計画」）のように、“**关于**”の賓語“**植树造林**”（「植樹造林」）と述語動詞の目的語“**规划**”（「計画」）との間に、“**关于**”を通じて連体修飾関係が成立可能である。

C．(17) c“**我们回头再分别研究<u>材料问题</u>，设法解决<u>材料问题</u>。**”（「われわれは、あとで材料<u>について</u>研究し、またそれ<u>について</u>解決の方法を考えましょう。」）のように、述語動詞が二つ以上の場合、“**关于**”の賓語“**材料问题**”（「材料」）は、それぞれの述語動詞“**研究**”（「研究する」）の対象、または述語動詞の目的語“**解决**”（「解決（する）」）の対象として取られる。

また、“**关于**”の語順について、北京大学中文系（1982）では、(18) の用例を挙げ、“‘关于……’只能放在主语前面,不能放在主语后面。” 「“**关于**”は主語の前にしか置かれず、主語の後には置かれない」（p219）[26] と、説明されている。“**至于**”について、先行研究ではその意味を説明しているものの、語順について明記しているものが少ないようである。本稿筆者が調べた限りでは、**饶**長溶（1987）は、(19) a の用例を挙げ、“**至于**”が文中に置かれないこと[27] を指摘している。本稿筆者が用例調査を行った結果、全ての“**至于**”は、文頭に置かれている。

---

[26] 詳しくは、北京大学中文系（1982）を参照されたい。
[27] 詳しくは、**饶**長溶（1987）を参照されたい。

（１８）a*“ **我关于这个问题没有意见。**”
「私はこの問題について意見がない。」
b “ **关于这个问题，我没有意见。**”
「この問題について、私は意見がない。」

（１９）a*“ **这些人至于人民的利益总是不太关心。**”
「これらの人は、国民の利益についてはいつもあまり関心を持たない。」
b “ **至于人民的利益，这些人总是不太关心。**”[28]
「国民の利益については、これらの人はいつもあまり関心を持たない。」

（２０）a「同社は亀裂のひどい１機については定期運航からはずしたという。」(=（4）a)
b「亀裂のひどい１機については、同社は定期運航からはずしたという。」

（２１）「この問題については（？について）、私は意見がないが、あの問題については（？について）、私は意見がある。」

以上、(18）と（19）が示すように、中国語の“**关于**”と“**至于**”は、主語の前、すなわち文頭に置かれている。これは、中国語固有の構造上の特徴である。

一方、「について」と「については」は、(18)、(19）の和訳と（20）が示すように、語順が比較的自由で、文頭にも文中にも置くことができる。(18）a と（18）b、(19）a と（19）b の和訳及び(20)a と(20)b を比較すると、それほど大きな違いはないと考える。詳しく説明すると、(18）a、(19）a の和訳と(20)a の方がニュートラルな語順という感じはする。また、(18）b の和訳が示すように、「について」は文頭に置くと marked な語順になるので，「～について」の部分を強調して述べているような印象を受けるが，対比の意味になるとは限らない。(21)は文脈が対比の文脈なので，「は」がないと少し不自然である。 それに対して、(19）b の和訳と(20)b は、それぞれ「国民の利益については」と「亀裂のひどい１機については」の部分を若干強調するように感じると同時に、対比のニュアンスも感じる。この場合、「については」のように「は」がついている方が，対比のニュアンスが強い。「については」を用いれば、文頭に置かれな

[28] (19)b は、本稿筆者が付け加えた用例である。

くても、(19) a の和訳と(20)a が示すように、対比を表せる。

７.「について」と“关于”との対応関係

「について」と“关于”との対応関係について、本章では、以下の 3 点を論じた。

まず「について」の意味を「発話・思考などの行為活動のテーマを設定する」とまとめ、さらに「について」を、「について」と他の格助詞（ヲ、ガ、ニなど）と置換可能なタイプと、「について」とそれに先行する名詞全体が述部を修飾するタイプとの、2 タイプに用法分類した。「について」は、基本的に“关于”に対応していると考える。ただし、“关于”文の述語動詞に「結果または程度補語」を伴った場合、“关于”の賓語を述語動詞の後に復元することができなくなる。それは、中国語固有の制約なので、「について」はその制約を受けない。また、語順において、“关于”は主語の前にしか置かれず、主語の後には置かれないが、ニュアンスが若干違うが、「について」は語順が比較的自由で、文頭にも文中にも置くことができる。

次に、“关于”について、“关于”の賓語が意味上述語動詞の対象であるタイプと、「“关于”+賓語」全体が述部を修飾するタイプとの、2 タイプに用法分類した。“关于”は、大体「について」に対応していると考える。ただし、“关于”は「ニ」格と交換可能な「について」に対応しない時もある。その場合、「について」の後続動詞は抽象的な「方向性+対象」を要求する動詞であり、中国語の“对”、“对于”に対応する。

さらに、「について」と「については」を区別し、「については」の意味を「もう一つの話題を提起する」と主張した。“关于”は、動作動詞と共起する「については」には対応しないが、非動作動詞と共起する「については」に対応する。

ただし、「については」は非動作動詞と共起し「もう一つの話題を提起する」との意味を表す場合は、それには対応しない。動作動詞と共起する「については」と、非動作動詞と共起し「もう一つの話題を提起する」との意味を表す「については」は、通常中国語の“**至于**”に対応する。

８．まとめ

本章では、以下六つの内容について、考察を加えた。

８・１　「について」と“**关于**”についての先行研究を概観し、問題点を確認した。

a.「について」の意味を一般的に説明するに止まり、その具体的な用法については充分に説明・分類していない。
b.「について」が直接かかっていく語には言語活動や思考活動に関係のある語が多いと指摘するにとどまっており、「について」が具体的な動作を表す動作動詞と共起する場合もあることについては説明されていない。
c.“**关于**”に対する用法分類はあまりなされていない。
d.「について」と“**关于**”との対応関係について、まだ不明瞭なところがある。

８・２　「について」と「については」とは区別されるべき二つの用法であることを主張した。

即ち、「について」は「テーマの設定」を表し、「については」は「独立した、もう一つの話題の提起」を表す。

８・３　「について」の用法の分類

A.「について」と他の格助詞（ヲ、ガ、ニなど）が置換可能なタイプ。
「について」が「ヲ格」だけではなく、「対象ガ格」「ニ格」と置き換えられる場合もあると指摘した。
B.「について」とそれに先行する名詞全体が述部を修飾するタイプ。
具体的にどのように述部にかかるかについて、分析した。
C.「について」の意味を「発話・思考などの行為活動のテーマを設定する」と位置付けた。

８・４　「については」の用法分類

A．単純に「について」に係助詞「は」の付いたタイプ
「については」は非動作動詞と共起しており、ニュアンスが若干異なるものの、「は」は削除可能である。

B．もう一つの話題を提起するタイプ
「については」は非動作動詞または動作動詞と共起しており、「もう一つの話題を提起する」という意味を表すので、「については」の「は」は削除不可である。その場合は、「については」は一つの分けられない要素であると主張した。

８・５　“关于”についての用法分類

A．“关于”の賓語が意味上述語動詞の対象であるタイプ。

B．「“关于”+賓語」全体が述部を修飾するタイプ。

８・６　「について」と“关于”との対応関係

“关于”に対する「について」の対応

A．「について」は「発話・思考などの行為活動のテーマを設定する」という機能を果たし、基本的に“关于”に対応している。

B．述語動詞に「結果または程度補語」を伴った場合、“关于”の賓語を述語動詞の後に復元することができなくなる。それは、中国語固有の制約なので、「について」はその制約を受けない。

C．語順において、“关于”は主語の前にしか置かれず、主語の後には置かれない。一方、ニュアンスが若干違うが、「について」は語順が比較的自由で、文頭にも文中にも置くことができる。

「について」に対する“关于”の対応

A．“关于”は大体「について」に対応している。

B．“关于”は動作動詞と共起する「については」には対応しないが、非動作動詞と共起する「については」に対応する。ただし、「については」が非動作動詞と共起し「もう一つの話題を提起する」という意味を表す場合は、それには対応しない。

C．動作動詞と共起する「については」と、非動作動詞と共起し「もう一つの話題を提起する」の意味を表す「については」は、通常中国語“至于”

に対応する。

D．“**关于**”は「ニ」格と交換可能な「について」に対応しない時もある。その場合、「について」の後続動詞は抽象的な「方向性+対象」を要求する動詞であり、中国語の“**对**”、“**对于**”に対応する。

最後に、本稿筆者は、用例調査に使用した資料から、日本語と中国語の文献及びその翻訳をそれぞれ三冊[29] 選択し、「について」と“**关于**”がどのように翻訳されているかを調査した。その結果は、次頁に示した表１と表２である。表１は、「について」から“**关于**”への翻訳実態であり、表２は、“**关于**”から「について」への翻訳実態である。基本的に「について」と“**关于**”との対応関係を示していると言える。

表 1

日本語	数量	中訳	数量
について[30]	64	**关于**	31
		翻訳されず 通常の目的語[31]	17
		对 / 对于	11
		その他	5
		至于	3

29 日本語は、『犬神家の一族』、『青春の証明』、『夜行列車殺人事件』。中国語は《**沸腾的群山**》、《**黑雪**》、《**我的父亲邓小平**》。

30 「は」が省略できる「については」を含む。

31 「この問題について、我々は討論した」における「について」を中国語に翻訳する場合、通常,以下の２種類の訳し方がある。「翻訳されず通常の目的語」になるのは、b のような場合を指す。
a “关于这个问题，我们已经讨论了。”
b “我们已经讨论了这个问题。”

については	6	谈到[32]	1
		提起[33]	1

表 2

中国語	数量	和訳	数量
关于	39	について[34]	17
		を	7
		に関して	6
		の	4
		に対して	3
		関係の	1
		が	1
至于	4	については	2
		にかんしては	1
		にあたっては	1

[32] “谈到”は“至于”とほぼ同義である。

[33] “提起”は“至于”とほぼ同義である。

[34] 注 30 と同様である。

第三章

中国語の介詞“作为”と日本語の複合格助詞「として」

――その用法の分類と対応関係を中心に――

１．“作为”と「として」の意味

中国語の介詞“作为”（zuowei）の意味について、趙淑華（1996）では“**表示就人的某种身份或事物的某种性质来说。**”（p428)「人間のある身分または事物のある性質に基づき説明することを表す」と、侯学超編（1998）では“**介绍具有某种身份、性质的话题或论说主体。**”（p794)「ある身分、性質を有する話題を紹介するかまたは主体を評論する」と説明されている。一方、日本語の複合格助詞「として」の意味について、『日本語教育事典』（1982）では「資格や立場を表す」（p397）と、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）では「名詞に接続して資格・立場・部類・名目などを表す」（p337）と説明されている。

（１）a “**作为第七军的主攻部队，他与友军攻下长沙，攻下咸阳，攻下武汉最后一道防线险关贺胜桥，进而挺进江西。**”（我的**父亲邓小平**・p200）

「第七軍の主攻撃部隊として、李明瑞と友軍は長沙、鰐陽、および武漢にとって最後の防衛線である難所の賀勝橋を攻撃し、さらに歩を進めて江西に進攻した。」（わが父・鄧小平・p258）

a′「わたしも責任者として井戸原さんにご迷惑をかけていることを大変苦しく思っている。」（棲息分布・p88）

“**我作为一个常务，也为给您添了麻烦而感到难过。**”（**孤狼**・p107）

b “蒋介石作为战略予备队而留置在后方的兵力（蒋介石把兵力作为战略予备队而留置在后方）[1]，已由战争初的五十五个旅减少为三十九个旅。”（毛泽东传(原)・p778）

「蒋介石が戦略予備隊として後方に留めている兵力は、すでに戦争初期の五十五個旅団から三十九個旅団に減少した。」
（毛沢東伝（訳）・P733）

b′「これを切り捨てたあとの長いほうのチューブは、昨夜鐘平の往診用鞄の中から証拠品として押収し、鑑識に廻した。」（Wの悲劇・p247）

“他把从钟平的出诊包里找到的另一段胃管作为证据送到了鉴别室。”

（W的悲剧・195）

c “就这样，在作为中央代表的邓小平和其他共产党人的精心安排和组织下，广西的党组织有效地保存了革命的有生力量，……”

（我的父亲邓小平・p214）

「このようにして、中央代表としての鄧小平およびその他の共産党関係者の入念な段取りと組織化の努力により、広西の党組織は効率よく革命の人的戦力を蓄え、…」（わが父・鄧小平・p276）

c′「もし、事実に目をつむれば、われわれは、自分の刑事としての職務を放棄したことになる。」（イブが死んだ夜・p362）

“如果对事实视而不见，我们就等于放弃了作为刑警的职责。”

（世家迷雾・p264）

（1）の各用例を観察すると、“作为”と「として」は、以下のような構文上

[1] 目的語に関連する場合、日本語の「として」の「～を～としてＶ」に対し、中国語の“作为”の方では、通常“把～作为～Ｖ”という形がよく使用され、またその類義形態として“以～为～Ｖ”などの形も使用される。それについては、4･1･2･1 節で説明する。

の共通点を示している。

A．“**作为**”「として」ともに、「“**作为**”の賓語」（(1)a では“(**作为**）**第七军的主攻部队**”「第七軍の主攻撃部隊」）または「としてに先行する名詞」（(1)a′ では「責任者（として)」）と、「文の主語」（(1)a では“**他与友军**”「李明瑞と友軍」、(1)a′ では「わたし」）との関連を示す場合がある。

B．“**作为**”「として」ともに、「“**作为**”の賓語」（(1)b では“(**作为**）**战略予备队**”「戦略予備隊」）または「としてに先行する名詞」（(1)b′ では「証拠品（として)」と、「文の目的語」（(1)b では“ **兵力**”「兵力」、(1) b′ では「これを切り捨てたあとの長いほうのチューブ」）との関連を示す場合がある。

C．“**作为**”または「として」ともに、名詞修飾マーカー“的”「の」を伴い、「“**作为**”の賓語」（(1)c では“(**作为**）**中央代表的**”「中央代表（としての)」）または「としてに先行する名詞」（(1)c′ では「刑事（として）の」と「被修飾語」（(1)c では“**邓小平**”「鄧小平」、(1) c′ では「職務」）との関連を示す場合がある。

従って、中国語の介詞“**作为**”と日本語の複合格助詞「として」が確かに一定の対応を見せており、また中国の日本語教育界と日本の中国語教育界では、一般的にそう認識されている。

しかし、(2) が示すように、中国語の介詞“**作为**”と日本語の複合格助詞「として」とは、対応しない場合もある。

（2）a　“爱情作为陷井真不知陷害过多少弱女子或女强人。”[2)]

a′ ＊「愛情が落し穴としていったいどのくらいの弱い女性または女丈夫を陥れたか分からない。」

a″　「愛情が落し穴のようにいったいどのくらいの弱い女性または女丈夫を陥れたか分からない。」

b　「今度は添田が考える番だった。彼の直感として、村尾芳生は問田書記生から野上一等書記官の最後を聞いていない。」
（球形の荒野・p254）

b′ ??“这一下轮到添田陷入沉思了。作为他的直觉，村尾芳生没有听到门田庶务汇报野上一秘的临终情况。”

b″　“这一下轮到添田陷入沉思了。凭他的直觉，村尾芳生没有听到门田庶务汇报野上一秘的临终情况。”（重重迷雾・p304）

c　「急場の医療行政として、月一、二回巡回する保健婦が事件を発見したわけであった。」（野性の証明・p15）

c′ ＊“作为应急的医疗行政，女保健员每月去风道屯巡回医疗一两次，所以这个事件就被她发现了。”

c″　“作为应急的医疗（行政的「行政の」）措施，女保健员每月去风道屯巡回医疗一两次，所以这个事件就被她发现了。”（野性的证明・p9）

d　“作为我（来说），就应该时刻保持清醒的头脑。”

d′ ＊「わたしとして、いつも頭脳を冷静に保たなければならない。」

d″　「わたしとしては、いつも頭脳を冷静に保たなければならない。」

e　「大学院を出てすぐ大学に就職できる人は、研究者としては幸運な部類に入る。」[3)]

---

[2] 陳淑梅（1999）から引用した用例である。

[3] グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）から引用した用例である。

e′？“研究生一毕业马上就能在大学就职的人，作为科研人员属于幸运的一类。”[4]

e″　“研究生一毕业马上就能在大学就职的人，作为科研人员来说属于幸运的一类。”

それでは、“作为”と「として」との対応関係は、いったいどうなっているのか、例えば、両者の表す意味は完全に一致するのか、もしそうでなければ、それぞれどのような用法分類ができるのか。また構文上、両者はそれぞれどのような特徴を示しているのか。上記の問題については、本稿筆者が先行研究を調べた限りでは、従来あまり論じられていないようである。本章は“作为”と「として」について用例調査を行った上で、両者を用法分類し、その対応関係をまとめたいと思う。

２．“作为”についての先行研究と問題点

２・１　“作为”の意味と用法

中国語の介詞“作为”の意味と用法について、趙淑華(1996)、侯学超編(1998)、陳淑梅（1999）などの先行研究をまとめると、以下のようになる。

A.“作状语，表示人的某种身份或事物的某种性质。”質

「状況語（連用修飾語）になり、人間のある身分または事物のある性質を表す。」

[4] (2)e′に「?」を付けたのは、文としておかしいというより、“作为…”だけでは日本語の「としては」の意味を正確に表現できていないからである。(2)e″のように、“作为…来说”に代えれば、文は成立するし、「としては」の意味をほぼ正確に表現できる。

Ｂ.“‘作为…的’作定语，中心语所指与‘作为’的宾语相同。”

「“作为…的”が連体修飾語となり、中心語（被修飾語）が表すものは“作为”の賓語と同じものである。」

Ｃ.“泛论一般情况，主语可以不出现；或者实际上起主语的作用。此时，多用‘作为…来说’的形式。”

「一般的な情況を論じる場合、主語が出現しなくてもよい。または実質的に主語の役割を果たす。この場合、“作为…来说”をよく使用する。」

２・２　“作为”の用法分類

ここで言う“作为”の用法分類とは、２・１に記述した“作为”のＡ、Ｂ、Ｃ各用法に関するそれぞれの内部分類を指す。

２・２・１　状況語（連用修飾語）になる“作为”について

“作为”の状況語（連用修飾語）になる用法について、陳淑梅（1999）では、以下二つのタイプ[5]に分類されている。

Ａ.“格式１：Ｓ・作为ＮＰ・ＶＰ”

[5] 陳淑梅（1999）は、“作为”について三つのタイプに分けているが、２・１に記述した“作为”のＡ、Ｂ、Ｃ用法のＡとＣとを混同している。実はタイプ１とタイプ２は“作为”の用法のＡに関するもので、そのタイプ３“格式３：作为ＮＰ来说・(S)ＶＰ”「タイプ３：“作为”+賓語+“来说”+（主）動詞句」は、“作为”の用法のＣに関するものである。よって、そのタイプ３については、2･2･3“作为”の用法Ｃの所で論じる。

「タイプ１：主語+“**作为**”+賓語+動詞句」

Ｂ.“ 格式２：**作为**ＮＰ・ＳＶＰ”

「タイプ２：“**作为**”+賓語+主述句」[6)]

しかし、陳淑梅（1999）のタイプ１とタイプ２とは、ただ文における「“**作为**”+賓語」の位置（文頭にあるかまたは文中にある）が異なるだけで、(3)が示すように、ニュアンスは若干異なるものの、意味としてはほぼ同じである。よって、タイプ１とタイプ２に分ける必要はないと思う。

（３）a“**张虎作为特级教师参加了那次座谈会。**”（タイプ 1）

「張虎さんは特級教師としてその座談会に参加した。」

b“**作为特级教师，张虎参加了那次座谈会。**”[7)]（タイプ２）

「特級教師として、張虎さんはその座談会に参加した。」

また、陳淑梅（1999）は、そのタイプ１とタイプ２の共通の特徴として、以下の三つ挙げている。

“**第一，这一句式中‘作为ＮＰ’有时相当于‘当作ＮＰ’或‘成为ＮＰ’，‘作为’的语义跟用作动词[8)]时相同。但是，‘作为ＮＰ’实际上是用于状位，而ＶＰ则是动词谓语，是句子重心之所在，不能删除。**”(p20)「第一に、このタイプにおける「“**作为**”+賓語」の意味は、「（～を）～とする」または「(～

[6] 詳しくは陳淑梅（1999）を参照されたい。
[7] (3) a は陳淑梅（1999）の例 31、(3) b は同例 38 である。
[8] “**作为**”が動詞になる場合、「…とする・…にする」という意味を示す。

が）～となる」に相当する場合もある。“**作为**”の意味は動詞として使用される時と同じである。ただし、「“**作为**”+賓語」が実際に状況語（連用修飾語）の位置に置かれるので、その後にある「動詞句」は述語動詞であり、文の重要な部分なので、それを削除することは出来ない。」

（４）a　“**我被作为外宾安排到了第一排。**”

「私は外賓として第１列に坐るよう勧められた。」

a′　“**我被当作外宾安排到了第一排。**”

「私は外賓として第１列に坐るよう勧められた。」

b　“**香港作为我国同世界各国进行经济、科技、文化交流的重要桥梁而获得巨大成功。**”[9]

「香港は、我が国が世界各国と経済、科学技術、文化の交流を行う為の重要な掛け橋として、十分に目的を達成している。」

b′　“**香港(已经)成为我国同世界各国进行经济、科技、文化交流的重要桥梁。**”

「香港は、（すでに）我が国が世界各国と経済、科学技術、文化の交流を行う為の重要な掛け橋となっている。」

“**第二，这一句式中‘作为ＮＰ’有时相当于‘以某种身份／名义／地位／作用’之类意思。这时‘作为’的语义有所虚化，句式中的ＶＰ不能不出现。**”(p20～21)「第二に、このタイプにおける「“**作为**”+賓語」は、「ある身分／名義／地位／役割で」のような意味に相当する場合もある。この場合、“**作为**”の

[9] (4) a は陳淑梅（1999）の例 32、(4) b は同例 33 である。

実際の意味が弱くなっているので、文に動詞句が出現しなければならない。」

（５）“她作为公司中国业务首席代表主持了中国国际市场的调研。”[10]

「彼女は会社の中国業務首席代表として中国国際市場に対する研究調査を主管している。」

“第三，这一句式中‘作为ＮＰ’有时用于比喻，表示‘像是／有如’的意思。如果没有ＶＰ，句子便不能自立。”（p21）「第三に、このタイプにおける「“作为”+賓語」は、比喩的に使用され、「～に似ている／～のごとく」のような意味を示す場合もある。この場合、もし動詞句がなければ、文は成立しなくなる。」

（６）a　“儿童作为祖国的花朵应该倍受关爱。”

＊「子ども達は祖国の花として（○のように）配慮をうけ、大事にされるべきである。」

a′　“儿童像是祖国的花朵应该倍受关爱。”[11]

「子ども達は祖国の花のように配慮をうけ、大事にされるべきである。」

b　“爱情作为陷井真不知陷害过多少弱女子或女强人。”（=（2）a）

＊「愛情は落し穴として（○のように）いったいどのくらいの弱い女性または女丈夫を陥れたか分からない。」

b′　“爱情有如陷井真不知陷害过多少弱女子或女强人。”

「愛情は落し穴のようにいったいどのくらいの弱い女性または女丈夫を陥れたか分からない。」

---

[10]（5）は陳淑梅（1999）の例 34 である。
[11]（6）a は陳淑梅（1999）から引用した用例である。

以上、状況語（連用修飾語）になる“**作为**”の用法について陳淑梅（1999）の記述を見てきた。陳淑梅（1999）の記述には有効点も多いが、本論文の観点からは以下の点が問題になる。

状況語（連用修飾語）になる“**作为**”が、“**作为**”の賓語と、文の主語・目的語等、他のどの名詞句と関わりを示すのかという観点が欠けている。本章では後述するように状況語（連用修飾語）になる“**作为**”に、①“**作为**”の賓語と文の主語との関連を示すタイプ、②“**作为**”の賓語と文の目的語との関連を示すタイプ、③“**作为**”の賓語と述部全体との関連を示すタイプの三つを認めるが、陳淑梅(1999)はこのような分類に気づいていない。(4)～(5)の、陳淑梅(1999)の挙げる用例の“**作为**”が、全て①のタイプばかりであることもこの観点が欠けていることを物語っている。

具体的には、中国語には、②“**作为**”の賓語と（文の）目的語との関連を示すタイプが存在する。

（7）“**正是这种沉重的历史责任感，使我们鼓起勇气写出这本《文化大革命'简史》，把自己的研究所得作为一家之言贡献给读者。**”

（『**文化大革命』简史（原）**・p2）

「まさしくそのような重い歴史的責任感こそが、われわれにこの『「文化大革命」簡史』を書く勇気を奮い起こさせ、自分たちの研究を一家の言として読者に献げることを可能にした。」
（『文化大革命』簡史（訳）・p16）

(7)のような文において、“**作为**”は“**作为**”の賓語“**一家之言**”（「一家の言」）と文の目的語“**自己的研究所得**”（「自分たちの研究」）との関連を示して

いる。陳淑梅（1999）はこのようなタイプの存在を指摘していない。

同様に、陳淑梅（1999）は、(8)のような、“**作为**”の賓語と述部全体との関連を示すタイプを指摘していない。

（８）a “**作为一种义务，他参加了那次考试。**”

「彼は義務として、その試験を受けた。」

b “**作为原则,我们不同意撤军。**”

「原則として、我々は軍隊の撤退に同意しない。」

c “**于是，作为特例，统战部收下了这份礼物。**”（我的**父亲邓小平**・p60）

「そこで、特例として、統一戦線部はこの贈り物を受け取った。」
（わが父・鄧小平・p104）

例えば(8)a において、“**作为**”は“**作为**”の賓語“**一种义务**”（「義務」）と文全体“(**他**) **参加了那次考试**”（「その試験を受けた」）との関連を示している。(8)b、c も同様である。

２・２・２　連体修飾語になる“ **作为…的**” について

連体修飾語になる“ **作为…的**” について、侯学超編（1998）では(9)のような用例を挙げ、

“‘ **作为…**’ **作定语，中心语所指与** ‘ **作为**’ **的宾语相同。…(中略)…第一句((9a)を指す) 可以改写成**(9b)**和**(9c)**。**”（p795）“ **作为**” が連体修飾語になる場合、中心語“(**作为…的**” が修飾する語）は“ **作为**” の賓語が指すものと同じものである。…**(中略)**…一つ目の文（(9a)を指す）を(9b)と（9c)に書き換えられる」

と説明されている。

しかし、（10）が示すように、“作为…的”が修飾する語は“作为”の賓語が指すものと同じものでない場合もある。この点について、侯学超編（1998）では説明されていない。

（9）a “作为一个来自农村的大学生的我（我=大学生），对这种浪费粮食的行为

非常气愤。”

「農村から来た大学生としての私は、このような食料を浪費する行為に憤りを覚えている。」

b “我作为一个来自农村的大学生，对这种浪费粮食的行为非常气愤。”

「私は農村から来た大学生として、このような食料を浪費する行為に憤りを覚えている。」

c “作为一个来自农村的大学生，我对这种浪费粮食的行为非常气愤。”

「農村から来た大学生として、私はこのような食料を浪費する行為に憤りを覚えている。」

（１０）a “免得打击了他作为一个总司令官的威信（威信≠ 司令官）。那样他会

认为我们是有意拆他的台。”（黒雪（原）・p214）

「彼の総司令官としての威信を傷つけることは、人々に、われわれが故意に彼の足を引っぱっていると思われるかもしれません。」（黒雪（訳）・p336）

b “即使与她作为一个家庭问题评论家的活动（活动≠ 家庭问题评论家）

分开，她作为一个妻子，来到丈夫的办事所，按说也没有任何不妥之

处。”（人性的证明・p40）

「家庭問題評論家としての活動を切り放しても、彼女が妻として、夫の事務所へ来るのは、なんらさしつかえないはずであった。」（人間の証明・p49）

２・２・３　主体の役割を果たす“作为”について

“作为”の主体の役割を果たす用法について、陳淑梅（1999）は、以下のように説明している。

“用‘作为ＮＰ来说’的句子有时不出现Ｓ，句子在结构上找不到主语。这时，通过‘作为…来说’介引出来的ＮＰ，既是论说上的话题主语，也是句法关系上的逻辑主语。例如：

作为我来说，就应该时刻保持清醒的头脑。

显然，上例的‘我’是‘应该时刻保持清醒的头脑’的主语，但它已经潜入‘作为…来说’的结构之中。

这种主语潜入‘作为…来说’结构的说法，也可以不用‘来说’，但是实际上隐含‘来说’。如上例，可以只说‘：作为我，就应该时刻保持清醒的头脑。’”（p22～23）「“作为ＮＰ来说”を使用する文には主語が現らわれない場合もあり、その文は構造上には主語はない。この場合、“作为…来说”を通じて導かれた介詞賓語（“作为”の賓語）は、題述上のテキスト主題であれば、

シンタックス上のロジック主語でもある。例えば：

わたしとしては、いつも頭脳を冷静に保たなければならない。

明らかに、上の用例における「わたし」は「いつも頭脳を冷静に保たなければならない」の主語である。ただし、それは既に“**作为…来说**”という構造の中に入っている。

このような、主語が“**作为…来说**”という構造の中に入っている用法は、“**来说**”を使用しなくてもよいが、実質的に含みとして“**来说**”を持っている。例えば、上の用例を「“**作为我**”いつも頭脳を冷静に保たなければならない。」とだけ言ってもよい。」

しかし、(11)b が示すように、陳淑梅（1999）が挙げた用例における“**应该**”ということばを削除すると、“**作为…来说**”が主体の役割を果たす文は成立しなくなる。(11)c が示すように、“**作为…来说**”を使用しないと、“**应该**”ということばを削除しても、文は成立する。言い換えれば、陳淑梅（1999）では“**作为…来说**”が主体の役割を果たす場合があることを指摘するにとどまっており、その成立条件を含む具体的な考察はほとんどなされていない。

（１１）a “**作为我来说，就应该时刻保持清醒的头脑。**”

b* “**作为我来说，就时刻保持清醒的头脑。**”

c “**我就时刻保持清醒的头脑。**”

２・２・４　基準を表す“**作为…来说**”について

中国語の“**作为…来说**”は、2･1 で触れたように、文頭において主体の役割を果たす機能がある。また、(12)が示すように、“**作为…来说**”は文中に置かれ、ある基準に基づき主体を評価する機能もある。この点については、先行研究では説明されていない。その場合、“**作为…来说**”は、日本語の「として」ではなく、「平均値をもつものの集合」を表す「としては」[12] に対応する。

（１２）a “**邓小平，作为他个人来说，也由一个青年革命者成长为一名叱咤风云的革命家。**”

「鄧小平も、彼個人としては、普通の革命青年から偉大な革命家に成長した。」

b “**邓小平，作为他个人，也由一个青年革命者成长为一名叱咤风云的革命家。**”

「鄧小平も、彼個人として、普通の革命青年から偉大な革命家に成長した。」

３．「として」についての先行研究と問題点

日本語の複合格助詞「として」の先行研究の論点は、主として以下の 2 点に集中していると思われる。一つは「として」の意味と用法に関する説明であり、もう一つは「として」と「としては」との関連に関するものである。

３・１　「として」の意味と用法

日本語の複合格助詞「として」の意味について、『日本語教育事典』(1982) では、「資格や立場を表す」(p397) と、森田･松木（1989）では、「「として」

[12] 「平均値をもつものの集合」を表す「としては」について、4･2･2･3 で詳しく説明する。

は通常資格･立場・名目・部類を表し、上接語に何らかの意味や価値づけをする表現である。」（p3）と、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）では、「名詞に接続して資格･立場・部類・名目などを表す」（p337）と、それぞれ説明されている。

しかし、これらの先行研究は「として」の意味を一般的に説明するにとどまっており、その具体的な用法、特に構文上「として」（として＋それに先行する名詞）をどのように位置付ければよいかなどについては充分に分類・説明していない。

３・２　「として」に関する用法分類

「として」の用法分類について、森田（1989）では、次のように説明されている。

「(1)「ＡハＢトシテ……だ／ＡハＢトシテ……する」

ＡがＢの資格や立場、名目、部類であることを表す。他の資格や立場なら問題にならないのだが、ＡがＢの資格や立場にあるということに何らかの意味や価値づけをする表現意識である。Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ……と多くある中で特にＢの在り方としてＡの状況や行為が成り立っているのである。

……（中略）……

(2)「ＡヲＢトシテ……する／ＡハＢトシテ……される」

Ｂに名詞もしくは文を立てる。この文型は「ＡハＢだ」もしくは「ＡハＢヲ……することだ」の言い換えの成り立つ例が多い。」（p799）[13]

しかし、森田（1989）では、以下のような問題点について説明されていない。

a.「として」が、名詞句（が表すもの）の資格・立場を表す場合、どのようなものの資格・立場を表し得るのか。

b.（13)におけるような「として」をどのように処理すべきか。

（１３）a「彼は義務<u>として</u>その金を返した。」

b「太郎は親に対する復讐<u>として</u>赤ん坊を連れ去った。」[14]

また、馬（1997b）は、「として」が名詞句（が表すもの）の資格・立場を表す場合、どのようなものの資格･立場を表し得るのかについて、テストを行い、

[13] 詳しくは、森田（1989）を参照されたい。

[14] （13）ａとｂは、馬（1997b）の（15）ａと（15）ｃの用例である。

「として」が資格・立場を表し得る文の成分と、表しにくい文の成分を分析・説明した（これについて、“作为”との対応を含めて5節で論じる）。(13)における「として」について、馬(1997b)は、述部（が表すものの）の資格・立場を表す用法と位置付けた。即ち（13）のような場合、「（13)a の「義務」、(13)b の「復讐」は、それぞれガ格名詞句の「彼」「太郎」や、その他のヲ格名詞句「その金」「赤ん坊」の資格や立場を表しているとは考えられず、述部の「(その金を)返した」「(赤ん坊を)連れ去った」という行為の資格を表している。」(p26)[15] と考えられるのである。

しかし、馬（1997b）には、以下のような問題点がある。

a.「として」の述部（が表すものの）の資格・立場を表す用法については存在の指摘および部分的な記述を行ったものの、詳細な分析が不足している。

b. 中国語の介詞“作为”との対応関係には触れていない。

３・３　「としては」の用法について

一方、「としては」の意味と用法及び「として」と「としては」との関連に関する従来の研究の主なものとして、森田・松木（1989)、馬（1997b)、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998）などが挙げられる。ここでは、まずそれらを概観し、その問題点を確認しておこう。

まず、森田・松木（1989）は、

> 「なお、厳密に言えば、同じ「として」でも、
> 　知事は来賓として祝辞を述べた。
> のように連用格助詞の役割を果たしている場合と、
> 　県として対策を講じる必要がある。
> 　スタイリストに限らず、女性の進出の目立つこの種の職業には見逃せない共通性がある。それは、新しい職業で、まだ収入面で安定していないということ、男性として一生をささげる魅力に乏しいということである。

[15] 詳しくは、馬（1997b）を参照されたい。

のように「が」で置き換え可能な主格助詞の役割を果たしている場合がある。が、後者の例は比較的少なく、また、主格も連用格の一種だという立場に立てば、それほど厳密に区別する必要もないであろう。」（p4）と説明している。

また、森田・松木（1989）は、

「彼女<u>としては</u>、健二が闇米の世話をしたり、薪を割ったりしてくれたお礼に、時々お愛想をいっただけのことである。……

「としては」……は、係助詞「は」で代用させても、立場・視点の意識が希薄になるだけで、意味・構文上支障はない。」（p55～56）と説明している。

さらに、森田・松木（1989）は、

「「としては」には、格助詞的な「として」の資格･立場を示す用法を発展させた形で、ある資格･立場を題目として取りたてて、実現の姿がそれにふさわしくないことをほのめかす用法がある。これは、「として」に係助詞「は」が付加されただけの、格助詞的な機能を果たす「としては」とは区別され、「としては」全体が一語化して特別なニュアンスを分担している。

a 一介の平社員<u>としては</u>破格の出世だったに違いない。

b 彼は一八〇センチという長身だが､バスケットボール選手<u>としては</u>小柄なほうらしい。

つまり　a は、「平社員」の立場には十分すぎるぐらいの待遇を受けているというプラスの意味での不均衡を、b は、「バスケットボール選手」の資格にはむしろ不十分な身長しかないというマイナスの意味での不均衡を示しているのである。」（p56～57）と説明している。

以上まとめると、森田・松木（1989）は、

A.「として」は「が」で置き換え可能な主格助詞の役割を果たしている場合がある。

B.「としては」は、ある資格･立場を題目として取りたてて、実現の姿がそれにふさわしくないことをほのめかす用法がある。

と指摘しているものの、

「としては」の「「が」で置き換え可能な主格助詞の役割を果たす」用法について少し触れるに止まり、どのような場合両者は置き換えられるのか、または

どのような場合両者は置き換えられないのか、すなわち「としては」に関するその特徴、例えば役割、成立条件と制限などについては説明していない。

一方、馬（1997b）は、「として」について、「として」で「単純な「資格･立場」を表す」基本的な用法の他に、「としては」で「判断主体化された立場」を表す特殊な用法があることを主張した。具体的に、(A)のような用例を挙げ、

（A）　a 私としては、仕上げに三日はかけたい。
　　b 太郎としては彼らを応援するつもりなのだろう。
　　c 私としては、これぐらいのことしかできない。

この用法は、文中の他のものの資格･立場を表すのではなく、ある条件のもとで「立場」それ自身が、事実上判断の主体としてはたらく、という用法である。（A）a で言えば「私という立場」が「私という判断主体」と接近する、あるいは事実上同じになってしまうために、立場を表す句である「わたしとしては」が、判断主体としてのはたらきをも持つようになっている、ということであると、説明している。また、その用法の特徴として、以下の三つを挙げた。

A．主節における義務的な主題化

この「判断主体化された立場」を表す用法は、主節においては常に「としては」の形で現れ、(B)のａとｂのように、「として」のみの形では現れない。この点「資格･立場」を表す用法は、(B)のｃとｄのように、「として」形で現れ得る。

（B）　a??私として、仕上げに三日はかけたい。
　　b??太郎として彼らを応援するつもりなのだろう。
　　c　この本は教科書として／としてはよくできている。
　　d　太郎は会長として開会の辞を述べた。

B．文の意味タイプとの共起制限

「判断主体化された立場」を表す用法「として」（としては）の第二の特徴としては、文の意味タイプとの共起制限が挙げられる。

（C）　a　私としては、ひとこと挨拶したい。
　　b??わたしとしてはひとこと挨拶した。
　　c　私は会長としてひとこと挨拶したい。
　　d　私は会長としてひとこと挨拶した。

（C）が示すように、「判断主体化された立場」を表す用法「として」（としては）は、「～タイ形、ツモリダ形、コピュラ文」の一部など、「態度・意図」を強く含意するタイプの文にしか現れにくく、（C）bのような文には出現しにくい。

C．主体[16]としての必須性

「判断主体化された立場」を表す用法「として」（としては）の第三の特徴としては、他の「として」と異なり、それが付いた句が述部の必須の格成分として働くという点である。これはこの「として」（としては）が「判断主体化された立場」を表す、即ち、文中で事実上主体の意味役割を担うことの帰結である。（D）が示すように、この「として」は単なる主体ではなく「判断主体化された立場」ではあるが、「主体」に違いなく、同一文中に別に「ガ格」の主格名詞句が出現するとかなり冗長になる。（D）は「私としては」が冒頭の「私は」の言い直しあるいは言い換えであるという読みでなければ、かなり冗長である。即ち、述部が要求している「主体」という意味役割は、「私としては」だけで十分に満たしており、少なくとも積極的に別の主体が要求されていることはないと考えられる。

（D）私は私としては、早く帰りたい。

以上のように、馬（1997b）は、「判断主体化された立場」を表す「として」に独立の位置を与え、単なる「資格･立場」を表す「として」からあるレベルで分けておくことには、十分な理由があると指摘した。

しかし、馬（1997b）は、「判断主体化された立場」を表す「としては」の用法の詳細、特に成立条件と制限などの特徴については、まだ充分に説明していない。また、「判断主体化された立場」を表す「としては」と、(14) のような、いわゆる「平均値をもつものの集合」を表す「としては」との違いについても説明していない。

（１４）「父は、日本人<u>としては</u>背が高いほうです。」[17]

さらに、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) は、「として」の用法分類として、「１「Ｎとして」、２「Ｎとしては」（→「としては」）、３「Ｎ

[16]本章では、「としては」が実質的に「主体ガ格」の役割を果たす場合、それを「主体」と称する。
[17] グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』から引用した用例である。

としても」との三項目を立てて、「として」と、「としては」・「としても」との違いを主張している。具体的に、次のように説明している。

「１Ｎとして
名詞に接続して資格･立場・部類・名目などを表す。
（用例は省略）
……
２Ｎとしては→【としては】
【としては】
「として」に「は」のついたものだが、以下の用法では、通常「は」は省略されない。
１Ｎとしては〈資格･立場〉
(1)彼としては、辞職する以外に方法がなかったのでしょう。
(2)私といたしましては、ご意見に賛成しかねます。
(3)吉田さんとしては、ああしか答えようがなかったのでしょう。
(4)委員会としては、早急に委員長を選出する必要がある。
人物や組織を表す言葉に付いて、「その立場・観点から言えば／考えると」という意味を表す。「…としましては／いたしましては」のように、丁寧な形が用いられることもある。
２Ｎとしては〈平均値とのずれ〉
(1)父は日本人としては背の高いほうです。
(2)100 キロの体重は普通の男性だったらずいぶん重いと思うが、相撲取りとしてはむしろ軽い方である。
(3)大学院を出てすぐ大学に就職できるひとは、研究者としては幸運な部類に入る。
(4)学生数 2000 人というのは大学としてはかなり規模が小さい。
人物や組織を表す言葉に付いて、その属するグループの標準・平均と比べた場合、それからはずれた数値や性質をもっていることを述べる場合に用いる。

３Ｎとしても
(1)私としても、この件に関しては当惑しております。
(2)学長としても、教授会の意向を無視するわけにはいかないだろう。
(3)会社といたしましても、この度の不祥事は誠に遺憾に思っております。

人物や組織を表す名詞に付いて、「その立場・観点からも」という意味を表す。(3) のように丁寧な形をとることもある。「としては」との違いは、「としても」は、他にも同様の立場・観点に立つ人や組織があるという含みがある点である。」(p337～328) と説明している。

以上のように、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) は、「として」と、「としては」・「としても」を明確に分け、「としては」が一つの要素として通常わけられにくいことを主張し、また「としては」をさらに〈資格・立場〉と〈平均値とのずれ〉の二つに分類した。

しかし、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) には、以下のような問題点がある。

a. せっかく「としては」が一つの要素として通常わけられにくいことを主張したものの、その成立条件に関する詳細な考察が不足している。
b. 「態度・意図」を含意せず、ごく普通の文にしか見えない (15) のような用例においても、「としては」はその「主体」の機能を果たしている。グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) は、このような「としては」の用法の詳細、特に成立条件と制限などの特徴については説明していない。
c. 「平均値とのずれ」という概念は若干あいまいなところがある。(16) のグループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) の例 (p338) で説明すると、「相撲取り」は、「平均値とのずれ」と言うより、「平均値をもつものの集合」といった方がふさわしい。

（１５）「組合としては人員不足による現在の労働強化に対し、ベアでそれと闘っている。」(高野・二十歳)
（１６）「120 キロの体重は普通の男性だったらずいぶん重いと思うが、相撲取りとしては標準的である。」

４．“作为”と「として」についての用法の分類

以上、“作为”と「として」に関する先行研究を観察し、その問題点を確認し

た。それに基づき、本稿筆者は“作为”と「として」について用例調査を行った上で、“作为”と「として」に関する、それぞれの意味と用法をまとめ、用法分類をしたいと思う。

４・１　“作为”についての意味・用法と用法の分類

４・１・１　“作为”の意味・用法

本稿筆者は、2･1 で中国語の介詞“作为”の意味と用法について、先行研究を以下のようにまとめた。

A.“作状语，表示人的某种身份或事物的某种性质。”質

「状況語（連用修飾語）になり、人間のある身分または事物のある性質を表す。」

B“‘作为…的’作定语，中心语所指与‘作为’的宾语相同。”

「‘作为…的”が連体修飾語となり、中心語（被修飾語）が表すものは“作为”の賓語と同じものである。」

C“泛论一般情况，主语可以不出现；或者实际上起主语的作用。此时，多用‘作为……来说’的形式。”

「一般的な情況を論じる場合、主語が出現しなくてもよい。または実質的に主語の役割を果たす。この場合、‘作为……来说”をよく使用する。」

これは、基本的に正しいと思うが、“作为”のＡ、Ｂ、Ｃ各用法に関するそれ

ぞれの内部の詳しい記述がまだ足りない。それについて、次節で説明する。

４・１・２　“作为”についての用法分類

４・１・２・１　状況語（連用修飾語）になる“作为”の用法分類

“ 作状语，表示人的某种身份或事物的某种性质。”「状況語（連用修飾語）になり、人間のある身分または事物のある性質を表す」について、本稿筆者は、以下の 3 種類に分けられると考える。

１.「“作为”の賓語」と文の主語との関連を示すタイプ

このタイプは、主語と「“作为”の賓語」との関連を示す（主語は、(17) a では“ 你们”「あなたたち」、(17) b では “汉城”「ソウル」、(17) c では“ 焦昆”「焦昆」、(17) d では“哈里・杜鲁门”「ハリー･トルーマン」、(17) e では“邓”「鄧小平」である。「“作为”の賓語」は、(17) a では“后辈”「後続世代」、(17) b では“首都”「首都」、(17) c では“主任”「主任」、(17) d では“总统”「大統領」、(17) e では“总前委书记”「総前委の書記」である)。いわば「主語が「“作为”の賓語」である」（ (17) a で言えば「“你们是后辈”」「あなたたちは後続世代である」、(17) b で言えば「“汉城是首都”」「ソウルは首都である」、(17) c で言えば「“焦昆是主任”」「焦昆は主任である」、(17) d で言えば「“哈里・杜鲁门是总统”」「ハリー･トルーマンは大統領である」、(17) e で言えば

「“**邓是总前委书记**”」「鄧小平は総前委の書記である」）というふうに理解可能である。

また、(17) f が示すように、“**作为**”はその賓語と主語との関連を、「主語が“**作为**”の賓語のように」（“**爱情**”が“**陷井**”のように）というふうに示す場合も有る。ここで注目に値するのは、(17)f における中国語の“**作为**”は、日本語の「～のように」には対応するものの、「として」に対応しないことである。

（１７）a “**作为后辈，你们爱你们的祖辈。**”（**我的父亲邓小平**・p 序）

「後続世代として、先行世代を愛しなさい。」（わが父・鄧小平・p 序）

b “**现在汉城作为韩国首都已经开始恢复了应有的生机。**”

（黒雪（原）・p51）

「現在、ソウルは韓国の首都として、すでに機能と活気をとりもどしはじめています。」（黒雪（訳）・p80）

c “**焦昆的事多得很，作为一个主任，什么事他都要考虑。**”

（**沸腾的群山**・p268）

「焦昆はおそろしく忙しい身なのに、一人の主任として、どんなことにも、考慮をはらってくる。」（沸き立つ群山・p299）

d “**……有朝一日，哈里・杜鲁门作为美国二十三任总统，他的肖像也会在这里占据一个位置－－**”（黒雪（原）・p218）

「……いつの日か、ハリー・トルーマンもアメリカ第二三代大統領として、彼の肖像がここでしかるべき位置にかけられることになるであろう。」（黒雪（訳）・p341）

e “**作为总前委书记，邓自然是临危受命，繁忙异常了。**”

（**我的父亲邓小平**・p622）

「総前委の書記として当然ながら、鄧は臨む使命から異常に忙しかった。」（わが父・鄧小平・p358）

f“**爱情作为陷井真不知陷害过多少弱女子或女强人。**”

f′ ＊「愛情が落し穴としていったいどのくらいの弱い女性または女丈夫を陥れたか分からない。」

f″「愛情が落し穴のようにいったいどのくらいの弱い女性または女丈夫を陥れたか分からない。」

２．「“**作为**”の賓語」と文の目的語との関連を示すタイプ[18] [19]

このタイプは、「文の目的語」と「“**作为**”の賓語」との関連を示す（「文の目的語」は、(18) a では“**罐头**”「缶詰」、(18) b では“**准备发动济南战役**”「済南戦役を行う準備をすること」、(18) c では“**他和刘少奇**”「父と劉少奇」、(18) d では“**欺侮弱女，图谋不轨者**”「かよわい女をいじめ、道にはずれたことを企む者」である。「“**作为**”の賓語」は、(18) a では“**成品**”「製品」、(18) b では“**这场决战的序幕**”「この決戦の序幕」、(18) c では“**接班人**”「後継者」、(18) d では“**土匪**”「盗賊」である）。いわば「文の目的語を「“**作为**”の賓語」とする」（(18) a で言えば“**把罐头作为成品**”「缶詰を製品とする」、(18) b で言え

---

[18] “**作为**”の賓語」と文の目的語との関連を示す場合、中国語では“**把～作为～V**”という形が使用されている。その類義形態として、本論文では“**以～(作)为～V**” “**将～作为～V**” “**拿～作为～V**” “**～以～V**”などの形も挙げる。それらの違いについて、本論文では触れないことにする。

[19] 「“**作为**”の賓語」と文の目的語との関連を示すタイプには、「～のように」（比喩タイプ）の用法はない。中国語は、「～ヲ～ノヨウニV」を表す場合は、“把～当～V”を使用するのが普通である。

“**好，有志气!怪不得你妈把你当儿子看啦！**”（**沸腾的群山**· p236）

「よーし、げんきがある。あんたのおッ母さんが、あんたを男の子のようにおもうのも、むりはないね！」（沸き立つ群山・p264）

ば“**把准备发动济南战役作为这场决战的序幕**”「済南戦役を行う準備をすることをこの決戦の序幕とする」、(18) c で言えば“**把他和刘少奇作为接班人**”「父と劉少奇を後継者とする」、(18) d で言えば“**把欺侮弱女，图谋不轨者作为土匪**”「かよわい女をいじめ、道にはずれたことを企む者を盗賊とする」）というふうに理解可能である。

（１８）a“**浦在廷心萌一念，如果能够把这些火腿加工成罐头，那样，就既可以储存，又适于作为成品贩卖。**”（我的**父亲邓小平**・p421）

「そこで浦在廷にアイディアがひらめいた。このハムを缶詰にすれば、保存もでき製品として売ることが出来る、と。」
（わが父・鄧小平・p109）

b“**作为这场决战的序幕，毛泽东首先考虑的是准备发动济南战役。**”

（**毛泽东传**（原）・p851）

「この決戦の序幕として毛沢東がまず考えたのは、済南戦役を行う準備をすることだった。」（毛沢東伝（訳）・p803）

c“**到了六十年代初期，他和刘少奇被毛泽东内定为共同担负一线领导工作的接班人。**”（我的**父亲邓小平**・p649）

「六〇年代初頭、父と劉少奇とは毛沢東から共同して第一線の指導工作を担当する後継者として内々に指名された。」
（わが父・鄧小平・p391）

d“**凡有欺侮弱女，图谋不轨者，概以土匪论处。**”（**红高粱家族**･p141）

「かよわい女をいじめ、道にはずれたことを企む者は、すべて盗賊として処断する。」（赤い高粱・p168）

３．「“**作为**”の賓語」と文の述部全体との関連を示すタイプ

このタイプは、「“**作为**”の賓語」（（19）a では“**一种义务**”「義務」、(19) b では“**原则**”「原則」、(19) c では“**特例**”「特例」）と述部全体（(19) a では“**参加了那次考试**”「その試験を受けた」、(19) b では“**不同意撤军**”「軍隊の撤退に同意しない」、(19) a では“**收下了这份礼物**”「この贈り物を受け取った」）との関連」を示し、この場合、「“**作为**”の賓語」は、述部の一部ではなく、その全体にかかる。また、(19) a′、(19) b′、(19) c′が示すように、「述部全体を“**作为**”の賓語とする」というふうに理解可能である。このタイプの“**作为**”の賓語になる語は、主として“**义务**”「義務」“**原则**”「原則」“**方法**”「方法」“**本领**”「腕」“**惩罚**”「罰」“**补偿**”「報償」“**例子**”「例」など、「方式･手段」を表す語である。

（１９）a　“**作为一种义务，他参加了那次考试。**”（=（8）a）

「彼は義務として、その試験を受けた。」

a′　“**他把参加那次考试作为一种义务。**”

「彼は、その試験を受けることを義務とする。」

b　“**作为原则,我们不同意撤军。**”（=（8）b）

「原則として、我々は軍隊の撤退に同意しない。」

b′　“**我们把不同意撤军作为原则。**”

「我々は，軍隊の撤退に同意しないことを原則とする。」

c　“**于是，作为特例，统战部收下了这份礼物。**”（=（8）c）

「そこで、特例として、統一戦線部はこの贈り物を受け取った。」

c′ “**统战部把收下了这份礼物作为特例。**”

「統一戦線部は、この贈り物を受け取ったことを特例とする。」

４・１・２・２　連体修飾語になる“**作为**”について

（２０）“**作为一个来自农村的大学生的我（我=大学生），对这种浪费粮食的行为**

非常气愤。”（=（9）a）

「農村から来た大学生としての私は、このような食料を浪費する行為に憤りを覚えている。」

（２１）“**免得打击了他作为一个总司令官的威信（威信≠ 司令官）。那样他会认为我们是有意拆他的台。**”（=（10）a）

「彼の総司令官としての威信を傷つけることは、人々に、われわれが故意に彼の足を引っぱっていると思われるかもしれません。」

この場合、“**作为**”は、“**作为…的**”という形で出現しており、(20) が示すように、中心語（被修飾語）が表すもの（“**我**”「私」）は“**作为**”の賓語（“**大学生**”「大学生」）と同じものである（“**我**”=“**大学生**”「私=大学生」）場合もある。また(21)が示すように、中心語（被修飾語）が表すもの（“**威信**”「威信」）は「“**作为**”の賓語」（“**总司令官**”「総司令官」）と同じものでない（“**威信**”≠“**总司令官**”「威信≠総司令官」）場合もある。後者の場合、(22) が示すように、中心

語（被修飾語）が表すものは、“**作为**”の賓語と同じものではないものの、“**作为**”の賓語の広い意味での属性を示している。

（２２）a“ **那时我还会保持着作为女人的魅力。**”（**青春之门**・p256）

「そうすれば、私はまだ女としての魅力が残ってるわ。」
（青春の門・p222）

b“ **他的心蓦地到了作为出版社的条件以外的事情上。**”

（被**玷污的书**・p25）

「それは出版社としての条件以外のことに、ふと気持ちが馳せたからだった。」（塗られた本・p42）

c“ **小山田对这些想像感到不寒而栗。这并不是单纯的胡思乱想，而是作为丈夫的本能的直觉。**”（人性**的证明**・p78）

「小山田は、その想像に慄然となった。単なる妄想ではなかった。それは夫としての本能的な直感である。」（人間の証明・p88）

d“ **而且，从事件发生之初，它作为在这种社会形势下产生的一种犯罪事件的色彩，是十分浓重的。**”（暗**潮**・p111）

「そうした社会情勢の生んだ一つの犯罪事件としての色彩は、事件発生の最初から、殆ど一点の疑いをさしはさむ余地のないほど色濃いものであった。」（黯い潮・p75）

４・１・２・３　主語の役割を果たす“**作为**”について

文において、実際に主語の役割を果たす“**作为**”について、本稿筆者は以下の条件を必要とすると考える。条件が揃わないと、文は成立しなくなる。また、

以下の各用例が示すように、中国語の“**作为**”は、実際に主語の役割を果たす場合、“**作为…来说**”の形がよく使用され、日本語の「として」ではなく、「としては」に対応する。

1．主体の義務を示す場合。この場合、“**必须**”（「～シナケレバナラナイ」）“**应该**”（「～スベキダ」）“**要**”（「～必要ガアル」）などの助動詞[20]を述語動詞の前に置かなければならない。

（２３）a　“**作为我来说，必须去。**”

「私としては、行かなければならない。」
＊「私として、行かなければならない。」

a′＊“**作为我来说，去。**”

b　“**作为我们公司来说，应该那样决定。**”

「我が社としては、あのように決定すべきである。」
＊「我が社として、あのように決定すべきである。」

b′＊“**作为我们公司来说，那样决定。**”

c　“**作为他来说，要回国。**”

「彼としては、帰国する必要がある。」
＊「彼として、帰国する必要がある。」

c′＊“**作为他来说，回国。**”

---

20 「助動詞」について、胡裕樹編（1981）では“‘**助动词**’。**第一组：能、能够、可能、可以、可、会；第二组：应该、该、应当、要、敢、肯。第一组表示可能之类的意思，第二组表示应该、愿意之类的意思。**”「“**助动词**”。第一組：“**能、能够、可能、可以、可、会**”などあり、第二組：“**应该、该、应当、要、敢、肯**”などがある。第一組は「～が可能である」のような意味を表し、第二組は「～すべきだ」「～したい」のような意味を表す。」（p302）と説明されている。

２．主体の能力を示す場合。この場合、“**只有**”“**只能**”（「～シカデキナイ」）“**只得**”（「～スルホカハナイ」）などのことばを述語動詞の前に置かなければならない。

（２４）a　“**作为我来说，只有（○只能）这样决定。**”

「私としては、このように決定するしかない。」
＊「私として、このように決定するしかない。」

a′＊“**作为我来说，这样决定。**”

b　“**作为他来说，只得投降。**”

「彼としては、降参するほかはない。」
＊「彼として、降参するほかはない。」

b′＊“**作为他来说，投降。**”

３．主体の願望を示す場合。この場合、“**愿意**”“**希望**”（「～シタイ」）などのことばを述語動詞の前に置かなければならない。

（２５）a　“**作为我来说，愿意这样说。**”

「私としては、このように話したい。」
＊「私として、このように話したい。」

a′＊“**作为我来说，这样说。**”

b　“**作为他来说，希望留学。**”

「彼としては、留学に行きたい。」
＊「彼として、留学に行きたい。」

b′＊“**作为他来说，留学。**”

４．理由を説明・確認する場合。この場合、“**是…的**”（「…ノダ」）などのことばをよく使用する。

（２６） a　“**作为我来说，是这样说的。**”

「私としては、このように話したのだ。」

＊「私として、このように話したのだ。」

a′ ＊“**作为我来说，这样说。**”

４・２　「として」についての意味・用法と用法の分類

４・２・１　「として」についての意味・用法

先行研究において、「として」は、

〈1〉「資格・立場」を表す

〈2〉「最小限の数量+として…ない」という形で量が少ないことを表す

というような形で記述されるのが普通である。この２分類は基本的に正しいと思われるが、それぞれの内部の詳細な記述が足りない。

４・２・１・１　「全然…ない」という意味を表す「として」について

〈2〉の用法について、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) は(27)のような用例を挙げ、

（２７）a 戦争が始まって以来、一日として心の休まる日はない。

b 期末試験では、一人として満足のいく答案を書いた学生はなかった。

c 高級品ばかりで、一つとして私が買えそうな品物は見当たらない。

d 誰一人として、私の発言を支持してくれる人はいなかった。

「「一日」「一時（いっとき)」「（だれ）一人」「（なに）一つ」などの最小限の量を表す「一」の付く語を受け、後に述語の否定形を伴って「全然…ない」という意味を表す。」(p338) と説明している。

このタイプの「として」は、構文上にも意味上にも「資格･立場」を表す「と

して」と異なり、また（28）が示すように、それに対応する中国語が通常「“一…也…”または“一…都…”+述語の否定形」となる。

（２８）「手紙の類も、写真も、一枚として見つからない。」
（イブが死んだ夜・ｐ24）

“信一类和照片一张也没有找到。”（世家迷雾・p16）

４・２・１・２　「資格・立場」を表す「として」について

〈１〉の用法については、3･1 で述べたように「「資格・立場」を表す」とされるのが普通である。この用法において、先行研究はこれ以上の内部分類を行っていない。「資格」と「立場」というように二つに分けているように理解することは表面上不可能ではないかもしれないが、用例の提示の仕方などから見て、両者が明確に区別されているようには見えないし、実際両者を分ける文法上の根拠も示されていない。本稿筆者が見ても、両者を区別すべき文法上の根拠は現在のところ見出しがたい。

本稿筆者は、〈１〉の用法において、これまで主張されていない別の観点から、区別されるべき三つの用法があることを主張する。その詳細は、次節で詳しく論じる。

４・２・２　「として」の用法分類

「として」の用法分類については、本稿筆者が先行研究を土台に、用例調査を行った上で、「として」を以下のように分類した。

Ａ．単なる「資格・立場」を表す「として」タイプ。
Ｂ．「判断主体化された立場」を表す「としては」タイプ。
Ｃ．「平均値をもつものの集合」を表す「としては」タイプ。

以下、4･2･2･1 はＡタイプを、4･2･2･2 はＢタイプを、4･2･2･3 はＣタイプを、という順に説明していく。

４・２・２・１　単なる「資格・立場」を表す「として」タイプ

単なる「資格・立場」を表す「として」の用法分類については、本稿筆者が先行研究を土台に、用例調査を行った。その結果、構文上「として」（として＋それに先行する名詞）をどのように位置付けるかについて、本稿筆者は、以下の３種類に分けられると考える。

１．「～として」と主語との関連を示すタイプ

ここでいう主語とは、5. における「主体ガ格」「対象ガ格」「経験者ガ格」「所有ニ格」「経験者ニ格」を含む。

このタイプは、「主語（(29) a では「彼」、(29) b では「井村重久」、(29) c では「国鉄」、(29) d では「それ（ホテル)」、(29) e では「博士」）と、「として」に先行する名詞（(29) a では「父親」、(29) b では「主流派」、(29) c では「交通機関」、(29) d では「ホテル」、(29) e では「植物学者」）との関連」を示し、いわば「主語が「として」に先行する名詞である」（(29) a で言えば「彼が父親である」、(29) b で言えば「井村重久が主流派である」、(29) c で言えば「国鉄が交通機関である」、(29) d で言えば「それがホテルである」、(29) e で言えば「博士が植物学者である」）というふうに理解可能である。

また、(29) f が示すように、「として」はその先行する名詞と主語との関連を、「主語が「として」に先行する名詞のように」（～が～のように）というふうに示すことが出来ない。(29) f′ が示すように、日本語の「として」は中国語の“**作为**”が示す「～が～のように」の意味には対応しない。

（２９）a「たとえ血の繋がりはなくても、このさい父親としてあくまで責任を取らなければならないと、彼は決意を固めたようである。」
(Wの悲劇・p54)

“**虽然他和这个家庭没有血缘关系，但是他也认为他作为父亲必须承担这个责任。**”(W的**悲剧**・p64)

b「Ｒ銀行の井村重久は、金融界でも近ごろめきめきと頭角を現わし、財界の団体の中でも、現在の長老級に代って、次の世代の主流派として、よく新聞や雑誌に名前が出ている。」(塗られた本・p84)

“ **Ｒ银行行长井村重久近来在金融界益发引人注目，在财团中，他的名**

字取代现在的长老级人物，作为下一代的主流派，经常见诸于报纸、杂志。”(被玷污的书・p55)

c「国鉄は、交通機関として、社会からスピードの向上を要求される。」（夜行列車殺人事件・p164）

“国营铁路作为交通机关，社会要求它提高速度。”

（凌晨三点钟的罪恶・p111）

d「刑事がおもむくと、それは一年ほど前にオープンしたビジネスホテルで、機能本位の設備がうけて、現代に即応するホテルとして繁盛している。」（人間の証明・p12）

“警察赶到那里一看，那原来是一家大约在一年以前才开业的商业饭店。它的设施功能完备，颇受欢迎。作为一家适应现代潮流的饭店，其生意十分兴隆。”（人性的证明・p7）

e「博士は、植物学者として、犯人に怒りを覚えた様子だった。」（野性の証明・p229）

“作为一个植物学家，博士对罪犯充满了愤怒。”（野性的证明・p172）

f “爱情作为陷井真不知陷害过多少弱女子或女强人。”

f′ ＊「愛情が落し穴としていったいどのくらいの弱い女性または女丈夫を陥れたか分からない。」

f″「愛情が落し穴のようにいったいどのくらいの弱い女性または女丈夫を陥れたか分からない。」

２．「～として」と目的語との関連を示すタイプ

ここでいう目的語は、主として 5．における「対象ヲ格」を指す。

このタイプは、「目的語（(30) a では「この帽子」、(30) b では「中河」、(30) c では「この遺骨」、(30) d では「外出しただけ」、(30) e では「若い新人作家の作品」）と「として」に先行する名詞（(30) a では「日本の母の形見」、(30) b では「殺人容疑者」、(30) c では「無縁仏」、(30) d では「秘密事項」、(30)

e では「前衛文学シリーズ」）との関連」を示し、いわば「目的語を「として」に先行する名詞とする」（(30) a で言えば「この帽子を日本の母の形見とする」、（30）b では「中河を殺人容疑者とする」、（30）c では「この遺骨を無縁仏とする」、（30）d では「外出しただけを秘密事項とする」、（30）e では「若い新人作家の作品を前衛文学シリーズとする」）というふうに理解可能である。

（３０）a「彼はこの帽子を日本の母の形見として二十数年間、大切にとっておいた。」（人間の証明・p433）

“他将这草帽作为日本母亲的离别留念，一直细心地保存了二十多年。”

（人性的证明・p357）

b「これで、今、中河を逮捕すれば、殺人容疑者として拘留することも、起訴することも可能になった。」（夜行列車殺人事件・p275）

“所以现在逮捕中河的话，作为杀人嫌疑犯拘留和起诉都是可以的了。”

（凌晨三点钟的罪恶・p193）

c「それでは、この遺骨を、無縁仏として処理していいのかね？」（イブが死んだ夜・p78）

“那么，这骨灰就可以作为无人祭祀的野鬼来处理了？”

（世家迷雾・p57）

d「道夫は、枝村幸子を殺したとは決して彼女に打明けていなかったし、金融業者のところに、ほんのちょっと「外出」した（こと）だけを秘密事項として洩らしただけであった。」（夜光の階段・p318）

“道夫绝没把杀害枝村幸子的事告诉她，只是把去金融业者那儿的事作为保密事项向她透漏了一点儿。”（女人阶梯・p453）

e「これまで、若い新人作家の作品を前衛文学シリーズとして四、五点つづけて出すつもりだったが、二冊目で完全に潰れた。」（塗られた本・p71）

“以前曾作为前卫文学系列，出版四五本年轻的新人作家的作品，可是

到第二本就彻底不行了。”（被玷污的书・p46）

３．「～として」と述部や文などとの関連を示すタイプ

このタイプは、「「として」に先行する名詞（(31) a では「防犯対策の一環」、(31) b では「その直後の心理」、(31) c では「急場の医療行政」、(31) d では「考えられる可能性」）と、述部（(31) a では「公園のアベックに早い時間の帰宅を呼びかけた」、(31) b では「被害者の婚約者に済まぬという気持ちが起り、自己が犯人ということは隠して、とにかく幸子が死んだという事態だけを報せる気になった」、(31) c では「月一、二回巡回する」、(31) d では「長井頼子が下校途中仲間と別れてどこかへ行ったかあるいは犯人が彼女だけを連れて去った」）との関連」を示し、この場合、「「として」に先行する名詞は、述部の一部ではなく、その全体にかかる。また、(31) a′、(31) b′、(31) c′と (31) d′が示すように、「述部全体を「として」に先行する名詞とする」というふうに理解可能である。このタイプの「として」に先行する名詞になるのは、主として「義務」「原則」「方法」「腕」「罰」「報償」「例」など「方式・手段」を表す語である。また、(33) が示すように、「仕事」「行政」など「方式・手段」を表さない語が使用される場合もある。

ここで注目に値するのは、このタイプの一部の用法は、中国語の“作为”に対応しないことである。

(31) と (32) が示すように、「方式・手段」を表す語は、“作为”と共起する場合（「一環、心理、可能性」など）もあるし、“作为”とは共起しにくい場合（「はけ口、直感」）もある。(33) が示すように、「仕事」「行政」などの、「方式・手段」を明確に表さない語になると、「として」とは共起するが、“作为”とは共起しない。

（３１）a「これは警察が防犯対策の一環として、公園のアベックに早い時間の帰宅を呼びかけたらしい。」（人間の証明・p28）

“ 作为防止犯罪而采取的措置之一，警方要求公园里的情侣们趁早回到

家里去。”（人性的证明・p21）

a′　「「公園のアベックに早い時間の帰宅を呼びかけること」を防犯対策の一環とする。」

b「すなわち、被告は激情に駆られて枝村幸子を殺害したが、その直後の心理として、被害者の婚約者に済まぬという気持ちが起り、自己が犯人ということは隠して、とにかく幸子が死んだという事態だけを報せる気になったのであろう。」（夜光の階段・p223）

“ 这就是说，被告一时冲动杀死了枝村幸子，作为事后的心理，他感到对不起被害人的未婚夫，于是想隐瞒自己是凶手这一点，只把幸子死了的消息告诉他。”（女人的阶梯・p392）

b′　「「被害者の婚約者に済まぬという気持ちが起り、自己が犯人ということは隠して、とにかく幸子が死んだという事態だけを報せる気になった」ことを、（被告の）その直後の心理とする。」

c「急場の医療行政として、月一、二回巡回する保健婦が事件を発見したわけであった。」（=（2）c）

“ 作为应急的医疗（行政的「行政の」）措施，女保健员每月去风道屯巡回医疗一两次，所以这个事件就被她发现了。”

c′　「「月一、二回巡回すること」を急場の医療行政とする。」

d「考えられる可能性として、長井頼子が下校途中仲間と別れてどこかへ行ったか、あるいは犯人が彼女だけを連れて去った場合がある。」（野性の証明・p25）

“ 作为一种假设，也许是赖子在放学回家的路上与伙伴们分手，到别的地方去了，或者凶手单单把她拐走了。”（野性的证明・p17）

d′　「「長井頼子が下校途中仲間と別れてどこかへ行ったかあるいは犯人が彼女だけを連れて去った」ことを、考えられる可能性とする。」

（３２）a「雨の降り続いた夜、窯を冷ましている間のやりきれない焦慮のはけ

口として、私は狩猟を思い浮かべた。」（Mの悲劇・p406）

a′ ??“ 在下雨的晚上，在等待窑冷却的焦躁之时，作为排遣，我想起了狩猎，……”

a″“ 在下雨的晚上，在等待窑冷却的焦躁之时，为了排遣，我想起了狩猎，……”（M的悲剧・p287）

b「今度は添田が考える番だった。彼の直感として、村尾芳生は問田書記生から野上一等書記官の最後を聞いていない。」（=(5)b）

b′ ??“ 这一下轮到添田陷入沉思了。作为他的直觉，村尾芳生没有听到门田庶务汇报野上一秘的临终情况。”

b″ “这一下轮到添田陷入沉思了。凭他的直觉，村尾芳生没有听到门田庶务汇报野上一秘的临终情况。”

（３３）a「手を引くもなにも、私は仕事としてやっているだけだ。」（野性の証明・p159）

a′ ??“ 撒手不撒手，我这是作为工作来干。”

a″“ 撒手不撒手，这是我份内的工作。”（野性的证明・p169）

b「急場の医療行政として、月一、二回巡回する保健婦が事件を発見したわけであった。」

b′ ??“ 作为应急的医疗行政，女保健员每月去风道屯巡回医疗一两次，所以这个事件就被她发现了。”

b″“ 作为应急的医疗（行政的「行政の」）措施，女保健员每月去风道屯巡回医疗一两次，所以这个事件就被她发现了。”

４・２・２・２「判断主体化された立場」を表す「としては」タイプについて

文において、実際に「判断主体化された立場」を表す「としては」について、本稿筆者は以下の条件を必要とすると考える。また、以下の各用例が示すように、その場合、「としては」は中国語の“**作为**”ではなく、“**作为…来说**”に対応する。

１．主体の義務を示す場合。「～ナケレバナラナイ形」、「～ワケニハイカナイ形」などを使用する。

（３４）a「今西としては、何とか行ってもらわなければならない。」（砂の器・p335）

“**作为今西来说，无论多么困难也得走过去。**”（砂器・p350）

b「会社としては当然、優秀な技術者を失った損失を少しでもカバーしなければならない。」（Ｃの・p143）

“**作为公司来说，当然是希望失去了一名优秀的研究人员后把损失压缩到最小的程度。**”（Ｃ的悲剧・p118）

c「わたしとしては、その計画に賛成してやらなければなりませんでした……」（新潮・孤高の人）

“ **作为我来说，必须赞成那个计划。**”

d「アメリカの世論は、欧洲への参戦を好まず、議会には孤立主義の傾向が強かったが、ルーズベルト大統領としては、ヒットラーの勝利と狂態とを、あのまま座視するわけには行かなかったであろう。」（新潮・山本五十六）

“**美国的舆论不喜欢去欧州参战，在国会里孤立主义倾向占上风，但是作为罗斯福总统来说，不能对希特勒的胜利和狂态视而不管。**”

２．主体の能力を示す場合。「可能表現（～デキナイ形・～カネナイ形)」、「選択（～シカナイ形・～ホカナイ形)」を使用する。

（３５）a「われわれとしては、ご主人の帰国を待ってはいられないのです。」
（イブが死んだ夜・p242）

“作为我们来说，不能等您丈夫回国。”（世家迷雾・p177）

b「色々と問題はあったが自分としては出来るだけの努力をした。」
（新潮・山本五十六）

“存在着许多问题，但是作为自己来说，是尽了最大努力。”

c「当方としては責任を負いかねるからであります。」

“作为我方来说，难以负责。”

d「高男としてはいかんを繰り返しているよりほかに言葉はなかった。
（射程（原）・p333）

“ 作为高男来说，除了反复说“ 糟了” 以外再没有别的话了。”

（射程（訳)·p380）

３．願望を示す場合。「～タイ形」、「～ツモリダ形」などを使用する。

（３６）a「遺族としましては、できるかぎり捜査に協力したいのですが、非力のためにお役に立たないのを、残念に思っております。」
（砂の器・p155）

“ 作为遗族，理应竭尽全力协助破案，但是因为能力有限，起不到什么作用，对此我感到十分遗憾。”（砂器·p318）

b「われわれとしては、三木さんが警察官でもあったし、ぜひ、この犯人をあげたいと思っているしだいです。」（砂の器・p155）

“ 作为我们来说，三木是位警察，我们一定要抓到犯人。”

（砂器・p157）

c「また、捜査にたずさわるわれわれとしては、どのような手を尽くし

てでも犯人を捕まえずにはおきません。絶対に迷宮入りにはさせないつもりであります。」（砂の器・p305）

“ 作为我们具体办案人员，绝不会对此案束手无策，更不会被罪犯引入迷宫的。”（砂器・p317）

４．主体の立場を示し、時には対比のニュアンスをほのめかす場合。

（３７）a「だが信夫としては、峰吉に恩義を感じていた。」（新潮・塩狩峠）

“但信夫对峰吉感恩。”

＊“但作为信夫来说，对峰吉感恩。”

“但作为信夫来说，对峰吉是感恩的。”

b「だから業者としては、一応田中にも見せたものの、国分寺のテラスハウスをそれとなく勧めた。」（Ｃの悲劇・p132）

“经营者暗示田中租国分寺的公寓。”（Ｃ的悲剧・p108）

＊“作为经营者来说，暗示田中租国分寺的公寓。”

“作为经营者来说，是暗示田中租国分寺的公寓的。”

c「組合としては人員不足による現在の労働強化に対し、ベアでそれと闘っている。」（＝（16））

“工会对由人员不足带来的现阶段的劳动强化，以要求提高基本工资的方式进行斗争。”

＊“作为工会来说，对由人员不足带来的现阶段的劳动强化，以要求提高基本工资的方式进行斗争。”

“作为工会来说，对由人员不足带来的现阶段的劳动强化，是以要求提高基本工资的方式进行斗争的。”

この場合、「としては」は「主体の立場」を強調している。(37) a をもう少し詳しく分析すると、「暗に峰吉を非難するものもいた。信夫自身も、人の物を盗むなどということは、許しがたいことに思われた。」（新潮・塩狩峠）というような背景があったので、「だが信夫としては、峰吉に恩義を感じていた。」という「としては」で「主体である信夫の立場」を強調する文は、坐りがよくなる。(37) b も同様である。「不動産屋の話で、田中がほとんど迷うことなく、今の家に決めた様子がわかった。実は今の家には、新婚夫婦の先客があり、およその口約束もできていたのだが、契約書や手付金までは取り交わしていなかった。」（Cの悲劇）というような背景があったので、「だから業者としては、一応田中にも見せたものの、国分寺のテラスハウスをそれとなく勧めた。」という「としては」で「主体である不動産屋の立場」を強調する文は、自然になる。

一方、“作为…来说”の方は、“是…的”（「…ノダ」）などのような主体の立場を説明することばを入れないと、文は成立しない。

５. 事情を確認･説明する場合。「～ワケダ形」、「～ノダ形」などを使用する。

（３８）a「こちらとしては、本人が社長さんの知人だと言っているので、その確認をしたわけです。」（棲息分布・p266）

“作为我们，因本人说是经理的朋友，所以要核实一下。”（孤狼・p351）

b「私としては養子でございますし、親父の苦労を知っていますので、その旅立ちを積極的にすすめたわけであります。」（砂の器・p109）

“作为养子，我非常了解父亲的辛苦，所以积极地劝他去旅行。”

（砂器・p111）

c「私としては、もう事は済んだと思っていたから、そのことは考えずに、ここに来たのだった。」（新潮・山本五十六）

“作为我来说，因为觉得事情已经结束，所以是没有考虑那件事而来到

这里的。”

４・２・２・３　「平均値をもつものの集合」を表すタイプについて

（３９）a「100 キロの体重は普通の男性だったらずいぶん重いと思うが、相撲取りとしてはむしろ軽い方である。」[21)]

“一百公斤的体重，如果是普通的男性，则会被认为非常重。但是，作为相扑运动员来说,不如说是轻的。”

b「学生数 2000 人というのは大学としてはかなり規模が小さい。」

“两千学生，作为大学来说规模相当小。”

グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) では、このタイプを「平均値とのずれ」と称しているが、先述のように「「～としては」に先行する名詞」((39) a で言えば、「相撲取り」、(39) b で言えば、「大学」) は「平均値」という概念を示しているというより、「相撲取り」、「大学」という「集合・カテゴリー」を表しているといった方が適切である。いわば、このタイプの「としては」は、「ある「集合・カテゴリー」の立場から言えば」というような意味を示している。また、単なる「資格・立場」を表す「として」や、「判断主体化された立場」を表す「としては」と異なり、文の目的語や述部と関連することなく、文の主体と、「～としてはに先行する名詞」が表す「集合・カテゴリー」との関連を示している。

４・２・３　「として」と「としては」

本章は、以上論じてきた理由に基づき、「として」を

Ａ．単なる「資格・立場」を表す「として」タイプ。
Ｂ．「判断主体化された立場」を表す「としては」タイプ。
Ｃ．「平均値をもつものの集合」を表す「としては」タイプ。

---

[21] (40) a と b は、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』から引用された用例である。

のように、３分類した。しかし、それはあくまでも「資格・立場」を表す「として」の基本用法〈１〉の内部での用法分類で、「立場を表す」という基本点については三つの用法は共通しており、「最小限の数量+として…ない」という形で量が少ないことを表す「として」の基本用法〈２〉と対立する形で三者が一グループをなすということは認めてよいと考える。

５.“作为”と「として」との対応

本章では、“作为”（“作为…来说”を含む）と「として」（「としては」を含む）との、各用法を説明し、両者の対応関係を比較・分析した。

その結果、次のような対応関係があることが分かった。

Ａ.“作为”と「として」とは、以下の用法において、ほぼ対応している。

a 状況語（連用修飾語）になる用法。
b「主体」の機能を果たす用法。
c 連体修飾語になる用法。
d「平均値をもつものの集合」を表す用法。

Ｂ．状況語（連用修飾語）になる場合、構文上において、“作为”と「として」両者とも以下三つのタイプに分けられる。

１．文の主語との関連を示すタイプ
２．文の目的語との関連を示すタイプ
３．文の述部全体との関連を示すタイプ

ただし、文の主語との関連において、“作为”は、その賓語と主語との関連を、「主語が“作为”の賓語のように」（「～が～のように」）というふうに示す場合もある。それに対して、「として」は、「としてに先行する名詞」と主語との

関連について、「～が～のように」という意味を示すことは出来ない。

また、文の述部や文との関連において、「として」の一部の用法には中国語の“作为”は対応しない。結論としては、「方式・手段」を表す語は、“作为”と共起する場合もあるし、“作为”とは共起しにくい場合もある。「方式・手段」を明確に表さない語になると、「として」とは共起するが、“作为”とは共起しない。

C.“作为”と「として」が名詞句（が表すもの）の資格・立場を表す場合、どのようなものの資格を表し得るのかについて、両者はほぼ対応している。

それについて、馬（1997b）は、「として」が名詞句（が表すもの）の資格・立場を表す場合、どのようなものの資格を表し得るのかについてまとめた。それを中国語の“作为”と比較すると、以下のようになる。

「ガ格」の場合

①「主体ガ格」の場合

「斎藤は巨投の柱としてチームを引っ張ってきた。」

“斎藤作为巨人队的主力投手带动整个球队。”

②「対象ガ格」[22] の場合

「容疑者として彼の名前が浮かんだ。」

“他的名字作为嫌疑人浮出水面。”

③「経験者ガ格」[23] [24] の場合

---

[22]「対象ガ格」について、益岡（1987）では、「…対象は、他の意味役割が表す意味的な関係以外の関係を広く表すことが出きる。…対象を担う項の例には、(30) のヲ格や、(31)、(32) のガある 。
(30) 太郎が本を読んだ。
(31) 車が止まった。
(32) 花子は音楽が好きだ。」(p107～p108) と、説明されている。

[23]「経験者ガ格」について、益岡（1987）では「「経験者」とは、「感覚・感情等の精神活動・状態を経験する存在」である。次に挙げる文のガ格等がその例である。
(19)太郎がその話しにおどろいた。

「私は議長としてその問題の対応に悩んでいる。」

“ 我作为主席对那个问题的处理感到困惑。”

「ヲ格」の場合

④「対象ヲ格」の場合

「彼女を後任者として選んだ。」

“ 把她作为后任选出来了。”

⑤「通過点ヲ格」の場合

(?)「公園を単なる通過点として歩く。」

*“ 把公园作为单纯的经过点走过。”

「ニ格」の場合

⑥「存在場所ニ格」の場合

(?)「軽井沢に避暑地として滞在した。」

*“ 作为避暑地停留在轻井泽。”

⑦「着点ニ格」の場合

*「202 号室に大会本部として連絡した。」

*“ 作为大会总部同 202 号室联系了。”

⑧「相手ニ格」の場合

?「刑事は状況提供者として彼に会った。」

*“ 刑警作为情况提供人见了他。”

⑨「所有ニ格」[25] の場合

「私には、会長として権力が有る。」

“ 我作为会长有权。”

⑩「経験者ニ格」[26] の場合

「私には親友として彼の考えていることが分かった。」

“ 我作为好朋友了解他在想什么。”

---

(20)花子が挫折感を味わった。」(p106) と説明されている。

[24]注 22、23 の「対象ガ格」と「経験者ガ格」は、中国語では通常主語と見なされている。

[25]「所有ニ格」は、中国語では主語となる。

「ト格」の場合

⑪　?「刑事は状況提供者として彼と会った。」

*“ 刑警作为情况提供人见了他。”

「へ格」の場合

⑫*「富士山へ目標として登る。」

*“ 作为目标一直登向富士山。”

「カラ格」の場合

⑬ a「代表として私から話してみよう。」

“ 作为代表由我试着说。”

*b「駅からスタート地点として走り出した。」[27]

*“ 作为出发点从车站跑出去。”

「マデ格」の場合

⑭? 「富士山まで目標として登る。」

*“ 作为目标一直登上富士山。”

「以上各例が示すように、「として」は、名詞句（格成分）の資格・立場を表す場合、「ガ格・ヲ格・経験者ニ格・所有者ニ格」成分の資格を表し得る。一方、「ト格・へ格・着点ニ格・相手ニ格・カラ格（主体の含意のある場合を除く）・マデ格」成分などの資格は表しにくい」(p25～26)。

中国語の“ 作为”は、「として」にほぼ対応している。具体的に言えば、“ 作为”は「ガ格・ヲ格（通過点ヲ格を除く）・経験者ニ格・所有者ニ格」相当の（中国語の）成分の資格を表し得る。一方、「として」に対応し、また、「ト格・へ格・着点ニ格・相手ニ格・カラ格（主体の含意のある場合を除く）・マデ格」に当たる成分の資格は表すことはできない。

D．連体修飾語となる用法について

[26]「経験者ニ格」は、中国語では主語となる。

[27]⑬が示すように、「カラ格」は主体の含意のある場合（⑬a）を除いて、基本的には「として」と共起しない（⑬b)。

両者は、対応している。中心語（被修飾語）が表すものは“作为”の賓語または「としてに先行する名詞」と同じものである場合もあるし、異なる場合もある。

この用法において、“作为”は、“作为…的”という形で出現しており、「として」は「としての」という形で出現している。中心語（被修飾語）が表すものが“作为”の賓語または「としてに先行する名詞」と同じものである場合は、中心語は、“作为”の賓語または「としてに先行する名詞」に対して主語に復元できる。異なる場合は、中心語は、“作为”の賓語または「としてに先行する名詞」の広い意味での属性を示している。

E.「主体」の機能を果たす用法について、

“作为”の方は、“作为…来说”という形で、「義務・能力・願望・理由」などとしか共起せず、カバーする範囲が比較的狭い。それに対して「として」の方は、「としては」という形で「義務・能力・願望・立場・（事情の）確認」などと共起でき、カバーする範囲が比較的広い。特に「主体の立場を示す「としては」」には、“作为…来说”は“是…的”（「…ノダ」）のような補助条件をつけないと対応しにくい。

F.「平均値をもつものの集合」を表す用法について

両者は、対応している。“作为”の方は、“作为…来说”という形、「として」の方は、「としては」という形を取っている。いわば、この用法の“作为…来说”と「としては」は「ある「集合・カテゴリー」の立場から言えば」というような意味を示している。また、単なる「資格・立場」を表す“作为”と「として」

や、「文の主体（の立場)」を示す“作为…来说”と「としては」と異なり、文の目的語や述部と関連することなく、文の主体と、“作为”の賓語または「～としてはに先行する名詞」が表す「集合・カテゴリー」との関連を示している。

６．まとめ

以上、本章では、主として三つの内容を論じた。それらをまとめると、

６・１　中国語の介詞“作为”の意味と用法

A．状況語（連用修飾語）になり、人間のある身分または事物のある性質を表す。

B．一般的な情況を論じる場合、主語が出現しなくてもよい。または実際に主語の役割を果たす。この場合、“作为…来说”をよく使用する。

C．“作为…的”が連体修飾語となり、中心語（被修飾語）が表すものは“作为”の賓語と同じものである場合もあるし、異なる場合もある。

D．“作为…来说”は文中に置かれ、ある基準に基づき主体を評価する方法もある。この場合、“作为…来说”における“来说”は通常、削除できない。

について、本章は、先行研究の記述に対しまずDを追加した。またCについて、「中心語（被修飾語）が表すものは“作为”の賓語と異なる場合もある」と補充した。さらにAとBの内部の詳細な記述が足りないと考え、具体的に以下の問題点を指摘し、本稿筆者の考えを述べた。

A．“作为”の状況語（連用修飾語）になる用法について

１．文における、「“作为”+賓語」の位置について、文頭に置くかまたは文中に置くかによって、ニュアンスは若干異なるものの、意味としてはほぼ同じである。よって、この二つの場合を文法上二つに分ける必要はないと考える。

２．先行研究では、「“作为”+賓語」と主語との関連を述べる」というタイプに止まり、「“作为”+賓語」と文の目的語との関連を述べる」というタイプについては説明されていない。

３．「“作为”+賓語」は、文の主語または目的語に狭くかかっていくのではなく、文の述部全体にかかる場合もある。

従って、“作为”の状況語（連用修飾語）になる用法について、構文上において、以下の三つに分けられると考える。

１．「“作为”の賓語」と文の主語との関連を示すタイプ

２．「“作为”の賓語」と文の目的語との関連を示すタイプ

３．「“作为”の賓語」と文の述部全体との関連を示すタイプ

Ｂ．“作为”の主体の役割を果たす用法について

１．“作为”は、“作为…来说”という形で文において主体の役割を果たす場合があるが、その成立条件について、先行研究では説明されていない。
それについて、本稿筆者は以下の条件を必要とすると考える。

ａ．主体の義務を示す場合、“必须”（「～シナケレバナラナイ」）“应该”（「～

スベキダ」)“**要**”（「～必要ガアル」）などの助動詞を述語動詞の前に置かなければならない。

b．主体の能力を示す場合、“**只有**”“**只能**”（「～シカデキナイ」)“**只得**”(「～スルホカハナイ」）などのことばを述語動詞の前に置かなければならない。

c．主体の願望を示す場合、“**愿意**”“**希望**”（「～シタイ」）などのことばを述語動詞の前に置かなければならない。

d．理由を説明する場合、“**是…的**”（「…ノダ」）などのことばを使用しなければならない。

２.“**作为…来说**”は文中に置かれ、ある基準に基づき主体を評価する機能もある。この点についても、先行研究では説明されていない。

本稿筆者は、その点を指摘し、且つその場合、“**作为…来说**”は、日本語の「として」ではなく、「平均値をもつものの集合」を表す「としては」に対応することも指摘した。

６・２　日本語の複合格助詞「として」の意味と用法について

日本語の複合格助詞「として」は、
〈１〉「資格・立場」を表す
〈２〉「最小限の数量+として…ない」という形で量が少ないことを表す
のような二つの用法がある。本稿筆者は、〈１〉の「資格・立場」を表す用法について、単なる「資格・立場」を表す「として」のほかに、「判断主体化された立場」を表す「としては」の用法と、「平均値をもつものの集合」を表す「としては」の用法が存在することを主張した。
具体的に

Ａ．単なる「資格・立場」を表す「として」タイプ
Ｂ．「判断主体化された立場」を表す「としては」タイプ
Ｃ．「平均値をもつものの集合」を表す「としては」タイプ

のように分類した。

A．単なる「として」の意味と用法について

単なる「資格・立場」を表す「として」について、先行研究は「として」の意味を一般的に説明するのに止まり、その具体的な用法、特に構文上において「～として」（として＋それに先行する名詞）をどのように位置付ければよいかなどについては充分に分類・説明していない。

それに対し、本章は、構文上において、単なる「資格・立場」を表す「として」を以下の三つに分けた。

１．「としてに先行する名詞」と文の主語との関連を示すタイプ
２．「としてに先行する名詞」と文の目的語との関連を示すタイプ
３．「としてに先行する名詞」と述部や文との関連を示すタイプ

B．「判断主体化された立場」を表す「としては」タイプについて

先行研究では、「判断主体化された立場」を表す「としては」の用法が存在することを主張しているものの、その詳細、特に成立条件と制限などの特徴については、まだ充分に説明していない。

それに対して、本章は、以下のようにまとめた。

文において、実際に「判断主体化された立場」を表す「としては」について以下 a～ f のような文の意味タイプを必要条件とすると考える。言い換えれば、「判断主体化された立場」を表す「としては」、以下の諸条件（の一つ）と呼応して使用しないと、「としては」文は成立しない。

ａ. 主体の義務を示す場合。「～ナケレバナラナイ形」、「～ワケニハイカナイ形」を使用する。
ｂ. 主体の能力を示す場合。「可能表現～（デキナイ形・～カネナイ形）」、「選択（～シカナイ形・～ホカナイ形）」を使用する。
ｃ．願望を示す場合、「～タイ形」、「～ツモリダ形」を使用する。
ｄ．主体の立場を示す場合。
ｅ．事情を確認・説明する場合。「～ワケダ形」、「～ノダ形」を使用する。
ｆ．判断・態度を表す場合。「～ノヨウダ形」、「～ニチガイナイ形」、「（一部

の）コピュラ文」を使用する。

C.「平均値をもつものの集合」を表す「としては」タイプについて

先行研究では、このタイプを「平均値とのずれ」と称しているものの、本稿筆者は、このタイプの「～としてはに先行する名詞」は「平均値」という概念を示しているというより、ある「集合・カテゴリー」を表しているといった方が適切であると考える。いわば、このタイプの「としては」「ある「集合・カテゴリー」の立場から言えば」というような意味を示している。また、単なる「資格・立場」を表す「として」や、「判断主体化された立場」を表す「としては」と異なり、文の目的語や述部と関連することなく、文の主体と、「～としてはに先行する名詞」が表す「集合・カテゴリー」との関連を示している。

最後に、「判断主体化された立場」を表す「としては」と、「平均値をもつものの集合」を表す「としては」との関連、さらに「としては」と「として」との関連について、本稿筆者は自分なりの考え方を述べた。

６・３ “作为”と「として」の対応関係について

本章は、“作为”と「として」との対応関係について、以下のことを述べた。

A.“作为”と「として」の両者とも四つの用法がある。

a 状況語（連用修飾語）になる用法。
b 条件が揃えば、「主体」の機能を果たす用法。
c 連体修飾語になる用法。
d「平均値をもつものの集合」を表す用法。

B．状況語（連用修飾語）になる場合、構文上において、“作为”と「として」両者とも以下三つのタイプに分けられる。

１．文の主語との関連を示すタイプ

２．文の目的語との関連を示すタイプ
３．文の述部全体との関連を示すタイプ

Ｃ.“作为”と「として」が名詞句（が表すもの）の資格・立場を表す場合、どのようなものの資格を表し得るのかについて、両者はほぼ対応している。

但し、“作为”は、その賓語と主語との関連を、「主語が“作为”の賓語のように」（「～が～のように」）というふうに示す場合もある。それに対して、「として」は、「としてに先行する名詞」と主語との関連について、「～が～のように」と示すことが出来ない。

また、文の述部全体との関連を示すタイプ、「として」の一部の用法には中国語の“作为”は対応しない。結論としては、「方式・手段」を表す語は、“作为”と共起する場合もあるし、“作为”とは共起しにくい場合もある。「方式・手段」を明確に表さない語になると、「として」とは共起するが、“作为”とは共起しない。

Ｄ．連体修飾語となる用法について、両者は、対応している。

Ｅ.「主体」の機能を果たす用法について、両者は対応しているものの、“作为”の方は“作为…来说”という形を取り、カバーする範囲が比較的狭い。「として」の方は「としては」の形を取り、カバーする範囲が比較的広い。

Ｆ.「平均値をもつものの集合」を表す用法について、両者は、対応している。“作为”の方は、“作为…来说”という形、「として」の方は、「としては」という形を取っている。

第四章

中国語の“ 对+N_1+的+N_2” [1]と
日本語の「N_1+に対する+N_2」[2] について

１．“对”と「に対して」の連体形

中国語では、“对+体”[3] により構成される“介词结构”（「介詞構造」（介詞（“对”）+N）は、“对字短语”（“对”+Nにより構成される“介词（‘对’）句”。以下“对字句”と言う）と称されている。“对字句”の重要な文法機能の一つは、連体修飾語（“对+N+的+N”）を構成することである。それについて、北京大学中文系（1982）では“由‘ 对于’(‘ 对’)构成的介词结构，有时可以修饰名词。”（p168）「“对于”（“对”）で構成される介詞構造は名詞を修飾する時もある」と、呂叔湘編（1980）では“ 对于…’(‘ 对…’)可以加‘ 的’修饰名词或动名词”（p158）「“对于…”（“对…”）は“的”を加えて名詞または動名詞を修飾す

---

[1] 中国語の場合は、“对～的”と“对于～的”との２種類がある。本章が“对于～的”ではなく、“对～的”を扱うのは、“ 凡用‘ 对于’ 的地方,都可以用‘ 对’。”（劉月華他 1983・p175）「およそ“对于”が使われているところはすべて“对”を使うことが出来る」からである。

[2] 本章でいう「～に対する」には「にたいする」・「～に対しての」・「にたいしての」などと表記されたものも含まれる。

[3] ここでいう“ 体”について、劉順（1998）では“‘ 体’ 指体词性成分，尽管有时是谓词，但这些词都已经具有了体词的特点。”（p21）「“ 体”は体詞（名詞・代名詞、数量詞などの総称）の性質を持つ成分を指す。謂詞（動詞・形容詞など）である時もあるが、これらの語は全て体詞の特徴を持つようになっている。」と説明されている。

ることができる」と、侯学超編（1998）では、“**对(对于)+名／动{的+中心语}。介词短语作定语。必须加 的'。**”（p173）「“**对**”（“**对于**”）+名詞または動詞（動名詞）+「“的”+被限定語」。介詞（“**对**”）句は連体修飾語になる場合、被限定語との間に必ず“的”（の）を入れなければならない」と説明されている。

一方、日本語では、「Nに対するN」という形で「～に対して」の連体形を構成する。それについて、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）では、「「それに向けての」「それに関しての」という意を表し、次に続く名詞を修飾する。「その問いに対しての解答」のように、「Nに対してのN」という形が用いられることもある。」（p443）と説明されている。

ちなみに、中国語の介詞“**对**”の意味については、劉月華他（1983）では、“**引进行为动作的对象或关系者。**”（p163）「行為、動作の対象または関係を持つものを導入する」と、日本語の複合格助詞「に対して」の意味については、『日本語教育事典』（1982）では、「動作が向けられる対象や目標を表す」（p395）と、それぞれ説明されている。

以上のように、中国語の“**对**+N+的+N”と、日本語の「Nに対するN」とは、構文上において似ており、意味上においてもかなり対応していると考えられている。本章では、便宜上“**对**+N+的+N”について、“**对**”に後接する「N」をN_1と、“的”に後接する「N」をN_2と称する。「Nに対するN」について、「に対する」に前接する「N」をN_1と、「に対する」に後接する「N」をN_2と称する。

しかし、N_1とN_2との関係において、中国語の“**对**+N_1+的+N_2”と、日本語の「N_1に対するN_2」との、両連体形については、

a　N_1はどのようなN_2を修飾可能なのか
b　N_1とN_2は意味上どのような関連にあるのか
c　中国語の“**对**+N_1+的+N_2”と、日本語の「N_1に対するN_2」との、両連体形がどのように対応しているのか

との3点を論じる必要がある。

本章は、この 3 点を中心に、“対+N_1+的+N_2”と、「N_1に対するN_2」について用例調査を行った上で、次のような順序で上記の諸問題に回答し、中国語の“対+N_1+的+N_2”と、日本語の「N_1に対するN_2」との対応関係をまとめたいと思う。

1）“対+N_1+的+N_2”と、「N_1に対するN_2」に関する、これまでの研究を概観し、その問題点を確認する。
2）N_1はどのようなN_2を修飾可能かを観察する。
3）N_1とN_2は意味上どのように関連しているのかを論じる。
4）中国語の“対+N_1+的+N_2”と、日本語の「N_1に対するN_2」との対応関係をまとめる。

また本章で論じる中国語の“対+N_1+的+N_2”における“的”に後接するN_2と、日本語の「N_1に対するN_2」における「に対する」が前接するN_2には、名詞のみならず、動詞から派生した動名詞、形容詞[4] から派生した形容詞の名詞形も含まれている。

2．“対+N_1+的+N_2”についての先行研究と問題点

2・1　“対+N_1+的+N_2”の用法分類

中国語の“対+N_1+的+N_2”のタイプについて、“的”に後接するN（N_2）の性質（品詞）により用法分類されている。それに関する、徐浩良・陳炯（1985）、劉順（1998）などの先行研究をまとめると、以下のようになる。

A．“対+N+的+V”[5]

[4]ここで「形容詞」と称するものは、いわゆる「形容動詞」を含む、広義の形容詞である。
[5] ここで言う「V」とは、動名詞を指す。

（1）a“**对美国的评价**”「アメリカに対する評価」

b“**对敌人的炮击**”「敵に対する砲撃」

c“**对现实的批判**”「現実に対する批判」

d“**对场面的刻画**”「場面に対する描写」

B．“**对**+N_1+的+N_2”[6)]

（2）a“**对客人的态度**”「客に対する態度」

b“**对群众的意见**”「大衆に対する意見」

c“**对文物的兴趣**”「文物に対する興味」

d“**对家庭的观点**”「家庭に対する見方」

C．“**对**+N+的+A”[7)]

（3）a“**对前途的绝望**”「前途に対する絶望」

b“**对范佩莉的任性**”「范佩莉のわがままに対し」

c“**对统治者的残酷**”「統治者の残酷さに対し」[8)]

d“**对生活的敏感**”「生活に対する敏感さ」

---

[6] ここで言う“**对**+N_1+的+N_2”における「N_2」は、本章で言う「N_2」に含まれる「名詞」だけに相当する。

[7] ここで言う「A」とは、名詞の性質を備えた形容詞を指す。

上記ＡＢＣの三タイプそれぞれの特徴について、劉順（1998）は、以下のように論じている。

タイプＡの“**对**+N+的+V”について、劉順（1998）は、“**根据Ｖ是及物动词（V_j）还是不及物动词（V_b），又可分为两个次类,即：对+N的+V_j；对+N+的+V_{bo}**”「動詞が他動詞か自動詞かにより、さらに二つのタイプに分けられる。即ち、“**对**+N+的+V_j”タイプと、“**对**+N+的+V_b”タイプである」と説明している。

“**对**+N+的+V_j”について、(4) と (5) のような用例を挙げ、

（４）a“**对他的采访**”「彼に対するインタビュー」

b“**对沈先生的误解**”「沈先生に対する誤解」

c“**对小王的影响**”「王さんに対する影響」

d“**对他的同情**”「彼に対する同情」

（５）a“**对小说的评价**”「小説に対する評価」

b“**对人生的思索**”「人生に対する思索」

c“**对现实的批判**”「現実に対する批判」

d“**对场面的刻画**”「場面に対する描写」

(4) において、(6) が示すように、(6) a の“**对**／N+的+V_j”（“**对**／**沈先**

[8] (3) b と c について、後にふれる。

生的误解”「沈先生の誤解に対して」）と、(6)b の“**对**+N+的／V_j”（“**对沈先生的／误解**”「沈先生に対する誤解」）のような、二様の意味がとれる甲タイプと、また (5) において、(7) [9] が示すように、((7) a の“**对**+N+的／V_j” “**对现实的／批判**”「現実に対する批判」と、(7)b の“*对／N+的+V_j”“*对／现实的批判”「*現実の批判に対して」）そのような二様の意味にはとれない乙タイプがあると説明している。

（６）a“**对沈先生的误解，王利表现得很大度。**”

「沈先生の誤解に対して、王利は寛大な態度を取っている。」

b“**当时，社会上对沈先生的误解很深。**”

「当時、世の中では沈先生に対する誤解がいろいろあった。」

（７）a“**通过对现实的批判，使他更理解社会了。**”

「現実に対する批判を通じて、社会をより深く理解するようになった。」

b*“**对／现实的批判**”

＊「現実の批判に対して」

甲タイプと乙タイプの違いについて、劉順（1998）は、甲タイプの“**对**+N+的+V”におけるＮ（N_1）は、人間の意味を表すことばであるのに対し、乙タイプの“**对**+N+的+V”におけるＮ（N_1）は、事物の意味を表すことばであると説明している。

また、“**对**+N_1+的+V_b”について、劉順（1998）は (8) のような用例を挙げ、

[9] (7)は本稿筆者が補充した用例である。

（8）a “**对他的成长**”

○「彼の成長に対して」
＊「彼に対する成長」

b “**对孩子的进步**”

○「子供の進歩に対して」
＊「子供に対する進歩」

c “**对思想的变化**”

○「思想の変化に対して」
＊「思想に対する変化」

d “**对作家的写作**”

○「作家の創作に対して」
＊「作家に対する創作」

さらに“**通过观察，这一类型没有岐义。由于Ｖｂ是不及物动词，Ｎ与Ｖｂ只能构成一种语义关系，即施动关系，其层次切分为‘ 对／N+的+V_b’**”（p21）「観察を通じて、このタイプには二様の意味がない。V_bが自動詞なので、ＮとＶ$_b$は一種の意味関係しか構成できない。即ち「動作主+動詞」関係である。それを“**对**／N+的（の）+V_b”と分析できる」と説明している。

しかし、(8) の和訳が示すように、劉順（1998）が分析した“**对**／N+的（の）+V_b”は、“**对字句**”ではあるものの、「“**对字句**”の連体形」ではない。

タイプＢの“**对**+N_1+的+N_2”について、劉順（1998）は、(9)、(10)、(11) のような用例を挙げ、

（９）a “**对文物的兴趣**”「文物に対する興味」

b “**对历史的看法**”「歴史に対する見方」

c “**对前途的信心**”「前途に対する自信」

d “**对家庭的观点**”「家庭に対する見方」

（１０）a “**对我的精神世界**”「私の精神世界に対して」

b “**对人们的心理**”「人々の心理に対して」

c “**对产品的质量**”「製品の品質に対して」

d “**对老钱的书**”「銭さんの本に対して」

（１１）a “**对学生的态度**”

「学生に対する態度」
「学生の態度に対して」

b “**对父母的情爱**”

「父母に対する情愛」
「父母の情愛に対して」

c “**对学生的兴趣**”

「学生に対する興味」
「学生の趣味に対して」

d “**对他的想法**”

「彼に対する考え方」
「彼の考え方に対して」

(9)では、“**对**+N_1+的／N_2”と、(10)では、“**对**／N_1+的+N_2”と、分析しており、二様の意味はとれない。それに対し、(11)では、各用例が示すように、“**对**+N_1+的／N_2”と、“**对**／N_1+的+N_2”との二様の意味がとれると説明している。これは、中国語固有の形態から発生した問題で、即ち日本語の「学生に対する態度」と「学生の態度に対して」は、意味はもちろんのこと、形態も違っている。それに対し、中国語の“**对学生的态度**”は、二様の意味がとれるものの、形態が一つしかない。

タイプＣの“**对**+N+的+A”について、劉順（1998）は“**这类情形出现的频率不高，N与A只能构成一种语义关系，即描述关系，结构关系为对／N+的+A。例如，‘对范佩莉的任性’。‘范佩莉’与‘任性’之间即为描述关系。**”「このタイプの出現率は、高くない。ＮとＡは一種の意味関係しか構成できない。即ち描写関係である。構造関係は“**对**／N_1+的+N_2”である。例えば、「范佩莉のわがままに対して」では、「范佩莉」と「わがまま」との関連は描写関係である」（p21）と説明している。

以上、中国語の“**对**+N+的+N”の用法分類、とそれに関する劉順（1998）の説を紹介した。劉順（1998）は、“**对**+N+的+N”の用法分類に関する各タイプの特徴をまとめたものの、以下のような問題点がある。

1.“**对**+N+的”が「Ｖ・Ｎ・Ａ」（動名詞・名詞・形容詞派生の名詞）を修飾出来ると説明したものの、具体的にどのようなものを修飾可能かについては、説明していない。

２.“**对**+N+的+V_b”は、(8) が示すように、単なる“**对字句**”であって、“**对字句**”の連体形ではない。

（８）a “**对他的成长**”

○「彼の成長に対して」
＊「彼に対する成長」

b “**对孩子的进步**”

○「子供の進歩に対して」
＊「子供に対する進歩」

c “**对思想的变化**”

○「思想の変化に対して」
＊「思想に対する変化」

d “**对作家的写作**”

○「作家の創作に対して」
＊「作家に対する創作」

３．タイプＣの“**对**+N+的+A”について、「ＮとＡは一種の意味関係しか構成できない。即ち描写関係である。構造関係は“**对**／N+的+A”である」と論じたものの、(3)が示すように、(3)b、(3) c は、“**对**／N+的+A”の“**对字句**”であるが、(3) a、(3) d におけるＮとＡの構造関係は“**对**+N+的／A”（(3) a では“**对前途的绝望**”「前途に対する絶望」、(3) d では“**对生活的敏感**”「生活に対する敏感さ」）で、“**对字句**”の連体形“**对**+N+的／A”である。従って、(3) a、(3) d の“**对**+N+的+A”においては、「N」は「A」が要求する対象である。意味上描写関係でもなく、構文上“**对**／N+的+A”でもない。

（３）a“**对前途的／绝望**”「前途に対する絶望」

b“**对／范佩莉的任性**”「范佩莉のわがままに対し」

c“**对／统治者的残酷**”「統治者の残酷さに対し」

d“**对生活的／敏感**”「生活に対する敏感さ」

２・２　“**对**+N_1+**的**”の修飾可能な「N_2」（Ｎ・Ｖ・Ａ）の種類

この問題について、本稿筆者が調べた限りでは、これまで余り論じられなかったようであるが、李小栄 (2000) は比較的詳細にこの問題を取り上げている。以下 2･2･1 では“**对**+N_1+**的**”の修飾可能な「名詞」（「N_2」）を、2･2･2 では“**对**+N_1+**的**”の修飾可能な「動名詞」（「N_2」）を、という順にそれをまとめる。

２・２・１　“**对**+N_1+**的**”の修飾可能な「名詞」（「N_2」）

“**对**+N_1+**的**”の修飾可能な名詞について、李小栄（2000）は、以下三つの条件を満たさなければならないと指摘した。

１．２音節名詞

(12) a と b が示すように、被修飾名詞が１音節語（“**仇**”「恨み」“**情**”「情け」）である場合、“**对**+N_1+**的**+N_2”（N_2=名詞）は成立しない。(12) c と d が示すように、被修飾名詞が２音節語（“**仇恨**”「憎しみ」“**情意**”「愛情」）に代えるなら、“**对**+N_1+**的**+N_2”（N_2=名詞)」は成立する。

（１２）a*“**对黑社会的仇**”「悪社会に対する恨み」

b*“**对家乡的情**”「故郷に対する情け」

c○“**对黑社会的仇恨**”「悪社会に対する憎しみ」

d○“**对家乡的情意**”「故郷に対する愛情」

２．抽象名詞

（13）a と b が示すように、被修飾名詞が 2 音節語（“**文章**”「文章」、“**图片**”「図画」）であっても、抽象的な意味を表さない限り、“**对**+N_1+的+N_2”（N_2=名詞）は成立しない。（13）c と d が示すように、被修飾名詞が抽象的な意味を表す 2 音節語（“**偏见**”「偏見」、“**看法**”「見方」）に代えるなら、“**对**+N_1+的+N_2”（N_2=名詞）は成立する。

（１３）a*“**对语法理论的文章**”「？文法理論に対する文章」

b*“**对自然风光的图片**”「？自然風景に対する図画」

c○“**对妇女的偏见**”「女性に対する偏見」

d○“**对经济形势的看法**”「経済情勢に対する見方」

３．二価名詞[10)]

李小栄（2000）は“**对**+N_1+的”の修飾可能な名詞（N_2）の種類について、2 音節名詞、抽象名詞の条件（“**话题**”「話題」、“**理论**”「理論」、“**原则**”「原則」、“**学说**”「学説」）を満たしたものの、二価名詞でない限り、（14）が示す

[10]中国語学界では、名詞の研究に「結合価理論」を最初に導入したのは、**袁毓林**である。詳しくは**袁毓林**（1995）を参照されたい。

ように、“**对**+N_1+的+N_2”（N_2=名詞）は成立しないと、説明している。

（１４）a*“**对家庭的话题**”「?家庭に対する話題」

b*“**对经济的理论**”「?経済に対する理論」

c*“**对外交工作的原则**”「?外交業務に対する原則」

d*“**对探索宇宙奥秘的学说**”「?宇宙の秘密の探索に対する学説」

二価名詞について、李小栄（2000）は、

“**所谓二价名词就是，一些名词要求有另外两个名词性成分与之相联系，例如‘意见’常常要求‘持意见者’和‘意见针对的对象’，例如‘分房子的事他有意见’，例中的‘他’和‘分房子的事’就是与‘意见’相联系的另外两个名词性成分。像‘意见’这样的名词就是二价名词，它所要求与之联系的两个名词性成分就是它的配项。**”（p292）「所謂二価名詞とは、同名詞と関連のある、他の二つの名詞の性質を持つ成分を要求する、一部の名詞を指す。たとえば「意見」は「意見がある者」と「意見のむかう対象」を常に要求し、用例の「家屋の分配に対して彼は意見がある」における「彼」と「家屋の分配」が「意見」が要求する他の二つの名詞の性質を持つ成分である。「意見」のような名詞は二価名詞で、同名詞が要求する、それと関連のある、二つの名詞の性質を持つ成分が同名詞の結合項である」（p292）と説明している。

（１５）a“**对足球的兴趣**”「サッカーに対する興味」

b“**对这个问题的见解**”「この問題に対する見解」

c“**对健康的好处**”「健康に対するメリット」

d“**对农村工作的方针**”「農村業務に対する方針」

また、“**对**+N_1+的”の修飾可能な二価名詞（N_2）の意味について、李小栄（2000）は、以下のように分類している。

A．感情・態度を表す

（16）a でいえば、その二つの結合項は、「感情・態度をもつもの」（“**人们**”「人々」）と「感情・態度が対するもの」（“**祖国**”「祖国」）である。

（１６）a“（**人们**）**对祖国的感情**”「（人々の）祖国に対する感情」

b“**对色彩的感觉**”「色彩に対する感覚」

c“**对工作的热情**”「仕事に対する情熱」

d“**对胜利的信心**”「勝利に対する自信」

B．見解・論点を表す

（17）a でいえば、その二つの結合項は、「見解・論点をもつもの」（“**他**”「彼」）と「見解・論点が対するもの」（“**这个问题**”「この問題」）である。

（１７）a“（**他**）**对这个问题的见解**”「（彼の）この問題に対する見解」

b“**对妇女的偏见**”「女性に対する偏見」

c“**对故乡的印象**”「故郷に対するイメージ」

d“**对军训生活的感想**”「軍事訓練の生活に対する感想」

C．役割・効果を表す

（18）a でいえば、その二つの結合項は、「役割・効果を果たすもの」（“**这种药**”「この薬」）と「役割・効果を受けるもの」（“**感冒**”「かぜ」）である。

（１８）a“**(这种药) 对感冒的治疗效果**”

「(この薬の) かぜに対する治療効果」

b“**对人类健康的好处**”

「人類の健康に対するメリット」

c“**对农业的益处**”

「農業に対する利益」

d“**对身体的害处**”

「体に対する不利な点」

D．方針・政策を表す

(19) a でいえば、その二つの結合項は、「方針・政策を制定するもの」（“**国家**”「国」）と「方針・政策を受けるもの」（“**农村工作**”「農村作業」）である。

（１９）a“**(国家) 对农村工作的方针**”「(国の) 農村業務に対する方針」

b“**对外国投资者的优遇政策**”「外国投資者に対する優遇政策」

さらに、李小栄（2000）は、“**总之，‘对于(对)……的’所能修饰的名词必须是双音节的、抽象的二价名词。这些名词都有两个配项，我们把它们概括为：[施事]、[对象]。‘对于(对)’引出[对象]这一配项，‘对于(对)……的……’反映的是二价名词及其一个配项的依存关系。**”(p295)「まとめて言うと、“**对于(对)……的**”の修飾可能な名詞は、２音節（以上）で、抽象的な意味を表す二価名詞でなければならない。これらの名詞は、全て二つの

結合項がある。我々はそれらをそれぞれ「主体」、「対象」（「相手」）とまとめている。“**对于(对)**”は「対象」（「相手」）という結合項を引き出し、“**对于(对)……的……**”は二価名詞及びその一つの結合項との依存関係を示している」と、説明している。

２・２・２　“**对**+N_1+**的**”の修飾可能な動名詞（「N_2」）

“**对**+N_1+**的**”の修飾可能な動名詞（「N_2」）について、李小栄（2000）は、以下三つの条件を満たさなければならないと指摘した。

１．2 音節動詞

（20）a と b が示すように、動名詞が 1 音節語（“**用**”「使い」“**讲**”「言い」）である場合、“**对**+N_1+的+「動名詞」（N_2）”は成立しない。（20）c と d が示すように、被修飾名詞が 2 音節語（“**运用**”「使用」“**讲解**”「説明」）に代えるなら、“**对**+N_1+的+「動名詞」（N_2）”は成立する。

（２０）a*“**对新知识的用**”「新しい知識に対する使い」

b*“**对语法的讲**”「文法に対する言い」

c○“**对新知识的运用**”「新しい知識に対する使用」

d○“**对语法的讲解**”「文法に対する説明」

２．抽象行為を表す動詞

（21）a と b が示すように、動名詞が 2 音節語“修理”「修理する」“打扫”「掃除する」）であっても、抽象的な意味を表さない限り、“对+N_1+的+「動名詞」（N_2）”は成立しない。（21）c と d が示すように、動名詞が抽象的な意味を表す 2 音節語“同情”「同情する」“思考”「思考する」）に代えるなら、“对+N_1+的+「動名詞」（N_2）”は成立する。

（２１）a*“对汽车的修理”「自動車に対する修理」

b*“对房间的打扫”「部屋に対する掃除」

c○“对弱者的同情”「弱者に対する同情」

d○“对现代人价值观的思考”「現代人の価値観に対する思考」

３．二価動詞及び三価動詞

李小栄（2000）は、“能受‘对于(对)……的’修饰的动词还必须是二价或三价动词，不能是一价动词。所谓一价、二价、三价是指动词所能连接的名词性成分的数目，只能连接一个名词性成分的动词叫作一价动词，例如‘觉悟’（他觉悟了）；能连接两个名词性成分的叫作二价动词，例如‘保护’（我们保护野生动物）;能连接三个名词性成分的动词叫作三价动词,例如‘赠送’（学校赠送每位教师一套百科全书）。”（p296）（また、“对于(对)……的”の修飾可能な動詞（N_2）は、二価動詞または三価動詞でなければならず、一価動詞にはならない（(22）が示すように)。いわゆる一価、二価、三価とは、動詞の要求可能な名詞的な性質を持つ成分の数を指す。一つの名詞的な性質を持つ成分しか要求できないものを一価動詞と称し、例えば「覚醒する」(「彼は覚醒した」)；二つの名詞的な性質を持つ成分を要求するもの

を二価動詞と称し、例えば「保護する」（「我々は野生動物を保護する」）；三つの名詞的な性質を持つ成分を要求するものを三価動詞と称し、例えば「送呈する」（「学校は一人の教師ごとに百科全書をワンセット送呈した」）と、説明している。

（２２）a“**谈判破裂了。**”――*“**对谈判的／破裂**”

「交渉は決裂した」――*「交渉に対する決裂」

b“精神崩寸了。”――*“**对精神的／崩溃**”

「精神は崩壊した」――*「精神に対する崩壊」

c“**家族衰败了。**”――*“**对家族的／衰败**”

「一族は衰微した」――*「一族に対する衰微」

d“**敌人失败了。**”――*“**对敌人的／失败**”

「敵は失敗した」――*「敵に対する失敗」

また、“**对**+N_1+的”は全ての二価動詞または三価動詞を修飾できるのではなく、“**对**+N_1+的”の修飾可能な二価動詞（N_2）について、李小栄（2000）は、意味上以下のように分類している。

Ａ．感情･心理活動を表す

(23) a でいえば、その二つの結合項は、「感情･心理活動を実施するもの」（“**他**”「彼」）と「感情･心理活動が関連する対象」（“**祖国**”「祖国」）である。

（２３）a“（**他**）**对祖国的热爱**”「（彼の）祖国に対する熱愛」

b“**对新生活的向往**”「新しい生活に対する憧憬」

c“**对下属的怀疑**”「部下に対する懐疑」

d“ **对长者的尊敬**”「年輩の方に対する尊敬」

B．認知活動を表す

(24) a でいえば、その二つの結合項は、「認知活動を実施するもの」(“ **读者**”「読者」) と「認知活動の対象」(“ **出版者**”「作者」) である。

（２４）a“（**读者**）**对出版者的阅读**”「(読者の) 作者に対する閲読」

b“ **对蚁群的观察**”「蟻の群れに対する観察」

c“ **对人物性格的刻画**”「人物の性格に対する描写」

d“ **对经济形势的予想**”「経済情勢に対する予想」

C．言語活動を表す

(25) a でいえば、その二つの結合項は、「言語活動を実施するもの」(“ **他**”「彼」) と「言語活動の対象」(“ **这件事**”「この事」) である。

（２５）a“（**他**）**对这件事的评价**”「(彼の) この事に対する評価」

b“ **对英雄的赞美**”「ヒーローに対する賛美」

c“ **对新时代的讴歌**”「新しい時代に対する謳歌」

d“ **对旧社会的控诉**”「旧社会に対する告発」

D．処置を表す

(26) a でいえば、その二つの結合項は、「処置行為を実施するもの」(“**教**

师”「教師」）と「処置の対象」（“**学生**”「学生」）である。

（２６）a“（**教师**）**对学生的教育**”「（教師の）学生に対する教育」

b“**对下岗工人的再培训**”

「レイオフされた労働者に対する再トレーニング」

c“**对企业内部的整顿**”「企業内部に対する整備」

d“**对农民起义的镇压**”「農民蜂起に対する鎮圧」

Ｅ．需要を表す

(27) a でいえば、その二つの結合項は、「需要を要求するもの」（“**国家**”「国」）と「需要を受けるもの」（“**人材**”「人材」）である。

（２７）a“（**国家**）**对人材的需求**”「（国の）人材に対する求め」

b“**对幸福生活的追求**”「幸せな生活に対する追求」

c“**对下属部门的要求**”「管轄下の部門に対する要求」

d“**对幸福生活的渴望**”「幸せな生活に対する渇望」

Ｆ．影響を表す

(28) a でいえば、その二つの結合項は、「影響を与えるもの」（“**疾病**”「病気」）と「影響を受けるもの」（“**健康**”「健康」）である。

（２８）a“（**疾病**）**对健康的影响**”「（病気の）健康に対する影響」

b“**对皮肤的刺激**”「皮膚に対する刺激」

c“**对人权的侵害**”「人権に対する侵害」

d“**对国家利益的损害**”「国の利益に対する損害」

最後に、李小栄（2000）は、“**实际二价动词的配项可以概括为［施事］和［受事］。‘对于（对）……的……’对这些二价动词的情况简言之就是：‘对于（对）’引出其配项［受事］组成介宾词组作动词的定语。**”（p301）「実際、二価動詞の結合項について、「主体」、「受動者」とまとめられる。“**对于（对）……的**”とこれらの二価動詞との関連について、簡単にまとめると、“**对于（对）**”はその結合項の「受動者」を引き出し、介賓構造を作り、動詞（動名詞）の連体修飾語となる」と、説明している。

また、三価動詞について、李小栄（2000）は、“**三价动词连接三个名词性成分，例如‘厂里奖励劳模一台录音机’，我们把句中的‘厂里’、‘劳模’、‘一台录音机’这三个配项分别叫作［施事］、［与事］、［受事］；‘对于（对）’引出配项［与事］，作动词的定语。**”（p301）「三価動詞は、名詞の性質を持つ成分を三つ要求する。例えば、「工場は模範労働者に一台の録音機を褒賞として与えた」における「工場」「模範労働者」「一台の録音機」を、われわれは、それぞれ“施事”（「主体」）、“与事”（「相手」）、“受事”（「受動者」（対象））と称する。“**对于（对）**”は“与事”（「相手」）を引き出し、動詞（動名詞）の連体修飾語となる」と説明しているものの、挙げた用例は、（29）（N_1=“与事”（「相手」））と（30）（N_1= “受事”（「受動者」））のみで、それについて、

意味分類していない。

（２９）a “**对劳模的奖励**”

「模範労働者に対する褒賞」

“**厂里奖励劳模一台录音机**”

「工場は模範労働者に一台の録音機を褒賞として与える」

(「主体」→“**厂里**”（「工場」)、「相手」→“**劳模**”（「模範労働者」)、

「受動者」→“**一台录音机**”（「一台の録音機」))

b “**对我们的答复**”

「我々に対する回答」

“**人们答复我们这个问题**”

「人々はこの問題についてわれわれに回答する」

(「主体」→“**人们**”（「人々」)、「相手」→“**我们**”（「我々」)、「受

動者」→“**这个问题**”（「この問題」))

c “**对中国的援助**”

「中国に対する援助」

“**日本援助中国救援物资**”

「日本は中国に救援物資を援助した」

(「主体」→“**日本**”（「日本」)、「相手」→“**中国**”（「中国」)、「受

動者」→“**救援物资**”（「救援物資」))

d “**对贫困地区的支援**”

「貧しい地域に対する支援」

“**国家支援贫困地区粮食**”

「国は貧しい地域に食料を提供する」

（「主体」→“**国家**”（「 国」）、「相手」→“**贫困地区**”（「貧しい地域」）、「受動者」→“**粮食**”（「食料」））

（３０）“**对这个问题的回答**”

「この問題に対する回答」

“**该公司向记者回答了这个问题。**”

「記者にむかって、同社はこの問題に回答した。」

（「主体」→“**该公司**”（「同社」）、「相手」→“**记者**”（「記者」）、「受動者」→“**这个问题**”（「この問題」））[11)]

以上、中国語の“**对**+N_1+**的**”がどのようなタイプの名詞（N_2）、または動名詞（N_2）を修飾可能かに関する、李小栄（2000）の説をまとめた。同説は、名詞と動詞の結合価という立場から、多くの用例を挙げ、

A．“**对**+N_1+**的**”が、2 音節を備え、抽象的な意味を表す二価名詞、二価動詞または三価動詞（N_2）しか修飾できないことを述べた。

B．さらに“**对**+N_1+**的**”の修飾可能な二価名詞、二価動詞（N_2）について、意味分類した。

以上の二点は高く評価できるものの、李小栄（2000）には、以下のような問題点がる。

[11] (29) 各用例と (30) の「元の文への還元（(29) a を除く）」及び「主体」、「相手」、「受動者」への分析は、本稿筆者が説明するために付けたものである。

a. 連用形の“**对**N…”から、連体形“**对**N的 N”への転換について

（31）が示すように、中国語では、連用形の“**对**N…”から、連体形“**对**N的 N”へ転換する場合がある。李小栄（2000）は、この点について説明していない。

（３１）a“**他对这个问题提出了新的看法**。”

「彼は、この問題に対して、新しい見方を示している。」

b“**他提出了对这个问题的新的看法**。”

「彼は、この問題に対しての、新しい見方を示している。」

b.“**对**+N_1+**的**+N_2”における「N_2」が形容詞派生の名詞である場合について

（32）が示すように、“**对**+N_1+**的**+N_2”における「N_2」（（32）では“**不满意**”「不満」）は、中国語では、形容詞である。李小栄（2000）は、このタイプについて説明していない。

（３２）“**她的委屈是一些对生活的不满意，无泪可落，而是想骂谁一顿，出出闷气**。”（**骆驼祥子**（原）・p365）

「ひのえ午嬢の悩みは生活の仕方に対する不満から出たもので、まったく些細なことでさえ涙の種となっている。むしろ相手なんか誰でもいいから、猛然と罵倒して、この結ぼれた気分を晴らしさえすれば気が済むのだ。」（駱駝祥子（訳）・p261）

c.“**对**+N_1+**的**+N_2”における「N_2」が動名詞である場合、その動名詞を派生する動詞が要求する「主体」と“**对**+N_1+**的**+N_2”との位置関係について

中国語の場合、“**对**+N_1+**的**+N_2”における「N_2」が動名詞なら、その動名詞を派生する動詞が要求する「主体」をＳとすると、(33) a が示すように、“Ｓ+**对**+N_1+**的**+N_2”(“**毛泽东对蒋介石态度的估计**”「毛沢東の蒋介石に対する評価」)になるのが普通のようである。(33) b の“**对**+N_1+**的**+Ｓ**的**+N_2”(“？**对蒋介石态度的毛泽东的估计**”「蒋介石に対する毛沢東の評価」)になると、若干不自然になる。しかし、(33) c のように“**对**+N_1+**的**+S_1**的**+N_2+**对**+N_1+**的**+S_2**的**+N_2”比較の表現をすると、さほど不自然でなくなる(“**对蒋介石态度的毛泽东(=**S_1**)的估计和对蒋介石态度的周恩来(=**S_2**)的估计**”「蒋介石に対する毛沢東の評価と蒋介石に対する周恩来の評価」)。この点についても、李小栄(2000)は説明していない。

（３３）a“**然而，形势的发展表明毛泽东对蒋介石态度的估计还是乐观一些。**”

（**毛泽东传**（原）・p582）

「しかしながら、情勢の進展は毛沢東の蒋介石に対する評価がいささか楽観しすぎていたことを示していた。」（毛沢東伝（訳）・p582）

b？“**然而，形势的发展表明对蒋介石态度的毛泽东的估计还是乐观一些。**”

「しかしながら、情勢の進展は蒋介石に対する毛沢東の評価がいささか楽観しすぎていたことを示していた。」

c“**对蒋介石态度的毛泽东的估计和对蒋介石态度的周恩来的估计**”

「蒋介石に対する毛沢東の評価と蒋介石に対する周恩来の評価」

２・３　状語（連用修飾語）から定語（連体修飾語）への転換

中国語に関する、状語（連用修飾語）から定語（連体修飾語）への転換については、本稿筆者が先行研究を調べた限りでは、従来あまり論じられていないようである。

張虹（1993）は、

“文中的定语限于宾语的修饰、限制性成分，状语限于带标志词‘地’（有人写作‘的’）的状语。”「文中における連体修飾語は、目的語を修飾･制限するものに限定し、連用修飾語は標示詞「地」（「的」と表記する人もいる）を伴うものに限定する」という前提条件の下で、

朱徳熙（1982）**“有的时候，做状语的形容词在意义上只跟后头动词的宾语相关，跟动词在意义上反而没有直接联系，例如：**

園圓圓的排成一个圈

辣辣的做一碗汤”（p175）[12]「そして、場合によっては、連用修飾語になる形容詞が意味上は後の動詞の目的語とのみ関わりをもち、動詞とは意味上直接の関係をもたない、ということもある。たとえば次のような例である。

まーるく並んで輪をつくる

からーくスープを作る」

を引用して、以下の 2 点を指摘した。

A．**“辣辣的做一碗汤”**（「からーくスープを作る」）を**“做一碗辣辣的汤”**（「からーいスープを作る」）に転換でき、且つ文の意味は少しも変わらない。

B．**“圆圆的排成一个圈”**（「まーるく並んで輪をつくる」）を**“排成一个圆圆的圈”**（「並んで、まーるい輪をつくる」）に転換できるが、文の意味は若

[12] 詳しくは朱徳熙（1982）を参照されたい。

干変わる。即ち、連用修飾語“**圓圓的**”（「まーるく」）は、転換する前、述語動詞“**排成**”（「並んで、つくる」）を修飾・限定すると同時に、意味上目的語“**圈**”（「輪」）にも関連しているが、転換した後、目的語“**圈**”（「輪」）のみ修飾･限定することになる。

しかし、張虹（1993）では、中国語介詞の連用形（例えば“**对**N…”）から、その連体形（例えば“**对**N的 N”）への転換については、説明されていない。

中国語の介詞“**对**”の連用形の“**对**N…” から、連体形“**对**N**的**N”への転換について、3･3 節で、日本語の「に対して」から「に対する」への転換と比較しながら、観察する。

３．「N_1に対するN_2」について

３・１　「N_1に対するN_2」についての用法分類

「N_1 に対するN_2」の用法分類については、本稿筆者が先行研究を調べた限りでは、従来あまりなされていないようである。例えば、『日本語教育事典』（1982）では「連体格の用法として、「に対しての」と「に対する」とがある」（p395）と、森田・松木（1989）では「なお、「に〈へ〉対して」の連体格の用法としては、「に〈へ〉対しての」と「に〈へ〉対する」とがある」（p11）と、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』（1998）では（「Nに対するN」について）「「それに向けての」「それに関しての」という意を表し、次に続く名詞を修飾する。「その問いに対しての解答」のように、「Nに対してのN」という形が用いられることもある」（p443）と、それぞれ触れるにとどまっている。本稿筆者は、用例調査を行った上で、「N_1に対するN_2」の「に対する」に後接する「N_2」の品詞の種類に基づき、「N_1に対するN_2」を三つのタイプに分類した。

A．「N_1に対するN_2」における「N_2」=N（名詞）

(34)の各用例のような、各用例において、「N_1に対するN_2」の「に対する」

に後接する「N_2」（「熱情」「態度」「責任」「義務」）が名詞であるタイプ。

（３４）a「美奈子の心の中には、青年に対する熱情が、刻一刻潮のやうに満ちわたつて来るのだつた。」（菊池・真珠夫人）
b「俺は貴女の俺に対する態度を見て、つくゞゝ悟つたのです。」（菊地・真珠夫人）
c「青木君に対する僕の責任の一部として、申し上げるのです。」（菊地・真珠夫人）
d「それが君の赤ん坊に対する義務だよ。」（芹沢・巴里に死す）

B.「N_1に対するN_2」における「N_2」=V（動名詞）[13]

(35) の各用例のような、各用例において、「N_1に対するN_2」の「に対する」に後接する「N_2」（「熱愛する」⇒「熱愛」、「賞賛する」⇒「賞賛」、「復讐する」⇒「復讐」、「反発する」⇒「反発」、「憧憬する」⇒「憧憬」）が動詞から派生した動名詞であるタイプ。

（３５）a「但し、己の天分の薄いことや或いは自分が時代に合わないことをただただ感じて、自ら挫けながら然も芸術に対する熱愛は益々怪しく深くなって行くのである。」（佐藤・都会の憂鬱）
b「モーニングを着た小山男爵は、自分の見識に対する夫人の賞讃を期待して居るやうに、自信に充ちて云つた。」（菊地・真珠夫人）
c「瑠璃子に対する荘田の求婚が、本当は自分の息子に対する復讐であったことを知ってから、彼はその復讐の手先になって居た、自分のあさましさが、しみゞゝと感ぜられた。」（菊地・真珠夫人）
d「君の中に親父に対する反撥と憧憬があるのは当然だと僕は思うよ。」（円地・食卓のない家）

C.「N_1に対するN_2」における「N_2」=A（形容詞派生の名詞）[14]

(36) の各用例のような、各用例において、「N_1に対するN_2」の「に対する」に後接する「N_2」（「寛容だ」⇒「寛容」、「忍耐強い」⇒「堪忍づよさ」、「無力だ」⇒「無力」、「不安だ」⇒「不安」、「不快だ」⇒「不快」）が形容詞（形容動詞を含む）の名詞形であるタイプ。

（３６）a「ひろ子に対する重吉の寛容、堪忍づよさは、ひろ子なしではやってゆけない重吉だからそうなのではなかった。」（宮本・播州平野）

---

[13] ここに言う「動名詞」には、「考え・労い」のような、動詞の名詞形かまたは、「散歩（< 散歩する）」のようなサ変動詞形を持つ漢語が含まれる。
[14] ここに言う「形容詞派生の名詞」とは、「ありがたさ・悲しさ・堪忍強さ」や「寛容・不安などの形容動詞語幹」を指す。

b「医師は死に対する人間の無力を現はすやうに、悄然と最後の宣告を下した。」（菊池・真珠夫人）
c「身に迫った危険を、思ひがけなく脱し得た安心と、新しく突発した危険に対する不安とで、心が一種不思議な動乱の中に在った。」（菊地・真珠夫人）
d「彼は妻に対する大きな不快のなかにまた新しいデテイルを加えたことを感じた。」（佐藤・都会の憂鬱）

３・２　「N_1に対するN_2」の用法分類について

3･1 で述べたように、日本語の「N_1に対するN_2」については、先行研究を調べた限りでは、従来あまりなされていないようである。本稿筆者は、「N_1に対するN_2」の「に対する」に後接する「N」（N_2）の品詞の種類に基づき、「N_1に対するN_2」を、A.「N_1に対するN（N_2=名詞）」、B.「N_1に対するV（N_2=動名詞）」、C.「N_1に対するA（N_2=形容詞派生の名詞）」、三つのタイプに分類した。以下、3･2･1 ではAタイプ、3･2･2 ではBタイプ、3･2･3 ではCタイプを、という順に説明していく。

３・２・１　「N_1に対するN（N_2=名詞）」

本稿筆者が用例調査を行った結果、「N_1に対する」が以下の名詞（N_2）を修飾できることが分かった。

「愛情・圧力・意地・色恋・演技・怨恨・感情・関心・犠牲・規定・疑念・興味・義理・疑惑・愚痴・敬意・警戒心・敬虔・刑罰・嫌悪感・幻覚・懸賞金・好意・挫折感・自信・謝意・羞恥心・処置・情愛・情熱・親愛・神経・信念・信頼・責任・責任感・積極性・戦闘・善意・善後策・贈位・態度・諾否・耽美・知識・朝命・貞操・敵意・伝統・討論会・罵詈・反感・微笑・表現欲・表情・評判・不信・復仇心・分際・憤怒・憤懣・報酬・慕情・魅力・面子・優越感・欲求・憐憫・礼・劣等感」
「いい訳・風当り・気持ち・心づくし・心持・心やり・ことばづかい・仕打ち・憎しみ・ものごし」

これらの名詞及びその用例を分析すると、以下の現象を観察することができる。
A. 殆どの語が、抽象的な意味を表すし、「げんこつ」のような具体的な物事を表す名詞は、このタイプの「N_2」にはならない。

（３７）a？「太郎に対するげんこつ」
b？「花子に対する机」

B．「N_1に対するＮ（N_2=名詞）」の内容を文の形で表すと、N_2が後続動詞が要求する「ヲ」格の位置に置かれ、N_1が「ニ」格または「に対して」の位置に置かれる。(38) が示すように、「N_1」は「ニ」格または「に対して」の位置に、N_2は後続動詞が要求する「ヲ」格の位置に復元できる。

（３８）a「仕事に対する愛情」
「彼は仕事（N_1）に（○に対して）愛情（N_2）をもつ。」
b「そういうことに対する関心」
「私はそういうこと（N_1）に（○に対して）は一向に関心（N_2）を持たない。」
c「相手に対する敵意」
「彼は相手（N_1）に（○に対して）敵意（N_2）をいだく。」
d「手伝ってもらった人々に対する報酬」
「大家は手伝ってもらった人々（N_1）に（○に対して）報酬（N_2）を与える。」

３・２・２　「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」

本稿筆者が用例調査を行った結果、「N_1に対する」の修飾可能な動名詞（N_2）は、動詞として「ヲ」格を要求するものと、「ニ」格を要求するものとの二つのタイプがあることが分かった。

一．「ヲ」格を要求するタイプ
「愛する・哀訴する・哀悼する・愛撫する・悪評する・威嚇する・意識する・遠慮する・記憶する･危惧する・規制する・希望する・糺問する・敬愛する･軽蔑する・敬慕する・牽制する・顕示する・譴責する・後悔する・告訴する・顧慮する・賛嘆する・賛美する・支持する・粛清する・嫉妬する･思慕する・準備する・処遇する・賞賛する・承諾する・信任する・心配する・侵略する・信頼する・是認する・詮索する・憎悪する・尊敬する・弾圧する・治療する・中傷する・嘲笑する・懲罰する・決心する・決定する・同情する・認識する・熱愛する・配慮する・罵倒する・迫害する・批判する･非難する・評価する・表示する・復習する・侮辱する・妨害する・冒涜する・魅惑する・夢想する・黙殺する・憂慮する・理解する・冷笑する」
「扱う・慈しむ・恨む・恐れる・怯える・考える・捧げる・嫉む・償う・憎む・ねぎらう・装う・遣る」

これらの動詞及びその用例を分析すると、以下の現象を観察することができる。
A．殆どの語が、抽象的な意味を表し、具体的な動作を表す動詞の名詞形は、このタイプの「N_2」にはならない。

（３９）a？「彼に対する殺し」

a？「コーヒーに対する飲み」

B．「N_1に対する」の修飾可能な動名詞（N_2）として使用される場合、「考え・労い」のような、動詞の連用名詞形もあるし、「認識（＜ 認識する）」のようなサ変動詞語幹の形をとる漢語もある。

C．(40) が示すように、「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」が動詞文の述語動詞として使用される際は、要求する「ヲ」格が「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」の「N_1」として、動名詞自身が「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」の「Ｖ」として示される。(40) a でいえば、「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」における「Ｖ」（「支持（する）」）が動詞として使用される際、要求する「ヲ」格（「あなた（を支持する）」）が「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」の「N_1」として、動名詞自身が「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」の「Ｖ」として（「あなたに対する支持」）、「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」が示される。

（４０）a「あすこには、決して、あなたに対する絶対の支持というものは存在しなかったのよ。」（宮本・風知草）

「あなたを支持する――あなたに対する支持」

b「芸術に志した人々のうちに、どれだけ沢山の人がこのようにして、芸術に対する夢想と自信とをその青春と一緒に消滅し尽したか知れない。」（佐藤・都会の憂鬱）

「芸術を夢想する――芸術に対する夢想」

二.「ニ」格を要求するタイプ

「挨拶する・受答えする・回答する・感激する・感謝する・逆襲する・求婚する・共感する・幻滅する･拘泥する・告諭する・答える・サービスする・示威する・失望する・執着する・憧憬する・尋問する・誓願する・忠告する・挑戦する・発言する・反逆する･反撃する・反抗する・返事する・反応する・表示する・」

「怒る・傾く・親しむ・悩む・酔う」

これらの動名詞及びその用例を分析すると、以下の現象を観察することができる。

A．大多数の語（「共感する・幻滅する･拘泥する」を除く）が、相手「ニ」格を要求する。

B．「N_1に対する」の修飾可能な動名詞（N_2）として使用される場合、「悩み・酔い」のような、動詞の連用名詞形もあるし、「回答（＜ 回答する）」のようなサ変動詞の語幹もある。

C．(41) が示すように、「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」が動詞文の述語動詞として使用される際は、要求する「ニ」格が「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」の「N_1」として、動名詞自身が「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」の「Ｖ」として示される。(41) a でいえば、「N_1に対するＶ（N_2=動名

詞)」における「V」(「求婚(する)」)が動詞として使用される際、要求する「ニ」格(「瑠璃子」)が「N_1に対するV(N_2=動名詞)」の「N_1」として、動名詞自身が「N_1に対するV(N_2=動名詞)」の「V」として(「瑠璃子に対する求婚」)、「N_1に対するV(N_2=動名詞)」が示される。

(41)a「瑠璃子に対する荘田の求婚が、本当は自分の息子に対する復讐であったことを知ってから、彼はその復讐の手先になって居た、自分のあさましさが、しみゞゝと感ぜられた。」(=(35) c)
「瑠璃子に求婚する――瑠璃子に対する求婚」
b「初めて、顔を見たばかりの少女の、厚い情に対する感激の涙だつた。」(菊地・真珠夫人)
「厚い情に感激する――厚い情に対する感激」
c「つまり、質問に対する回答を、ちゃーんと前もって考えてあったような、応じ方だったのである。」(梶山・女の警察)
「質問に回答する――質問に対する回答」

3・2・3 「N_1に対するA」(N_2=形容詞派生の名詞)

本稿筆者が用例調査を行った結果、「N_1に対する」の修飾可能な形容詞派生の名詞(N_2)は、以下の形容詞から派生していることが分かった。

「あどけない・ありがたい・いじらしい・悲しい・堪忍強い・寛容だ・執拗だ・親切だ・懐かしい・皮肉だ・敏感だ・不安だ・不快だ・不敬だ・不満だ・不愉快だ・むごたらしい・無力だ」

これらの形容詞及びその用例を分析すると、以下二つのタイプがあることが分かった。

A.「敏感だ、無力だ、親切だ」などのような、「ニ」格または「に対して」を取るタイプ。
このタイプの形容詞は、(42)が示すように、「主体」((42)aでは「政治家」、(42)bでは「民兵」(42)cでは「彼」)と「ニ」格または「に対して」((42)aでは「世論」、(42)bでは「敵の攻撃」、(42)cでは「だれ」)を取り、その「ニ」格または「に対して」は、同タイプの形容詞が要求する「対象」を示すことができる。本論文では、それを指向性と呼ぶ。「N_1に対するA(N_2=形容詞派生の名詞)」は、「「ニ」格または「に対して」に先行する名詞+に対するA」という形で実現されている。

B.「悲しい・ありがたい・いじらしい・むごたらしい」などのような、「…と感じる」タイプ。
上記の形容詞は、「ニ」格または「に対して」を取らず、「N_1に対するA(N_2=形容詞派生の名詞)」の内容を文の形で表すと、「N_1ガAト感じ

る」「N_1ヲＡク扱う」等の関係になる。上記のＡ（N_2）が対象を指向する必要がある場合は、「に対する」を通じてその「対象」（（43）a では「渚山」、（43）b では「心づくし」（43）c では「動物」、（43）d では「重吉」）を、当該形容詞の名詞形と結び付けて示す。「N_1に対するＡ（N_2=形容詞）」は、「対象に対する形容詞派生の名詞」という形で実現されている。

（４２）a「政治家は世論に（○に対して）敏感である。」
「世論に対する敏感さ」
b「民兵は敵の攻撃に（○に対して）無力である。」
「敵の攻撃に対する無力さ」
c「彼はだれに（○に対しても）でも親切だ。」
「あらゆる人に対する親切さ」

（４３）a「彼の渚山に対する悲しさは一瞬間得も言われないものであった。」
（佐藤・都会の憂鬱）
b「美奈子は、母の言葉を聴くと、地の中へでも消えてしまひたいやうな恥かしさと、母の自分に対する真剣な心づくしに対する有難さとで、心の中が一杯になつてしまつた。」（菊地・真珠夫人）
c「主人に慕ひ纏はつて来る動物に対するやうないぢらしさを、此の無智な勝彦に対して、懐かずには居られなかつた。」
（佐藤・都会の憂鬱）
d「入院させないと云った時よりも、重吉に対するこの二度目のむごたらしさを、ひろ子は性根にしみて受けとった。」（宮本・風知草）

３・３　連用から連体へ

日本語の連体修飾語から連用修飾語への転換、いわゆる連体成分の移動に関する従来の研究は、優れたものが多く、その代表として、鈴木（1979）、矢澤（1983）、矢澤（1985）、矢澤（1987）、矢澤（1993b）、奥津（1983）、奥津（1995．11～1997．9）などが挙げられる。本章で論じた連体形の「Ｎに対するＮ」を分析すると、実際に連用形「Ｎに対して……」から転換した現象[15]も観察することが出来る。

（４４）a「犯人は、国鉄に対して恨みを持っている。」
（夜行列車殺人事件・p43）

[15] 「Ｎに対して…」から「Ｎに対するＮ」への転換は、実際にいろいろなことが絡んでおり、先行研究はかなり進んでいる。本論文は、「Ｎに対して…」から「Ｎに対するＮ」へのような、いわゆる連用から連体への転換が存在することを指摘するにとどめ、その成立条件などに関する原因究明は今後の課題とする。

a′　「犯人は、国鉄に対する恨みを持っている。」
a″「犯人は、国鉄を恨んでいる。」
b「もし中国がわれわれに対して空襲をすれば、事態は収拾がつかなくなってしまいます。」
（黒雪・p90）
b′「もし中国がわれわれに対する空襲をすれば、事態は収拾がつかなくなってしまいます。」
b″「われわれを空襲する。」
c「私は、かすかな期待を国鉄に対して抱いている。」
（夜行列車殺人事件・p206）
c′　「私は、国鉄に対するかすかな期待を抱いている。」
c″「私は、国鉄に期待している。」

（４５）a「彼は三人の娘に対して愛情をもつことが出来なかった。」
（犬神家の一族・p16）
a′　「彼は三人の娘に対する愛情をもつことが出来なかった。」
b「彼は東北新幹線に対して意見を述べた。」
（夜行列車殺人事件・p177）
b′　「彼は東北新幹線に対する意見を述べた。」
c「国鉄に対して非難の投書を繰り返している。」
（夜行列車殺人事件・p180）
c′　「国鉄に対する非難の投書を繰り返している。」

（44）について、機能動詞文[16]の立場から説明すると、「恨みを持つ」は「恨む」と、「空襲をする」は「空襲する」と、「期待を抱く」は「期待する」と同義的である。動名詞の立場から説明すると、（44）a″、（44）b″と（44）c″が示すように「に対して」に先行する名詞（（44）a は「国鉄」、（44）b は「われわれ」、（44）c は「国鉄」）は意味上述語動詞の目的語（動名詞、（44）a は「恨み」、（44）b は「空襲」、（44）c は「期待」）の対象である。

（45）については、機能動詞文以外の用例である。（45）が示すように、機能動詞文以外（（45）a の「愛情をもつ」、（45）b の「意見を述べる」、（45）c の「投書を繰り返す」が「機能動詞句」ではない）の場合でも、「～に対して」から「～に対する」へ転換可能である。

[16] 機能動詞について、詳しくは村木（1991）を参照されたい。

一方、中国語にも、連用形“**对**N…” から、連体形“**对**N的N”へ、または連体形“**对**N的N”から、連用形“**对**N…” への転換現象を観察することが出来る。

（４６）a“ **电视屏幕上，伍修权将军对美国当局长达两个小时的声讨还在继续，**

……” （黒雪（原）・p218）

“(**对美国当局的声讨**”「アメリカ当局に対する批判」=“**对**N的 N”）

「テレビの画面では、伍修権将軍のアメリカ当局に対する二時間にわたる批判が、まだ延々に続いていたが、」（黒雪（訳）・p341）

a′“ **伍修权将军对美国当局进行声讨。**”

「伍修権将軍はアメリカ当局に対して非難をする」（=“**对**N…” ）

b“ **大家对自己的关怀照顾情况**”

「みんなの自分に対する心遣い」（=“**对**N的 N”）

b′ “大家**对自己进行照顾。**”

「みんなが自分に対して心配する。」=（“**对**N…”）

４．“**对**+N_1+**的**+N_2”と「N_1に対するN_2」との対応

以上、論じてきたように、中国語の“**对**+N_1+**的**+N_2”と、日本語の「N_1に対するN_2」とは、基本的に対応しているものの、以下いくつかの面で対応していない。

Ａ．二様の意味

（１１）a“**对学生的态度**”

「学生に対する態度」
「学生の態度に対して」

b“**对父母的情爱**”

「父母に対する情愛」

「父母の情愛に対して」

c “**对学生的兴趣**”

「学生に対する興味」
「学生の趣味に対して」

d “**对他的想法**”

「彼に対する考え方」
「彼の考え方に対して」

(11)が示すように、中国語の“**对学生的态度**”を、“**对学生的／态度**”(「学生に対する態度」)と、“**对／学生的态度**”(「学生の態度に対して」)という二様の意味に取れるものの、これは、中国語の語順から発生した問題で、日本語にはない。

B.「N_2」になる音節数

(47) a* “**对家乡的情**”
「故郷に対する情け」
b “**对家乡的情意**”
「故郷に対する情け」

c* “**对新知识的用**”

「新しい知識に対する使い」

d “**对新知识的运用**”

「新しい知識に対する使用」

(47)が示すように、中国語の場合、“**对**+N_1+的+N_2”における“的”に後接する「N_2」は2音節語でなければならない。これは、中国語固有のもので、日本語では(48)が示すように、特にその制限を受けない。

(48)「電車に乗つてから、暫らくの間信一郎は夫人に対する酔から、醒めなかつた。」(菊地・真珠夫人)
○ “**对夫人的醉意**”

＊“对夫人的醉”

C．「に関しての」意味を表すか否か

（４９）a「加藤は、その通俗的な、山に対しての、理論が、彼のいままでの経験の中にきわめて稀薄な存在でしかなかったことを恥じた。」（新潮・孤高の人）

＊“对山的／理论”

○“关于山的／理论”

b「そもそも相模自身のこんどの仕事に対する知識というものが甚だ怪しいものではあったが、」（射程・p89）

＊“对工作的／知识”

○“关于工作的／知识”

c「役人になるならね、今でも学歴に対する常識が通用するだろうがね。」（射程・p36）

＊“对学历的／常识”

○“关于学历的／常识”

(49)が示すように、(49）の各用例を中国語に翻訳する際、“对”とは翻訳できず、“关于”と翻訳できる。それは、日本語の「N_1に対するN_2」が「(N_1)それに関しての（N_2)」という意も表す[17]のに対して、中国語の“对+N_1+的+N_2”は、そういう意を表さないからである。

D．形容詞への指向性

（５０）a「彼の渚山に対する悲しさは一瞬間得も言われないものであった。」(=（43）a)

＊“ 对渚山的／悲伤”

○“ 对／渚山的悲伤”

b「入院させないと云った時よりも、重吉に対するこの二度目のむごたらしさを、ひろ子は性根にしみて受けとった。」(=（43）d)

＊“ 对重吉的／悲惨（情况)”

○“ 对／重吉的悲惨（情况)”

c“ 对生活的敏感”（沸き立つ群山・p347）

「生活に対する敏感さ」（**沸騰的群山**・p276）

(50)が示すように、日本語の「悲しい、むごたらしい」のような形容詞は、「ニ」格または「に対して」を取らないが、対象を指向する必要がある場合は、「に対する」を通じてその「対象」を、当該形容詞の名詞形と結び付けて示すことができる。(50) a でいえば、「渚山に対する悲しさ」に、(50) b でいえば、「重吉に対するむごたらしさ」になる。一方、(50) a と (50) b の中訳のような、中国語の“**对**+N_1+的+N_2”は、形容詞“（**悲伤**”「悲しい」“**悲惨**”「むごたらしい」）に、その「対象」（“**渚山**”、“**重吉**”）を指向させることができない場合と、(50) c の“**敏感**”（「敏感だ」）のような、形容詞“（**敏感**”「敏感だ」）にその「対象」（“**生活**”「生活」）を指向させる場合とがある。

E．主体の位置

（５１）a「彼に対する僕の要求は、全か無かです。」
b「僕は、彼に対して、賠償を要求する。」
c「僕の彼に対する要求は、全か無かです。」

(51) が示すように、(51) a から (51) b を想定することが出来る。従って、「要求する」という動詞が要求する「主体」（「僕」）をＳとすると、日本語の場合は、「ＳのＮ$_1$に対するＮ$_2$」（(51) c）と、「Ｎ$_1$に対するＳのＮ$_2$」（(51) a）との、2 種類の表現が出来る。それに対し、中国語の方は、(52) が示すように、通常“Ｓ**对**+N_1+的+N_2”（52b）になる。“**对**+N_1+的ＳのＮ$_2$”（52c）になると、不自然になるが、(53) が示すように比較の意味を表すと、さほど不自然でなくなる。

（５２）a“**我对他要求赔偿**”。

「僕は、彼に対して、賠償を要求する。」

b“**我对他的要求**”。

「僕の彼に対する要求」

[17] 詳しくは、グループ・ジャマシイ編『日本語文型辞典』(1998) を参照されたい。

c?“**对他的我的要求**”。

「彼に対する僕の要求」

（５３）“ **对他的我的要求和对他的你的要求**”

「彼に対する僕の要求と、彼に対する君の要求」

５．まとめ

本章は、主として、以下の三つの問題について論じた。

５・１　“**对**+N$_1$+**的**+N$_2$”について

先行研究では、

A．“**对**+N+**的**+N”

B．“**对**+N+**的**+V”（“**对**+N**的**+V$_j$”と“**对**+N**的**+V$_b$”）

C．“**对**+N+**的**+A”

三つのタイプに分けられている。それに対して、本稿筆者は次の 3 点を指摘した。

まず、“**对**+N+**的**+V”の用法分類である“**对**+N**的**+V$_b$”は、単なる“**对字句**”であり、“**对字句**”の連体形ではない。よって、中国語の“**对**+N+**的**+V”の「V」には「V$_b$」が含まれないことを明らかにした。

第二に、“**对**+N+**的**+A”について、「ＮとＡ」の構造関係は、“**对**／N+**的**+A”ではなく、“**对**+N+**的**／A”である。“**对**／N+**的**+A”になると、単なる“**对字句**”になり、“**对字句**”の連体形でなくなる。よって、「ＮとＡ」の意味関係は、描写関係ではない。

第三に、“**对**+N$_1$+**的**+N$_2$”における「N$_2$」が動名詞である場合、その動名詞を派生する動詞が要求する「主体」と“**对**+N$_1$+**的**+N$_2$”との位置関係は、通常

“Ｓ対+N_1+的+N_2”になるが、比較の表現になると、“対+N_1+的+Ｓ的+N_2”は、さほど不自然でなくなる。

５・２　「N_1に対するN_2」について

まず「N_1に対するN_2」の「に対する」に後接する「N_2」の品詞の種類に基づき、「N_1に対するN_2」を

Ａ.「N_1に対するＮ（N_2=名詞）」
Ｂ.「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」
Ｃ.「N_1に対するＡ（N_2=形容詞派生名詞）」

三つのタイプに分類した。

次に、「N_1に対するＮ（N_2=名詞）」について、殆どの語が、抽象的な意味を表すし、「げんこつ」のような具体的な物事を表す名詞は、このタイプの「N_2」にはならない。また、「N_1に対するＮ（N_2=名詞）」の内容を文の形で表すと、N_2が後続動詞が要求する「ヲ」格の位置に置かれ、N_1が「ニ」格または「に対して」の位置に置かれる。「N_1」は「ニ」格または「に対して」の位置に、N_2は後続動詞が要求する「ヲ」格の位置に復元できると指摘した。

第三に、「N_1に対するＶ（N_2=動名詞）」について、「Ｎ」になる動名詞に、動詞として「ヲ」格を要求するタイプと、「ニ」格を要求するタイプとの２種類があると指摘した。
「ヲ」格を要求するタイプについて、殆どの語が、抽象的な意味を表すし、具体的な動作を表す動詞の名詞形は、このタイプの「N_2」にはならない。さらにN_1とＶとの関連について、「ヲ」格を要求する動詞の場合は、「N_1をＶ」に還元することができると指摘した。
「ニ」格を要求するタイプについて、大多数の語が、相手「ニ」格を要求する。また、「ニ」格を要求する動詞の場合は、「N_1にＶ」に還元することができると指摘した。

第四に、「N_1に対するＡ（N_2=形容詞）」について、「敏感だ、無力だ、親切だ」などのような、「ニ」格または「に対して」を取るタイプと、「悲しい・ありがたい・いじらしい・むごたらしい」などのような、「…と感じる」「…に／く扱う」タイプとの２種類があると指摘した。前者は、同タイプの形容詞が要求する「対象」を示すことができる。「N_1に対するＡ（N_2=形容詞）」は、「「ニ」格または「に対して」に先行する名詞+に対するＡ」という形で実現されている。後者は、形容詞のままでは「ニ」格または「に対して」を取らず、派生名詞形になった際に対象を表明する必要がある場合は、「に対する」を通じて当該形容

詞の名詞形と結び付けて示す。「N_1 に対するＡ（N_2=形容詞）」は、「対象に対する形容詞派生の名詞」という形で実現されていると指摘した。

５・３　“**对**+N_1+的+N_2”と「N_1に対するN_2」との対応関係について

中国語の“**对**+N_1+的+N_2”と、日本語の「N_1 に対するN_2」とは、基本的に対応しているものの、以下いくつかの面で対応していない。

Ａ．二様の意味

中国語の“**对**+N+的+V_j”を“**对**／N+的+V_j”と“**对**+N+的／V_j”という二様の意味に取れるものの、これは、中国語の語順から発生した問題で、日本語にはない。

Ｂ．「N_2」になる音節数

中国語の場合、“**对**+N_1+的+N_2”における“的”に後接する「N_2」は 2 音節語でなければならない。これは、中国語固有のもので、日本語では特にその制限を受けない。

Ｃ．「に関しての」意味を表すか否か

（５４）ａ　＊“**对山的／理论**”　「山に対する理論」
　　○“**关于山的／理论**”「山に関する理論」
　　ｂ　＊“**对工作的／知识**”「仕事に対する知識」
　　○“**关于工作的／知识**”「仕事に関する知識」
　　ｃ　＊“**对学历的／常识**”　「学歴に対する常識」
　　○“**关于学历的／常识**”「学歴に対する常識」

上の各用例を中国語に翻訳する際、“**对**”とは翻訳できず、“**关于**”と翻訳できる。それは、日本語の「N_1に対するN_2」が「(N_1) それに関しての（N_2)」という意も表すのに対して、中国語の“**对**+N_1+的+N_2”は、そういう意を表さないからである。

Ｄ．形容詞への指向性

（５５）a*“ **对渚山的／悲伤**”「渚山に対する悲しさ」

b*“ 对重吉的／悲惨（情况）”「重吉に対するこの二度目のむごたらしさ」

日本語の、「ニ」格または「に対して」を取らない形容詞は、対象を指向する必要がある場合は、「に対する」を通じてその「対象」を、当該形容詞の名詞形と結び付けて示すことができる。中国語は、形容詞（“悲伤”「悲しい」“悲惨”「むごたらしい」）に、その「対象」（“渚山”、“重吉”）を指向させることができない。

E．主体の位置

「N_1 に対するＶ（N_2=動名詞）」における動詞が要求する「主体」をＳとすると、日本語の場合は、「ＳのＮ$_1$に対するＮ$_2$」と、「Ｎ$_1$に対するＳのＮ$_2$」との、2 種類の表現が出来る。それに対し、中国語の方は、通常“Ｓ对+N_1+的+N_2”になる。“对+N_1+的ＳのＮ$_2$”になると、不自然になるが、比較の意味を表すと、さほど不自然でなくなる。

結　章

１．　本論文のまとめ

本論文では、日本語の「が」格・「を」格と置換可能な複合格助詞「に対して」、「について」、「として」、及び「Ｎに対するＮ」と、中国語の介詞“对”、“关于”、“作为”及び“对Ｎ的Ｎ”とが、一定の対応を示しながらも、一方では対応しない場合もあることに注目し、上記各複合格助詞と介詞について、用法分類を試み、それぞれの対応関係について、考察を加えた。

これら日本語の複合格助詞・中国語の介詞それぞれの機能や共起関係や細かな意味等について検討した結果は各章の末尾でまとめたので、ここで繰り返して述べることは省略する。本章では、本研究を進めるうえでの主たる動機であった、日本語複合格助詞個々と中国語介詞個々の共通点と相違点、即ち、両言語の対照研究の立場から言い換えれば、両者の対応する点と対応しない点に焦点を絞って、本研究の結果明らかになったことを以下にまとめることとする。

Ｉ．共通点

まず、両言語のそれぞれの語句が対応している点を以下Ａ～Ｃ示す。

Ａ．複合格助詞または介詞を使用して文全体の主語にあたる語句を示す場合がある。その場合、通常の主語の示し方にはないニュアンスを示すことができる。

(1) が示すように、文の主語は、通常日本語は「が」格、中国語は語順で示されている。

（１） ａ「わたしがいつも頭脳を冷静に保たなければならない。」

ｂ“我就应该时刻保持清醒的头脑。”

それに対して、(2) が示すように、日本語では「としては」、中国語では“作为…来说”は、実質的な文の主語を示しており、(1) と比較すると、(2) の方は「主語の立場を強調している」というニュアンスがある。

（2） a 「わたしとしては、いつも頭脳を冷静に保たなければならない。」

b“ 作为我来说，就应该时刻保持清醒的头脑。”

B．複合格助詞または介詞を使用して文全体の目的語にあたる語句を示す場合は、述語動詞が要求する対象を示していると同時に、通常の目的語の示し方にはないニュアンスを示すことができる。

(3) が示すように、文の目的語は、通常日本語は「を」格、中国語は語順で示されている。

（3） a 「党の幹部を批判する。」

b“ 批判党的干部。”

それに対し、(4) が示すように、日本語では「に対して」、中国語では“对”は、実質的な文の目的語を示しており、(3) と比較すると、(4) の方は「対象+方向性」というニュアンスがある。

（4） a 「党の幹部に対して批判する。」

b“ 对党的干部进行批判。”

C．複合格助詞または介詞を使用して、文の主語、目的語、述部または文全体との関連（いわば、文の主語、目的語、述部または文全体に対する資格・立場）を示す場合がある。

（5）a “张虎作为特级教师参加了那次座谈会。”

「張虎さんは特級教師としてその座談会に参加した。」

b “**把自己的研究所得作为一家之言贡献给读者。**”

「自分たちの研究を一家の言として読者に献げる。」

c “**作为特例，统战部收下了这份礼物。**”

「特例として、統一戦線部はこの贈り物を受け取った。」

Ⅱ．相違点

次に、両言語のそれぞれの語句が対応していない点を以下Ａ～Ｃ示す。

Ａ．(6) が示すように、中国語の“**对**”は、具体的な動作を表す動作動詞と共起し、「具体的な方向」と、上記の動作動詞が要求する「対象」とを示すことができるのに対し、(7) が示すように、日本語の「に対して」は、それらを示すことができない。言い換えれば、日本語の「に対して」は、「具体的な方向」を表せず、「見る」などのような具体的な動作を表す動作動詞とは共起しない。

（６） a“ **对床上开枪。**”

b＊「ベッドに対して（○へ向けて）撃つ。」

（７） a “**他对那个铅笔盒看了一眼。**”

b＊「彼はその筆箱に対して（○を）ちらりと見た。」

a′ “**他看了那个铅笔盒一眼。**”

b′ 「彼はその筆箱をちらりと見た。」

Ｂ．(8) が示すように、日本語の「について」は、「感謝する」のような「抽象的な方向性+対象」を要求する動詞と共起するが、中国語の“**关于**”は、それとは共起しない。中国語では、“**感谢**”のような「抽象的な方向性+対象」を要求する動詞は、“**关于**”ではなく、“**对**”または“**对于**”と共起する。

（８）a「同じテーブルに座り、出席してくれたことについて感謝しています。」

b＊“ 关于（○ 对于）对方能出席调解会，并同我坐在同一张卓子上一事，表示感谢。”

C．（9）と（10）が示すように、述部や文などとの関連を示す場合、中国語の“作为”は、日本語の「として」に対応しない場合もある。具体的に説明すると、述部や文などとの関連を示す場合、日本語は、「として」に先行する名詞が「一環、心理、可能性」などのような、「方式・手段」を表す語と、「仕事、行政」などの、「方式・手段」を明確に表さない語との、二種類がある。「方式・手段」を表す語の一部（「直感、はけ口」など）は、“作为”とは共起しにくいし、「方式・手段」を明確に表さない語（「仕事」、「行政」）は “作为”とは共起しない。

（９）a 「彼の直感として」

b??“ 作为他的直觉”

c “ 凭他的直觉”

（１０）a 「急場の医療行政として」

b??“ 作为应急的医疗行政”

c “ 作为应急的医疗（行政的「行政の」）措置”

以上まとめると、日本語の複合格助詞（「に対して」、「について」、「として」）と、中国語の介詞（“对”、“关于”、“作为”）とは、それぞれ先行する名詞と、その介詞賓語と一体となって、文の実質的な主語（「としては」、“作为…来说”）、

文の実質的な目的語（「に対して」・「について」、“对”・“关于”）、文の主語、目的語、述部または文全体との関連（「として」、“作为”）を、示す場合がある。

ただし、上記のように、日本語の複合格助詞（「に対して」、「について」、「として」）と、中国語の介詞（“对”、“关于”、“作为”）とは、対応を示す一方、a．“ 对”は「具体的な方向」を示すことができるのに対し、「に対して」はそれを示すことができない。b．「について」は「抽象的な方向性+対象」を要求する動詞と共起するが、“关于”は、それとは共起しない。c．述部や文などとの関連を示す場合、「として」に先行する名詞が「方式・手段」を表す語と、「方式・手段」を明確に表さない語との、二種類がある。前者の一部は、“作为”とは共起しにくいし、後者は “作为”とは共起しないなど、それぞれに不対応も存在する。

２．本論文の成果と両国語の学習

日本語の複合格助詞と中国語の介詞は、それぞれ中国人の日本語学習者と、日本人の中国語学習者にとっては、学習上の難関であると言われている。

例えば、日本語の「に対して」と中国語の“对”は、対応する点が多いため、

「に対して」＝“对”

と、1 対 1 の対訳語と捉えてしまい、中国人の日本語学習者の場合なら、自分の母語（中国語）で“对”を使えるところは全て「に対して」を使ってしまうといった、いわゆる〈母語の干渉〉による誤用を引き起こしがちである。しかし、本論文は、「に対して」、「について」、「として」と、“对”、“关于”、“作为”とを中心に、その対応関係をまとめ、上記の対応と不対応を指摘し、さらに何故そのような不対応があるのかについても検討した。本論文の成果は、中国にお

ける日本語学習・日本における中国語学習に活かされることによって、両国のそれぞれの言語学習者が、より自然な学習対象言語を身につけることができるようになるだろう。特に、本論文で研究対象とした日本語複合格助詞「に対して」、「について」、「として」・中国語介詞“对”、“关于”、“作为”は、論説的文章に必須の言語形式であるから、本論文の成果は、両言語の学術的文章や科学技術分野の文章のより正確な翻訳にも活かされるべきものと言えよう。

また、本論文は、「一語化」の進み方の相違により、「について」と「については」、「として」と「としては」とは、それぞれ区別されるべき二つの用法であることを主張した。それは中国語との対応関係からも明確である。具体的に説明すると、「について」と“关于”、「として」と“作为”とが対応しているのに対し、「については」と“至于”、「としては」と“作为…来说”とが対応している。このようなことは、従来の両国語対訳辞書では、ほとんど明記されておらず、両国語それぞれの学習者の誤用を誘発していた事柄なのである。これらのことを明確に記述することができたのも、語用論的観点を取り入れた対照研究を心がけた本論文の成果といえるだろう。

本論文におけるこれらの成果は、中国人の日本語学習者と日本人の中国語学習者とが、複合格助詞と介詞という学習上の難関を突破する上で役立つし、ひいては日本語教育と中国語教育に貢献できる。

３．今後の課題

日本語の複合格助詞と中国語の介詞との対照研究には、次のような残された課題もある。

本論文では、日本語の複合格助詞「に対して」、「について」、「として」及び「Ｎに対するＮ」と、中国語の介詞“对”、“关于”、“作为”及び“对Ｎ的Ｎ”との対応関係について考察を加える際に、主として、日本語の複合格助詞に先行する名詞、中国語の介詞の賓語、文の主語、述語の性質（どのような語またはフレーズで構成されたのかなど）、及び「複合格助詞に先行する名詞と介詞の賓語」成分と文の他の成分との関連などを考察の対象として論を進め、上記の複合格助詞と介詞との対応関係について、基本的にその全貌を掴めたと考える。

しかし、今後、複合格助詞全体と、それに相応する介詞との対照研究を展開し、文構造における、日本語の複合格助詞と、それに相応する中国語の介詞を体系的に位置付けるという考察が、欠かせない作業であると考える。それを今後の課題にしたい。

また、前節で、本論文で明らかになったことが日本語・中国語それぞれの言語学習に役立ち得ることをのべたが、そのような言語教育上の成果を生むためにどのような学習カリキュラム・教材・教育法を組み立てればよいかという、本論文の成果をより実践的に活かすための方策を考えることも今後に残された課題である。本論文の筆者は、今後母国（中国）に帰って、日本語の研究と教育に携わっていくこととなるが、その実践の中で今後の課題を実践的に解決していきたいと考える。

参考文献：

白　荃（1992）论作主语的介词结构“从…到…”,《汉语学习》第 1 期

北京大学中文系 1955 级、1957 级语言班编（1982）《现代汉语虚词例释》, 商务印书馆書館

北京大学中文系现代汉语教研室编（1993）《现代汉语》, 商务印书馆

陈淑梅（1999）“作为”的动词用法和介化用法,《汉语学习》第 2 期

成春有（1994）汉日动词名词的兼类与转化,《日语学习与研究》第 4 期

戴耀晶（1998）现代汉语动作类二价动词探索,《中国语文》第 1 期

狄昌运（1996）《怎样说得对？- 日本人汉语学习中常见语法错误辨析》北京语言文化大学出版社

丁树生等（1979）《现代汉语语法讲话》, 商务印书馆

范开泰、张亚军（2000）《现代汉语语法分析》, 华东师范大学出版社

范晓、朱晓亚（1998）三价动作动词形成的基本句模,《汉语学习》第 8 期

方绪军（2000）《现代汉语实词》, 华东师范大学出版社

冯志纯（1986）试论介宾短语作主语,《语言教学与研究》第 4 期

傅雨贤、周小兵、李炜、范干良、江志如（1997）《现代汉语介词研究》, 中山大学出版社

郝全梅（1999）浅析公文标题中介词“关于”的使用，《语文研究》山西省社会科学院

侯学超编（1998）《现代汉语虚词词典》，北京大学出版社

胡裕树主编(1981)《现代汉语》(增订本)，上海教育出版社

胡裕树、范晓（1994）动词形容词的“名物化”和“名词化”《中国语文》第239期

胡裕树、范晓主编（1995）《动词研究》，河南大学出版社

黄国荣等（1983）《实用现代汉语语法》，甘肃人民出版社

黄锦章（1997）《汉语格系统研究》，上海师范大学出版社

金昌吉（1996）谈动词向介词的虚化，《汉语学习》第2期

金昌吉（1997）汉语的介词、介词短语与格《语言研究论丛》第七辑，南开大学中文系

李大忠（1996）《外国人学习汉语语法偏误分析》北京语言文化大学出版社

李临定（1988）《汉语比较变换语法》，中国社会科学出版社

李临定（1990）《现代汉语动词》，中国社会科学出版社

李明玉（1991）日语连体格助词「の」和汉语结构助词「的」的比较，《日语学习与研究》第1期

李晓琪等（1996）《新汉语教程ⅠⅡⅢ》，北京大学出版社

李晓琪（1998）论对外汉语虚词教学，《世界汉语教学》第 3 期北京语言文化大学

李小荣（2000）从配价角度考察“对于……”作定语的情况，《配价理论与汉语语法研究》语文出版社

李裕德（1979）主语能不能放在介词结构当中，《中国语文》第 1 期

廖平（1979）也谈主语能不能放在介词结构当中，《中国语文》第 5 期

蔺横（1997）现代汉语介词的语法作用，《语文研究》第 2 期

刘勋宁（1998）《现代汉语研究》，北京语言文化大学出版社

刘顺（1998）“对”字短语作定语的歧义问题，《汉语学习》第 3 期

刘月华、潘文娱等（1983）《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社

刘月华（1989）《汉语语法论集》现代出版社

鲁川（1987）介词是汉语句子语义成分的重要标志，《语言教学与研究》第 2 期

鲁川、缑瑞隆、刘钦荣（2000）交易类四价动词及汉语谓词配价的分类系统，《汉语学习》第 6 期

陆俭明（1982）关于定语的易位现象，《中国语文》第 3 期

陆俭明、马真（1995）《现代汉语虚词散论》，北京大学出版社

卢福波（1996）《对外汉语教学实用语法》，北京语言文化大学出版社

吕叔湘（1979）《汉语语法分析问题》，商务印书馆

吕叔湘主编（1980）《现代汉语八百词》，商务印书馆

吕叔湘（1983）《吕叔湘语文论集》，商务印书馆

马真（2001）《简明实用汉语语法教程》，北京大学出版社館

孟琮等（1999）《汉语动词用法词典》，商务印书馆

潘晓东（1981）浅谈定语的易位现象，《中国语文》第 4 期

齐沪扬（2000）《现代汉语短语》，华东师范大学出版社

齐沪扬、张天明（2001）汉语与日语的时相比较研究《世界汉语教学》，北京语言

文化大学出版社

秦礼君（1993）日语补格助词与汉语介词，《日语学习与研究》第 1 期

饶长溶（1987）"关于""至于"不象介词，《汉语学习》第 1 期

饶长溶（1997）《汉语层次分析录》，北京语言文化大学出版社館

山田留里子（1999）《汉日定语比较研究》（日中両国語の連体修飾に関する比較研究），北京大学出版社

邵霭吉（1979）关于《主语能不能放在介词结构当中》，《中国语文》第 5 期

沈开木（1991）"介词"的定义及其它，《语文月刊》第 2 期，华南师范大学

沈开木（1991）"介词"的定义及其它(续)，《语文月刊》第 3 期，华南师范大学

沈家煊（2000）句式和配价，《中国语文》第 4 期

沈阳、郑定欧主编（1995）《现代汉语配价语法研究》，北京大学出版社

沈阳主编（2000）《配价理论与汉语语法研究》，语文出版社

施建军（2001）关于汉、日语格成分主题化的异同，《日语学习与研究》第 4 期

向卿（1998）论汉日名词与动词的转化，《日语学习与研究》第 2 期

邢福义（1980）关于“从…到…”结构，《中国语文》第 5 期

邢福义（1986）《语法问题探讨集》，湖北教育出版社

邢福义（1995）《语法问题思索集》，北京语言学院出版社書館

邢福义（1996）《汉语语法学》，东北师范大学出版社

徐浩良、陈炯（1985）略说“对”字短语的类型，《中国语文通讯》第 5 期

王建勤（1992）介词“对于”的话语功能，《语言教学与研究》第 1 期

王伟丽（2000）汉语配价语法研究的新动向，《汉语学习》第 3 期

吴起主、李裕德（1986）《现代语法“构件”语法》，湖北教育出版社

吴为章（1982）单向动词及其句型，《中国语文》第 5 期

姚继中（1996）日汉动宾结构比较研究，《日语学习与研究》第 3 期

余大光（1980）“从…到…”是介词结构吗，《中国语文》第 5 期

輿水優（1991）外国人学习汉语的难点，《中国语文》第 221 期

袁毓林（1995）现代汉语二价名词研究，《现代汉语配价语法研究》北京大学出版社

袁毓林（1998）《汉语动词的配价研究》江西教育出版社

袁毓林、郭锐主编（1998）《现代汉语配价语法研究》(二)，北京大学出版社

张斌主编（1996）《现代汉语》，中央广播电视大学出版社

张伯江、方梅（1996）《汉语功能语法研究》，江西教育出版社

张国宪、周国光（1997）索取动词的配价研究，《汉语学习》第 3 期

张虹（1993）谈谈状语和定语的转换，《汉语学习》第 2 期

张静（1987）《汉语语法问题》，中国社会科学出版社

张静等（1982）《新编现代汉语》，上海教育出版社

张文周（1990）能在判断句中作主语的一种介词结构，《中国语文》第 3 期

张谊生（2000）《现代汉语虚词》，华东师范大学出版社

张永胜（1992）浅谈介词“对”和“对于”用法的异同《语文学刊》，内蒙古师范大学

趙博源（1999）《漢日比較語法》（中日比較文法），江蘇教育出版社

赵淑华（1996）介词和介词分类，《词类问题考察》北京语言学院出版社

朱德熙（1982）《语法讲义》，商务印书馆

朱德熙（1985）《现代汉语语法研究》，商务印书馆書館

朱一之编（1990）《现代汉语语法术语词典》，华语教育出版社

相原茂・石田知子・戸沼市子（1996）:『中国語文法書』同学社
青木伶子（1991）:『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院
石綿敏雄・荻野孝野（1983）「結合価から見た日本文法」『朝倉日本語新講座 3 文法と意味Ⅰ』朝倉書店
石綿敏雄（1999）:『現代言語理論と格』ひつじ書房
梅原恭則（1991）:「助詞の構文的機能」『講座日本語と日本語教育４　日本語の文法・文体（上)』明治書院
江田すみれ（1987）:「「名詞+のこと」の意味と用法について―「について」とのかかわり― 」『日本語教育』62 号
大河内康憲編（1992）:『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
大河内康憲（1997）:『中国語の諸相』白帝社
大河内康憲教授退官記念論文集刊行会編『大河内康憲教授退官記念中国語学論文集』（1997）: 東方書店
奥津敬一郎・徐昌華（1982）:「日本語と中国語の比較構文―“ホド”を中心として」『都大研究』19 号
奥津敬一郎（1983）:「変化動詞文における形容詞移動」『副用語の研究』明治書院
奥津敬一郎・沼田善子・杉本武（1986）:『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
奥津敬一郎（1995～1997）:「連用即連体？」『日本語学』1995 年 11 月号～1997 年 9 月号　明治書院
小矢野哲夫（1985）:「形容詞のとる格」『日本語学』3 月号　明治書院
小矢野哲夫（1991）:「名詞の格」『講座日本語と日本語教育４　日本語の文法・文体（上)』明治書院
金子尚一（1983）:「日本語の後置詞」『国文学　解釈と鑑賞』第 48 巻 6 号　至文堂
神尾昭雄（1980）:「「に」と「で」〈日本語における空間的位置の表現〉」『言語』9 月号　大修館書店
川端善明（1986）:「格と格助詞とその組織」『論集日本語研究(一)　現代編』明治書院
北原保雄（1981）:『日本語の世界 6 日本語の文法』中央公論社
北原保雄（1981）:『日本語助動詞の研究』大修館書店
北原保雄・鈴木丹次郎・武田孝・増淵恒吉・山口佳紀編（1981）:『日本文法事典』有精堂
北原保雄編（1982）:『日本語文法論術語索引』有精堂
木村英樹（1982）:「中国語」『講座日本語学 11　外国語との対照Ⅱ』明治書院
木村英樹（1990）:「中国語の指示詞―「コレ／ソレ／アレ」に対応するもの」

『日本語学』3 月号　明治書院
金田一春彦他編（1988）:『日本語百科大辞典』大修館書店
久野暲（1973）:『日本文法研究』 大修館書店
久野暲（1983）:『新日本文法研究』 大修館書店
久野暲・柴谷方良編（1989）:『日本語学の新展開』くろしお出版
顧海根・徐昌華（1980）:「中国人学習者によくみられる誤用例（一）－動詞，形容詞，代名詞などを中心に－」『日本語教育』41 号
顧海根（1981）:「中国人学習者によくみられる誤用例（二）－動詞，形容詞，代名詞などを中心に－」『日本語教育』44 号
顧海根（1983）:「中国人学習者によくみられる誤用例－格助詞，係助詞「も」，接続助詞「て」などを中心に」『日本語教育』49 号
国語学会編（1955）:『国語学辞典』東京堂
国立国語研究所（永野賢）（1951）:『現代語の助詞・助動詞―用法と実例』国立国語研究報告 3　秀英出版
国立国語研究所（西尾寅弥）（1972）:『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究報告 44　秀英出版
国立国語研究所（宮島達夫）（1972）:『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究報告 43　秀英出版
国立国語研究所（1997）:『日本語における表層格と深層格の対応関係』 国立国語研究報告 113　三省堂
グループ・ジャマシイ編（1998）:『日本語文型辞典』くろしお出版
輿水優（1985）:『中国語の語法の話―中国語文法概論』 光生館
小高愛（1999）:「動詞派生の後置詞「とって」」『千葉大学留学生センター紀要』五
佐伯哲夫（1966）:「複合格助詞について」『言語生活』7 月号　筑摩書房
佐伯哲夫（1976）:『語順と文法』笠間書院
佐治圭三教授古稀記念論文集編集委員会編(2000):『日本と中国ことばの梯　佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版
佐藤喜代治編（1977）:『国語学研究事典』　明治書院
佐藤尚子（1989）:「現代日本語の後置詞の機能――『～について』と『～に対して』を例として」――『国語研究』第 7 号 横浜国立大学国語国文学会
柴谷方良（1984）:「格と文法関係」『言語』３月号　大修館書店
城田俊（1981）:「格助詞の意味」『国語国文』50 巻 4 号　京都大学国語国文学会
城田俊（1999）:『日本語形態論』ひつじ書房
徐愛紅（2001）:「希望表明形式による意志表示 ―日中両語を対照して―」『日

本語教育』109 号
杉村博文（1994）:『中国語文法教室』大修館書店
鈴木重幸（1972）:『文法と文法指導』むぎ書房
鈴木重幸（1973）:『日本語文法・形態論』むぎ書房
鈴木義昭（1985）:「中国語教育と日本語教育－中国語教育の視点から」『日本語教育』55 号
鈴木康之（1979）:「規定語と他の文の成分との移行関係」『言語の研究』むぎ書房
砂川有里子（1987）:「複合助詞」『日本語教育』62 号
関正昭（1989）:「評価述定の誘導成分となる複合助詞について」『日本語教育』68 号
高橋太郎（1983a）:「構造と機能と意味―動詞の中止形（～シテ）とその転成をめぐって一」『日本語学』12 月号　明治書院
高橋太郎（1983b）:「動詞の条件形の後置詞化」『副用語の研究』明治書院
高橋太郎（1994）:『動詞の研究』むぎ書房
高橋弥守彦他編（1995）:『中国語虚詞類義語用例辞典』白帝社
田窪行則・木村英樹（1992）:「中国語, 日本語, フランス語における三人称名詞の対照研究」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
張威（1998）:『結果可能表現の研究　日本語・中国語対照研究の立場から』くろしお出版
張麟声（2001）:『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク
蔦原伊都子（1984）:「～について」『日本語学』10 月号　明治書院
塚本秀樹（1987）:「日本語における複合動詞と格支配」『言語学の視界』大学書林
塚本秀樹（1990）:「日本語と朝鮮語における複合格助詞について」『アジアの諸言語と一般言語学　西田龍雄教授還暦記念論文集』三省堂
塚本秀樹（1991）:「日本語における複合格助詞について」『日本語学』3 月号　明治書院
寺村秀夫（1982）:『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』　くろしお出版
寺村秀夫（1982）:『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』　くろしお出版
寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人編（1987）:『ケーススタディ日本文法』桜楓社
寺村秀夫（1991）:『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』　くろしお出版
中川正之（1976）:「日中両国語における譲歩不可能名詞について」『中国語学』223 号　日本中国語学会

中川正之（1995）:「単語の日中対照」『日本語学』5 月号　明治書院
中島悦子（1990）:「日本語と中国語の条件表現－「と」と“一”と“就”を中心に」『日本語教育』72 号
中島悦子（1994）:「日中条件表現の対照」『日本語学』8 月号　明治書院
永野賢（1953）:「表現文法の問題―複合辞の認定について―」『金田一博士古希記念言語・民俗論叢』三省堂
新川忠（1986）「「に格の名詞句と動詞とのくみあわせ」とそれに対応する中国語の表現手段」『教育国語』84 むぎ書房
西田直敏（1993）:『日本文法の研究』和泉書院
日中言語対照研究会（1999）:『日中言語対照研究論集』第 1 号
日中言語対照研究会（2000）:『日中言語対照研究論集』第 2 号
日中言語対照研究会（2001）:『日中言語対照研究論集』第 3 号
日中言語対照研究会（2002）:『日中言語対照研究論集』第 4 号
仁田義雄（1975）:「形容詞の結合価」『文芸研究』第七十九集　日本文芸研究会
仁田義雄（1982）:「格の表現形式　日本語」『講座日本語学 10　外国語との対照Ｉ』明治書院
仁田義雄（1986 ）:「格体制と動詞タイプ」『ソフトウエア文書のための日本語処理の研究』情報処理振興事業協会
仁田義雄（1988）:『語彙論的統語論』明治書院
仁田義雄編（1991）『日本語ヴォイスと他動性』くろしお出版
仁田義雄（1991）:『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
仁田義雄編（1993）:『日本語の格をめぐって』くろしお出版
仁田義雄（1997）:『日本語文法研究序説』くろしお出版
仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人（2000）:『文の骨格』日本語の文法１　岩波書店
日本語教育学会編（1982）:『日本語教育事典』大修館書店
丹羽哲也（1989）:「無助詞格の機能―主題と格と語順」『国語国文』58 巻 10 号　京都大学国語国文学会
野村剛史（1985）:「～にとって／～において／～によって」『日本語学』10 月号　明治書院
野田尚史（1991）:『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
野田尚史（1996）:『「は」と「が」』くろしお出版
菱沼透（1980）:「中国語と日本語の言語干渉―中国人学習者の誤用例―」『日本語教育』42 号
藤堂明保（1987）:『中国語学論集』汲古書院
藤堂明保・相原茂（1985）:『新訂中国語概論』大修館書店

馬小兵（1996a）：**试论表示允许范围的**「で」,《日語学習与研究》**第 3 期**

馬小兵（1996b）:「許容範囲を指示する「で」の用法について」『筑波日本語研究』創刊号　筑波大学日本語学研究室

馬小兵（1997a）:『日本語の「格」と述語関係についての研究』1995 年度富士ゼロックス小林節太郎記念基金研究助成

馬小兵（1997b）:「複合助詞「として」の諸用法」『日本語と日本文学』24 号　筑波大学国語国文学会

馬小兵（1997c）:「「立場・資格」を表す「として」の用法について―「に・で」との比較を中心に―」『筑波日本語研究』第二号　筑波大学日本語学研究室

馬小兵（2001）:「中国語の介詞“**对**”と日本語の複合格助詞「に対して」」『日中言語対照研究会第 4 回大会発表要旨』

馬小兵（2002a）:「日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“**关**于”―その対応関係を中心に―」『日本語と日本文学』34 号　筑波大学国語国文学会

馬小兵（2002b）:「中国語の介詞“作**为**”と日本語の複合格助詞「として」―「資格・立場」を表す“作**为**”と「として」を中心に―」『日中言語対照研究論集』第４号　日中言語対照研究会

馬小兵（2002c）：**试论日语复合格助词**「について」**与汉语介词“关于”-以“关于”为中心,《汉日语言研究文集》五，北京外国语大学**

馬小兵（2002d）「中国語の“**对**+N_1+的+N_2”と日本語の「N_1+に対する+N_2」について」『文教大学文学部紀要』　第 16-1 号

益岡隆志（1987）:『命題の文法』くろしお出版

益岡隆志・田窪行則（1987）:『格助詞』くろしお出版

益岡隆志（1991）:『モダリティの文法』くろしお出版

益岡隆志・野田尚史・沼田善子編（1995）:『日本語の主題と取り立て』くろしお出版

松木正恵（1995）:「複合助詞の特性」『言語』11 月号　大修館書店

丸山直子（1990）:「格助詞と格と結合価」『計量国語学』17－4

丸山直子（1995）:「はなしことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19－8
三井正孝（1993）:「ニトツイテ格の意味」『静岡英和女学院短期大学紀要』　第二十五号
三井正孝（2001）:「ニトッテ格の共起条件」『新潟大学国語国文学会誌』　第四十三号
水野義道（1985）:「接続表現の日中対照」『日本語教育』56 号
水野義道（1987）:「場所を示す中国語の介詞〈在〉と日本語の格助詞「ニ」「デ」」『日本語教育』62 号
水野義道（1993）:「日本語の「の」と中国語の“的”」『日本語学』10 月号　明治書院
南不二男（1972）:『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男（1993）:『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
宮島達夫（1986）:「格支配の量的側面」『論集日本語研究(一)　現代編』明治書院
宮島達夫(1987):「格の共存と反発」『計量国語学と日本語処理―理論と応用―』秋山書店
宮島達夫・仁田義雄編（1995）:『日本語類義表現の文法』（上・下）くろしお出版
村木新次郎（1982）:「動詞の結合能力をめぐって」『日本語教育』47 号
村木新次郎（1987）:「動詞の結合能力からみた名詞」『国文学　解釈と鑑賞』52 巻 2 号　至文堂
村木新次郎（1987）:「日本語の後置詞をめぐって」『日語学習与研究』第 3 期
村木新次郎（1996）:『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
望月八十吉（1994）:『現代中国語諸問題』好文出版
森田良行（1983）:『日本語の表現』創林社
森田良行（1988）:『日本語の類義表現』創拓社
森田良行（1989）:『基礎日本語』角川書店
森田良行（1990）:『日本語学と日本語教育』凡人社
森田良行・松木正恵（1989）:『日本語表現文型』アルク株式会社
森田良行（1994）:『動詞意味論的文法研究』明治書院
守屋宏則（1995）:『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東方書店
森山卓郎（1988）:『日本語動詞述語文の研究』明治書院
森山卓郎（1998）:「行為要求文への肯定的応答―日中対照的角度から」『日語学習與研究』第 2 期
森山卓郎（2000）:『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房

山岡政紀（2000）:『日本語の述語と文機能』くろしお出版
山下明昭・山内博之・島田麻美（1994）:「に対しての文法機能」『国語と教育』18 号　大阪教育大学
矢澤真人（1983）:「情態修飾成分の整理－被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察－」『日本語と日本文学』3 号　筑波大学国語国文学会
矢澤真人（1985）:「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』二三
矢澤真人（1987）:「連用修飾成分による他動詞文の両義性－状態規定の『～デ』と他動詞文の修飾構成について」『国語国文論集』16 学習院女子短期大学国語国文学会
矢澤真人（1989）:「修飾語と並立語」（北原保雄・山口佳紀編トル）『講座日本語と日本語教育第４巻　日本語の文法・文体（上）』明治書院
矢澤真人（1991）:「序列と連用修飾－コトの中のモーダルな修飾成分の取り扱い」『国語国文論集』20　学習院女子短期大学国語国文学会
矢澤真人（1992）:「格の階層と修飾の階層」『文芸言語研究言語篇』21　筑波大学文芸・言語学系
矢澤真人（1993a）:「副詞句と名詞句との意味連関をめぐって」『国文学　解釈と鑑賞』58 巻 1 号　至文堂
矢澤真人（1993b）:「いわゆる「形容詞移動」について」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂
矢澤真人（1994）:「「格」と階層」『森野宗明教授退官記念論集言語・文学・国語教育』三省堂
矢澤真人（1997）:「語順から構文類型へ」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書　平成９年度Ｉ』筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究組織
矢澤真人（2001）:「「格」をめぐる研究」『国文学　解釈と教材の研究』46 巻 2 号　学燈社
山口明穂・秋本守英編（2001）:『日本語文法大辞典』　明治書院
山田進（1993）:「語の形式と意味」『国語学』175 集
山梨正明（1987）:「深層格の核と周辺―日本語の格助詞からの一考察―」『言語学の視界』大学書林
楊凱栄（1990）:「様態助動詞「～ソウダ」とそれに対応する中国語の表現」『日本語教育』72 号
李臨定（1993）:『中国語文法概論』宮田一郎訳　光生館

劉月華・潘文娯他著（1988）:『現代中国語文法総覧』相原茂監訳　片山博美・

　守屋宏則・平井和之共訳　くろしお出版
鹿琮世・藤山和子編著（1988）:『新しい中国語文法』東方書店
渡辺実（1971）:『国語構文論』塙書房
渡辺実編（1983）:『副用語の研究』明治書院

用例資料

用例資料１
『CD-ROM 版　新潮文庫の 100 冊』（発行:新潮社／発売:NEC インターチャネル）所収の、日本人作家による 67 作品全て。以下、作家名（五十音順）・作品名（文庫のタイトル）の順で示す。
赤川次郎「女社長乾杯!」、阿川弘之「山本五十六」、芥川龍之介「羅生門・鼻」、安部公房「砂の女」、有島武郎「小さき者へ・生まれ出づる悩み」、有吉佐和子「華岡青洲の妻」、池波正太郎「剣客商売」、石川淳「焼跡のイエス・処女懐胎」、石川啄木「一握の砂・悲しき玩具」、石川達三「青春の蹉跌」、泉鏡花「歌行燈・高野聖」、五木寛之「風に吹かれて」、伊藤左千夫「野菊の墓」、井上ひさし「ブンとフン」、井上靖「あすなろ物語」、井伏鱒二「黒い雨」、遠藤周作「沈黙」、大江健三郎「死者の奢り・飼育」、大岡昇平「野火」、開高健「パニック・裸の王様」、梶木基次郎「檸檬」、川端康成「雪国」、北杜夫「楡家の人びと」、倉橋由美子「聖少女」、小林秀雄「モオツァアルト・無常という事」、沢木耕太郎「一瞬の夏」、椎名誠「新橋烏森口青春篇」、塩野七生「コンスタンティノープルの陥落」、志賀直哉「小僧の神様・城の崎にて」、司馬遼太郎「国盗り物語」、島崎藤村「破戒」、曽野綾子「太郎物語」、高野悦子「二十歳の原点」、竹山道雄「ビルマの竪琴」、太宰治「人間失格」、立原正秋「冬の旅」、田辺聖子「新源氏物語」、谷崎潤一郎「痴人の愛」、筒井康隆「エディプスの恋人」、壷井栄「二十四の瞳」、中島敦「李陵・山月記」、夏目漱石「こころ」、新田次郎「孤高の人」、野坂昭如「火垂るの墓」、林芙美子「放浪記」、樋口一葉「にごりえ・たけくらべ」、福永武彦「草の花」、藤原正彦「若き数学者のアメリカ」、星新一「人民は弱し　官吏は強し」、堀辰雄「風立ちぬ・美しい村」、松本清張「点と線」、三浦綾子「塩狩峠」、三浦哲郎「忍ぶ川」、三木清「人生論ノート」、三島由紀夫「金閣寺」、水上勉「雁の寺・越前竹人形」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」、宮本輝「錦繍」、武者小路実篤「友情」、村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」、森鴎外「山椒大夫・高瀬船」、柳田国男「遠野物語」、山本周五郎「さぶ」、山本有三「路傍の石」、吉村昭「戦艦武蔵」、吉行淳之介「砂の上の植物群」、渡辺淳一「花埋み」

『朝日新聞』［2000.6～12］社会・経済・政治・国際面　朝日新聞東京本社
『読売新聞』［2000.6～12］社会・経済・総合・国際面　読売新聞東京本社
『毎日新聞』［2000.6～12］社会・経済・総合・国際面　毎日新聞東京本社
『産経新聞』［2000.6～12］社会・経済・総合・国際面　産経新聞東京本社

用例資料２

《骆驼祥子》	**1936**	**老舍舍**	**《老舍小说集》**	**长江文艺出版社**
『駱駝祥子』和訳	1991	中山高志		白帝社
《野火春风斗古城》	1958	**李英儒**		**作家出版社**
『野火と春風は古城に闘う』和訳	1962	立間祥介	『中国現代文学選集』12	平凡社
《林海雪原》	**1959**	**曲波**		**作家出版社**
『樹海と雪の原野に』和訳	1962	飯塚朗	『中国現代文学選集』10	平凡社
《沸腾的群山》	1964	**李云德**		**人民文学出版社**
『沸き立つ群山』和訳	1972	島田正雄他		東方書店
《在同一地平线上》等	1981	**张辛欣《张辛欣代表作》**		**黄河文艺出版社**
『同じ地平に立って』他和訳	1987	飯塚容・山口守	『現代中国文学選集』5	徳間書房
《中华人民共和国宪法》	1982	**第５届全国人民代表第５次会议通过議採択**		
『中華人民共和国憲法』和訳	1992	『中国経済関係法令集』日本国際貿易促進協会		
《锅碗瓢盆交响曲》	1982	**蒋子龙龍**		**上海文艺出版社**
『鍋釜交響楽』和訳	1989	蘇崎		恒文社
《活动变人形》	1984	**王蒙《王蒙文集》**第二卷		**华艺出版社**
『応報』和訳	1992	林芳		白帝社
《红旗谱》(再版)	**1985**	**梁斌《梁斌文集一》**		**百花文艺出版社**
『燃えあがる大地』和訳	1961	松井広光		至誠堂
《黑雪》	**1985**	**叶雨蒙**		**济南出版社**
『黒雪』和訳	1987	朱建栄・山崎一子		同文館

《红高粱家族》	**1987**	**莫言**	**解放军文艺出版社**
『赤い高粱』和訳	1989	井口晃	徳間書店恒
《酩酊国》	**1995**	**莫言**	**作家出版社**
『酒国』和訳	1996	藤井省三	岩波書店
《我的父亲邓小平》	1993	**毛毛**	**中央文献出版社**
『わが父・鄧小平』和訳	1994	長堀祐造他	徳間書店
《『文化大革命』简史》	1996	**席宣、金春明**	**中共党史出版社**
『『文化大革命』簡史』和訳	**1998**	鐙屋一	中央公論社
《土门》	1996	**贾平凹《贾平凹文集》10**	**陕西西人民出版社**
『土門』和訳	1997	吉田富夫	中央公論社
《毛泽东传》	1996	**金冲及主编**	**中央文献出版社**
『毛沢東伝』和訳	2000	田村忠よし他	みすず書店
『黯い潮』	1963	井上靖	新潮社
《暗潮》（中訳）	1987	**唐月梅**	**外国文学出版社**
『砂の器』	1971	松本清張	文芸春秋
《砂器》（中訳）	1998	**孙明德等　　訳**	**群众出版社**
『八つ墓村』	1971	横溝正史	角川文庫
《八墓村》（中訳）	1999	**刘红　　訳**	**珠海出版社**
『犬神家の一族』	1977	横溝正史	角川文庫
《犬神家族》（中訳）	2000	第五賢徳	珠海出版社
『青春の門』	1973	五木寛之	文芸春秋
《青春之门》（中訳）	1987	**万强等　　訳**	**中央文联出版社**
『人間の証明』	1978	森村誠一	角川文庫
《人性的证明》（中訳）	1998	**何培忠等**	**海南出版社、三环出版社**

『野性の証明』	1978	森村誠一	角川文庫
《野性的証明》（中訳）	1998	徐京宁	海南出版社、三环出版社
『青春の証明』	1991	森村誠一	講談社
《青春的証明》（中訳）	1998	丁国桢等	海南出版社、三环出版社
『黄金仮面』	1979	江戸川乱歩　全集６	講談社
《黄金仮面》（中訳）	1999	武继平	珠海出版社
『イブが死んだ夜』	1982	西村京太郎	集英社文庫
《世家迷雾》（中訳）	2000	龚志明	珠海出版社
『夜行列車殺人事件』	1985	西村京太郎	光文社文庫
《凌晨三点钟的罪恶》（中訳）	2000	龚志明	珠海出版社
『棲息分布』	1983	松本清張	文芸春秋
《孤狼》（中訳）	1987	宋金玉	珠海出版社
『夜行の階段』	1978	松本清張	新潮出版
《女人階梯》（中訳）	2000	朱书民	法律出版社
『Ｍの悲劇』	1993	夏樹静子	光文社文庫
《Ｍ的悲剧》（中訳）	2000	杨军楊軍	中国国际广播出版社
『Ｗの悲劇』	1993	夏樹静子	光文社文庫
《Ｗ的悲剧》（中訳）	2000	杨军楊軍	中国国际广播出版社
『Ｃの悲劇』	1993	夏樹静子	光文社文庫
《Ｃ的悲劇》（中訳）	2000	杨军楊軍	中国国际广播出版社
『塗られた本』	1986	松本清張	講談社文庫
《被玷污的书》（中訳）	2000	朱书民等	珠海出版社

本論文の構成と既発表論文との関係

序　章

新規執筆

第一章

馬小兵（2001）「中国語の介詞“**对**”と日本語の複合格助詞「に対して」」『日中言語対照研究会第 4 回大会発表要旨』

第二章

馬小兵（2002a）「日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞“**关**于”—その対応関係を中心に—」『日本語と日本文学』34 号　筑波大学国語国文学会

馬小兵（2002c）「**试论日语复合格助词**「について」**与汉语介词“关于” - 以“关于”为中心**」《**汉日语言研究文集**》**五 北京外国语大学**

第三章

馬小兵（1997b）「複合助詞「として」の諸用法」『日本語と日本文学』24 号　筑波大学国語国文学会

馬小兵（1997c）「「立場・資格」を表す「として」の用法について—「に・で」との比較を中心に—」『筑波日本語研究』第二号　筑波大学日本語学研究室

馬小兵（2002b）「中国語の介詞“作为”と日本語の複合格助詞「として」—「資格・立場」を表す“作为”と「として」を中心に—」『日中言語対照研究論集』第４号　日中言語対照研究会

第四章

馬小兵（2002d）「中国語の“对+N_1+的+N_2”と日本語の「N_1に対するN_2」について」『文教大学文学部紀要』　第 16-1 号

結　章

新規執筆